

---

# 赤ずきんちゃんには気をつけて

kuu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤ずきんちゃんには気をつけて

### 【Nコード】

N3593T

### 【作者名】

kuu

### 【あらすじ】

平凡でのどかな村に「素性は詮索しないで欲しい」という謎の客人が滞在することになった。美しい少女と従者の青年は、平穏な暮らしの中で次第に赤ずきんの少女と親しくなり…やがて、お互いが抱える秘密と苦悩を共有してゆく。

暗殺者から逃れるために旅を続けているお嬢様と、理由を知らされぬまま『本当の名前』を秘めているリーナ。

17世紀欧州某国の農村と王都を舞台に、二人の少女が自らの運命に立ち向かう物語。（序盤はゆっくりと進むお話です）

## 登場人物紹介（前書き）

視点移動が多いお話になりそうなので、  
最初に簡単な主要登場人物の紹介を載せます。

## 登場人物紹介

赤ずきんちゃん 〃 リーナ 7歳

孤児院で5歳まで育てられ、二年前にジャックに引き取られてイルウク村へ。

賢くて口が達者な可愛い女の子。

艶やかな栗毛に萌葱色もえぎの瞳。

ジャック 25歳

イルウク村でちいさな果樹園を営む青年。

お人よしで優しく、植物の世話や品種改良が得意。

亜麻色の髪、緑色の瞳。

マリナ 21歳

村一番のおっとり系天然美人。

村長の一人娘であり、ジャックの妻。

栗毛に金色の瞳

アルト 10歳

村長の末の息子でマリナの弟。

いろんなことに素直になれない反抗期なツンデレ少年。

ダークブラウンの髪と瞳。

ロナルド 52歳

村長。愛称はロン。温厚で心配性。村人から愛されている村長。

三男一女のお父さん。

(長兄カイト(25歳)は王都で文官、次兄クルト(23歳)は隣のタトウク村へ婿入り)

愛妻家で、妻のハンナには今でもらぶめる。



## 登場人物紹介（後書き）

2011・05・24

セドリツクの年齢変更、地名追加。

2011・07・12

リーナの瞳の色、変更。

2011・08・12

王都名、追加

2011・09・29

ジャックの瞳の色、変更。

（リーナと一緒に変えなければならないのに忘れていました）

## プロローグ（前書き）

セドリック（従者） 視点

## プロローグ

主あるじの目の前の椅子に座っている初老の男は、先ほどからしきりにハンカチで額の汗を拭っている。

「…わたくしどもの村は、確かに馬に早駆けさせれば、王都から一日で着きます。」

静養を必要とされているお嬢様の身体の負担を考え、比較的近い距離にあつて都合が良いというお話も理解できますが、途中に凶暴な狼が出没する森があるため、長年の間：保養地や観光地としては栄えていない…農業で生計を立てているちいさな村です。とても尊き身分の方に満足いただけるような場所ではなく…」

恐縮した体ていで遠まわしに…こちらから断るように…話を進める男の顔を、主はきよとんつとした表情で見つめた。

「…あら、でも、イルウク村には、長期滞在を希望する方が借りることができると聞いていると聞いていたのだけれど…？」

主の無邪気で可憐な表情に、男は一瞬言葉無くしていた。  
私わたしはその見事な演技力に心の中で拍手喝采を送りつつ、黙って主の背後に控え続ける。

「あることにはあるのですが…その…ちいさなお子様連れのご家族が、つかの間の田舎生活を楽しむための…普通の古民家を改造した家なのです。とてもとても貴族様にご滞在いただけるような…」

語尾を濁しながらも尚今回の話を断ろうとする男に、主は微笑みながら問いかける。

「…私が『貴族』だと思いのなの？ それが遠まわしに断ろうとする理由なのかしら、村長さん？」

「…いえ、その…あの…そういうわけではございません」

「それについては、私は否定しないけれど、肯定もしないわ」

「…。」

主は美しいプラチナブロンドの髪を右手で書き上げると、空色のアクアマリンの瞳を煌かせる。

「だって、私、もう決めてしまったから」

「……は？ なにを…で、ございますか？ お嬢様」

「イルウク村に滞在することを」

にここに、にっこり。

主は満面の笑顔でそう言い切ると、私に命じた。

「セドリック、前金を村長さんにお渡しして」

「はい……ご主人様」

つい、いつものように主の名前を口にしそうになった自分を戒めながら、初老の男…イルウク村の村長の前のテーブルに、金貨の詰まった小袋を中身が見えるように置いた。

チャリ…と音を立てた袋に、村長の目は一瞬釘付けになる。

「私知っておりますのよ？ 先月の台風で、イルウク村の水車が壊れてしまったこと。農作物にも随分と被害が出たそうですね。お気の毒ですわ」

「…え、ええ…」

「なのに、国からの支援は微々たるものだとか」

「…はあ…」

主の計画通りの演技はまだ続いているが、村長は金貨を目の前にして気がそぞろになっっているようだ。

単純な相槌しか返していない。

村長が『落ちる』のはもうすぐだな…と、私は確信を持った。

「私、イルウク村の野菜や果物の美味しさを知ってから、どんな場所でのように作られているのか見たいと思っただけです。ですから、今回体調を崩して…自然の豊かな場所で静養するようにとお医者様に言われたとき、チャンスだと思いました。私の好奇心を満たして、静養もできて、お気に入りの村を支援できる機会が巡ってきたのですから。」

私が村の方々に望むのは、些細なことです。『私の素性を一切詮索しない』これだけですわ。あとは普通の…村の少女たちと同じ扱いをしてくだされば、十分です」

主は天使の如く清らかな笑顔を浮かべて村長を見つめた後、不安そうに上目遣いで尋ねる。

「村長さんが、どうしても駄目だというのなら、諦めますが…」

「…ああ、いや…その…」

イルウク村の村長はうつむいて煩慮している様子だったが、やがて覚悟を決めたように顔を上げた。

「村民たちは、皆、善良で働き者ではありますが、尊き身分の方々に接する機会が無いため、お嬢様に対して失礼なことをしでかすかもしれません。お嬢様が村で『普通の少女』として扱って欲しいというならば、尚のことです。」

「それでも、その者たちを無礼だとお叱りになることはない…罪に問うことはないとお約束していただけますか？」

村長の問いに、主はゆっくりと頷いた。

「もちろんですわ」

主の言葉に、村長は椅子から立ち上がって深々と頭を下げた。

「承知いたしました。今回のお話、お受けいたします。」

わたしどもの村への過分なご支援…誠にありがとうございます」

『落ちた』。

主の満足げな視線を受けて、私もほんの少しだけ微笑んだ。

その後は主に代わって私がこまごまとした話を村長と取り決めた。滞在する屋敷の間取りの話から、料理と洗濯を任せられる人材の心当たり、食材の配達の話など多岐に渡った。

最後に、「村民に『お忍びで静養しに来た客人の素性を一切詮索しないこと』を周知徹底させる」約束を改めて村長に伝える。

「承知いたしました。…ですが…その…理由をお伺いしても…？」

人の良さそうな村長は、隠す理由が思いつかないのか、首を傾げて尋ねた。

私は予め主と決めておいた答えを口にする。

「……私のご主人様には数々の良いご縁談があり、旦那様もまだお相手を決めかねておいでです。

警備が厳重な本家にいれば問題はありませんが、王都を離れて静養に出かけたと知られれば、求婚者の方々が我先に…ご主人様に直接自分を売りこもうと押し掛けてくるのは、火を見るより明らかなこと。そうなれば静養どころではなくなり、体調は悪化し、ご主人様の心の平安も打ち破られてしまうことでしょう。

そのような事態を防ぐためにも、素性を隠し、情報が漏れないようにしておきたいのです」

切々と…心苦しそうに…訴えかけるように言うと、村長は目をまん丸にしてこくこくと頷いた。

「わかりました。今のお話は、わたくしの胸にだけ留めておきます。ええ、お嬢様のためにも、秘密はお守りいたしますとも！」

こちらを信じきっている善良そうな村長の反応に、私の胸は少しだけ痛んだが…計画通りに事が運んだことの満足感のほうが大きかった。

少し呆れたようにこちらを見ている主の眼差しに気がつき、笑顔で

応じる。

いいえ、ご主人様。

私の演技など、ご主人様には到底敵うものではございませんよ。

目線だけで会話を交わす私たち主従の様子に気がつかずに、村長は辞去の挨拶を済ませると…最後に小声でそつと言いついた。

「赤頭巾をかぶった女の子には、気をつけてくださいね」

……なんだ、それは？

主と私が返す言葉を失っているうちに、村長は足早に出て行った。わざわざ追いかけて問い正すべき内容なのかどうか悩んでいると、主の軽やかな笑い声が部屋の中に響く。

「あはははは！ 赤ずきんちゃんには気をつけて…って、何それ？  
どつという意味なのかな？ 狼さんには気をつけて…って言われるなら、まだわかるけど」

完璧な『お嬢様』の仮面を脱ぎ捨てた主は、腹をかかえて笑っている。

私は主の品のない振る舞いを注意しようとした。

「アリス……」

主の名を呼ぼうとした私の唇に、白くて細い指が当てられた。

「駄目だよ、セドリック。本家を出た瞬間から、常に敵陣にいると思えって言ったのはおまえだよ？ わたくしの名前を呼んではいけませんわ、セドリック。その名前は、秘密なのですから」

後半の芝居がかった主の口調と変わり身に、私は苦笑いを隠せなかった。

謝罪を口にして、改めて主に問いかける。

「村に赴く前に、もう一度村長を呼んで話を聞いておきますか？」

「んー？ その必要は無いんじゃないかな？ 面白そうだし」

「……ご主人様、面白いか面白くないとか、そういう問題では……」

「あー、もう、セドリックは真面目だよね。いっつもそんなだと将来ハゲるよ、きつと」

「それで私の大切なご主人様の安全が保たれるなら、望むところですよ」

「えー？ ハゲの従者なんて嫌だから、そのときはカツラを被ってくれないと、傍には置かないよ？」

「……。」

「冗談だよ」

のらりくらりと話をそらす主の様子からすると、どうやら村長の『

助言』の謎は、解明するよりも後のお楽しみにとっておくつもりらしい。

私は心の中でそっとため息をつきながら、楽しそうに笑う主の顔を見つめた。

これから起こる『惨劇』の中に、つかの間の笑いがあることが、少しでも主の心の救いになれば……と、願いながら。

## プロローグ（後書き）

とりあえず見切り発車でスタートさせました。

（「またかよ！」とツツコミを入れてくださった方、お久しぶりで  
す）

息抜き用の作品なので、更新頻度が一ヶ月に一回あればいいほう  
かも。

のんびりとお付き合いいただければ幸いです。

01 静養の旅（前書き）

セドリック 視点

## 01 静養の旅

一週間後、私と主は王都からイルウク村へ向かって旅立った。

一日以内に着く行程を『旅』と呼べるのか…という判断は微妙なところだが、私たちの本来の居場所…本家のある所領から離れている今、そこに戻れる時が来るまでは『旅』の途中だといえるのかもしれない。

願わくば主と共に生きて戻りたいものだ…と、考えてしまった自身を叱咤する。

生きて『家』に戻るのは、『希望』ではなく『義務』だ。

これまで流されてきた、血と涙を止めるために。  
どんな犠牲を払っても、生き延びる。

自分の考えの内に沈んでいた私に、主が声をかけてくれた。

「…見て御覧なさい、セドリツク。『黒の森』が見えてきたわ」

主は馬車の窓にかけられた薄いレースのカーテンの隙間から外を見ている。

人目を忍ぶ旅ゆえに仕方のないこととはいえ、主が景色すら気楽に見ることのできない境遇を作ったあの御方に対して、ふつふつと怒

りの感情が沸いてくる。

主はそんな私の不機嫌そうな表情を見て、くすくすと笑い出した。

「あらあら、どうしたの？　すごく面白い顔になっているわよ？

ハンサムな顔が台無し」

「……申し訳ございません」

本当にお辛いのは、主だ。

主がなんでもないこととして振舞うのならば、従う私もそれに倣わなければ。

外を一瞥した私は、主のふった話題に答えた。

「黒の森……というのは、針葉樹の葉の色を示しているからだと思っ  
ていましたが、日が差さない森という意味もあったのでしょうか」

鬱蒼とした薄暗い針葉樹の森の道を、4頭立ての4輪馬車は進んで  
ゆく。

一番速い馬車を、というこちらの希望は適えられているようだ。

最新式のこの馬車には、道の凸凹による振動を車体に伝えない緩衝  
装置があるそうで、乗り心地も良好だった。

「さあ、どうかしらね？　地名というものは、伝承や歴史に関わる  
ものが多いから、村の古老に聞けば解るかもしれないけれど」

主は答えながらも、視線は窓の外に向けている。

私は釘を刺すために、キツイ口調で言った。

「ご主人様、まさかとは思いますが、狼の姿を探しているので

はないでしょうね？」

「…あら、いけない？　だって私狼わたくしって見たことがないんですもの」

小首を傾げて無邪気な少女を装う主を見て、私はため息が出るのを抑えられなかった。

「狼は夜行性ですから、日が出ているうちに見かけることは、まず無いでしょう。万が一、村で遭遇したら、のんきに観察していないで、逃げてくださいね」

「まあ、私はそんなお馬鹿さんじゃなくてよ？　自分の安全を確保できていない場所で、危険なことはしないわ」

「　　そうだといいいんですが」

「…まあ、酷い。私わたくしを信用してくれないのですか、セドリック」  
「できたら私わたしの気苦労も減るでしょうね」

心外だと訴えかける主に素っ気なく応じると、主はくすくすと笑い出す。

この方の明るい性格は、旦那様や奥様…そして傍わたくしに仕える者たちの救いとなっている。

そのことを喜ばしいと思うと同時に、気をつけなければならないとも思う。

主の楽天的な性格が、隙を作ることのないように。

少しの油断が、命取りになるかもしれないのだから。

再び堂々と表に姿を現すことができるようになるまで…私一人で主を守り通さなければならぬ。

己の責務を考え、改めて身の引き締まる思いをかみ締めていると、

御者台から声が掛かった。

「お客さん、そろそろ黒の森を抜けますが…森を出たところで休憩をとりますかい？」

御者の言葉に、主は首を振った。

主の意を得た私は、指示を出す。

「いや、休憩は必要ない。このままイルウク村へ向かってくれ」

他人と関わる機会は、少しでも少ないほうがいい。

姿を見せることも、言葉を交わすことも。

最速の馬車で休憩なし…御者には災難だったかもしれないが、まだ日の高い時間に村に到着することができた。

『馬で一日かかる』というのは、普通の荷馬車に農作物をたくさん積んだ状態で…の話なのだろう。

御者に多少の心づけを加えて乗車賃を渡すと、ほくほく顔をして帰っていった。

不特定多数の人間と関わる業種の人間に、わざわざ口止めをするのは、逆に印象に残るだろうからやめておく。

多くの荷物は先に送っておいた。

主と自分の身の回りの大事なものだけが詰められた鞆がふたつあるだけだ。

私は両手に一つづつ鞆を持つと、主と共に村へ足を踏み入れた。

イルウク村は、絵に描いたような牧歌的な農村だった。

青々とした農作物が植えられている広い畑が見渡す限りに続いていて、道にはちいさな花が咲く生垣が造られている。点在する家々は、あたたかい色調のレンガとクリーム色の壁で統一されていて、まるでおとぎの国の世界に迷いこんだようだ。

村の中にひろがっている長閑な雰囲気に驚き、半ば呆れる。

私の数歩先を歩く主は、顔を隠すベールが付いた幅の広い帽子のつばを片手で押さえながら、軽やかな足取りで前へ前へと進む。

暦の上では春が来ているが、風が吹くとまだ肌寒く感じる。

主に用意した外套は薄手すぎやしないかと思い始めた時、遠くの丘の上から手をふる人物がいることに気がついた。

「セドリック、あの丘の家じゃないかしら？」

「はい、ご主人様。丘の上の赤い屋根の家。村長が言っていた特徴と一致しますね」

馬車で丘の下まで送ってもらったほうが速かったかもしれない…と考えるながら、御者に滞在先の情報まで知られるのは得策ではないのだから…と即座にその考えを打ち消す。

主と私は時間をかけて丘の上まで歩いてたどり着いた。

赤い屋根の家の前には、人好きのする笑顔を浮かべたご婦人が私たちを待っていてくれた。

「はじめまして、村長の妻のハンナと申します。私は王都の出身ですので、村で暮らしたことしかかない者よりはお役に立てるだろうと…お世話役になりました。炊事、洗濯、掃除…なんでも言いつけて下さいね」

はきはきした口調は小気味よく、彼女は扉を開けて私たちを家へ招き入れた。

「この家は先代の村長の家を改築しました。この村には宿屋がありません。客人は村長の家に泊まるので、普通の民家より部屋数が多い造りになっております。一階は炊事室・食堂・応接室、二階に寝室が4つ。」

村長夫人…ハンナは私たちを応接室へ通し、いろいろなことを説明しながらお茶と軽食の用意をしてくれる。  
無能で詮索好きの女性ではないようだ。

こちらの望む人物像が村長の妻だったことには驚いたが、私たちの情報の出所を拡散させないためには、かえって好都合かもしれない。  
主はすっかりハンナのことが気に入ったようで、淹れてもらったお茶を飲みながら談笑している。

「何か、聞いておきたいことなどございますか？ 無いようでしたら、旅でお疲れでしょうし、私はこれで失礼させていただきますが」

聞けば、夕食の準備等は既に終えてあるとのこと。

後は食べる直前にあたためるだけで良い状態だと聞いて、あらためて有能なご婦人だと評価をしていると、ふと思いついたように主が口を開いた。

「　　そういえば…」

「はい？」

「村長さんが、先日お会いしたときに、『赤頭巾をかぶった少女には、気をつけるように』と謎めいたことを言っていたのだけども…」

主の言葉を聞いたハンナは目を丸くして、笑い出した。

「　　……ああ、ごめんなさい。可笑しくて。まったくあの人ったらもう！　あの子は人を見て判断する賢い子だつてことが、まだわからないのかしら…いつまで経っても男つてのは…」

笑いながら自分の夫のことをこき下ろすハンナの様子を、主と私は黙って見守っていた。

こういうときのご婦人の話には、口を挟まないに限る。

経験則から身についた教訓に従って、黙って彼女の話の聞き続けた。

「『赤頭巾』は、私の娘…マリナのお手製なんですよ。本人は『フード付きのケープ』を作ったと言っておりましたが、夫のような年配の男性には、赤頭巾としか言えないのでしょうかね。マリナは料理の才能は全く無いのだけど、裁縫や編み物だけは上手な子で…」

にこにここと笑いながらハンナは続ける。

「『赤頭巾』の女の子というのは、マリナの娘…というよりは…妹かしらねえ？ そうすると私の娘ってことになるけれど…でもそれじゃあアルトが気の毒かしら…」

ハンナはぶつぶつと独り言のように呟いた後、きつぱりと言った。

「とにかく、その女の子は本当に良い子ですから、大丈夫。お嬢様に害を成すようなことはいたしません。あの子に敵視され、標的にされるのは、助平心のある男共だけですからね」

にこやかにそう結論づけると、ハンナは帰っていった。

部外者が家の中に誰もいなくなった途端、主は『お嬢様』の仮面を外し、元の口調に戻して話し出した。

「赤ずきんちゃん、ハンナを味方につけてるみたいだね」

「…村長夫人が味方でも、村長に危ぶまれているようでは、安全な存在とは言い難いと思いますが」

「そうかな？ 村長さんは心配性な人っぽかったから、大げさなんじゃないの？」

「…さあ、どうでしょうか。でも、結局のところあまり情報は得られなかったですね」

「ハンナの娘さんの妹みたいな存在で、男嫌いつてこと以外はね」

「…赤頭巾の少女が敵視して、標的にするのは『助平な男』限定という話でしたが？」

「助平じゃない男なんて、男じゃないでしょう？」

「……。ご主人様、御願いですからそんな話を外でしないで下さいね。品位が疑われますよ」

「えー？ 事実なのに」

ぷうっと頬を膨らませる主を目線で叱ると、「はい、わかりました」という気の抜けた返事が返ってくる。

「楽しみだな、赤ずきんちゃんと会える日が」

主の嬉しそうな表情を見守りながら、私の心には逆に不安が募っていくのを感じていた…。

02 感謝の嵐（前書き）

セドリック 視点

## 02 感謝の嵐

翌朝、まだ日が昇らない時間に目を醒ました私は、見慣れぬ天井をしばらくの間眺めた後：自分のいまいる場所を思い出し、深く息を吐き出した。

素早く夜着を脱ぎ、身支度を整えてから台所に下りる。

メイドは雇わず、昼食と夕食の支度・洗濯・掃除を通いで頼むことにしてあるので、朝食の準備は私の仕事だ。

専門外の仕事とはいえ、きちんとした食事を主に用意してさしあげねば…。

広い炊事場の一角には井戸がある。

屋外から水を運搬する手間が省ける造りになっているのはありがたい。

竈かまどに火を熾おこす前に薪を用意しよう…と、勝手口のドアを開け外に出た私は、両側に沢山の物が置かれていることに気がついた。

野菜、苺などの果物、花束。ジャムや果実酒もあるようだ。

誰がもってきたのか解らないものを家の中に入れることに抵抗を感じたが、そのまましておくこともできない。私は仕方なく、総てを家の中に移動させた。

今朝の朝食はバタートーストに春野菜の温サラダとチーズオムレツ。デザートは木苺のジャムを添えたヨーグルト。飲み物はカフェオレを用意した。

主は朝が弱く朝食に手をつけないことが多いが、今朝は食欲旺盛だった。

「…ご馳走様でした。美味しかったわ」

につこりと笑顔で言われると、こちらとしても嬉しくなる。

微笑みながら空の食器に手を伸ばしたとき、玄関の方角からノックの音が響いてきた。

私が主に一礼して玄関に向かいドアを開けると、そこには両手いっぱい荷物を抱えた村長夫人が立っていた。

「自分の手で開けられなかったものだから、ごめんなさいね」

彼女はそういいながら、まっすぐに炊事場へ向かって歩いていく。

私は彼女の後ろを歩きながら、ノックは手ではなかったのだろうか…と…考えていると、前方から驚きの声上がる。

「あらあら、まあ、これも…?!」

彼女の視線を追えば、今朝勝手口に置いてあった品々を見ているようだ。

「今朝、勝手口に置いてあるのに気がついて、私が中へ移動させたのですが…村長夫人が配達を手配したものですか?」

「ハンナ、と呼んでくださいな。いいえ、私ではありませんよ。どうやら私のところに持ってこないで、直接来てしまった者がいるようですな」

「…では、私のこともセドリックと呼んでください。それでは、その大荷物も？」

「ええ、村人たちからお嬢様へ『感謝』の贈り物だそうです」

「…それは…」

言葉を濁した私には気がつかずに、ハンナはテキパキと贈り物を仕分け始めた。

「お嬢様の素性を詮索しない、静養の邪魔にならないようこちらからは話しかけない…等、皆に周知徹底するよう言っているのですが、お嬢様に支援金をいただいたお礼をしたいという者が沢山いますね」

「…成程」

「贈り主が解らないとお嬢様も不安でしょうから、今後は全部私を通すように皆へ伝えます。驚かれたでしょう？ ごめんなさいね」

申し訳なさそうに謝罪されると、総て受け取らずに断ってくれ…とも言い難く、私は村長夫人に曖昧な笑みを返した。

使用済みの食器を下げるために食堂へ戻ると、主はまだ席についていた。

何があったのか報告しろ…とでもいうような瞳の輝きを見て、私は心の中でこっそりとため息をつく。

「村人たちからお嬢様へ、支援のお礼にと…沢山の野菜や果物が届けられました。村長夫人が調理してくださるそうなので、昼食

と夕食を楽しみにしておいてください」

「…まあ、本当？ 嬉しいわ」

主はにつこり笑って、食器を下げる私と一緒に炊事場へついてきた。

炊事場では既に、村長夫人の『戦い』が始まっていた。めまぐるしい速さで広い炊事場を動き回っている。根菜類を切って鍋に入れたと思ったら、葉物野菜を井戸の脇の流し場で洗い、鍋を木勺でかき混ぜた次の瞬間には、包丁を手に……といった具合である。

とても声のかけられる雰囲気ではない。

私は主に視線でここは退くように伝える。主は素直に頷くと、一人で戻っていった。

村長夫人に手伝いを申し出るかどうか数瞬迷ったが、彼女の職業意識は高そうだ。

下手な親切はかえってプライドに傷をつけて、迷惑をかけることになるかもしれない……と考え、食器を洗うことだけに集中しようと考えたとき、勝手口のドアが叩かれた。

「…？」

私が腕まくりしたシャツを元通りにして対応すべきか考えているうちに、村長夫人がさっとドアを開けた。

「トーマス！ マイク！ まあ、ジエームスとフレッドまで！ …お嬢様が滞在中は、お邪魔にならないよう、ここには近づくなと言っておいたでしょう？」

後ろから覗いて見れば、10代後半ぐらいの少年たちが立っている。村長夫人が腰に手をあてて厳しい声で叱りつける姿には貫禄があった。

叱られて腰が退けている男性陣よりも、村長夫人をまじまじと見てしまう。

「あら、いやだ私ったら。ほほほほ、教師をやっていたときの癖がでてしまって」  
「…そうなのですか」

村長夫人の誤魔化し笑いに微笑みを返しながら、私は皿洗いに戻ることに決めた。  
どうやらここはお任せしたほうがいいらしい。

村長夫人はキリっとした口調で説教を再開した。

「大方、遠目にもお嬢様の姿が見られれば…なんて助平心を出したんでしょうけど」

「ち、違うよ先生」

「そんなんじゃありません」

「そうだよ、僕たちは…」

「別に俺たちは、お礼を置きにきただけで…覗こうなんてそんな」

「だまらっしやい!!」

私は関心のないフリをして皿を洗いつつ、やはり村長夫人に任せて正解だったと、自分の判断力の正しさを再確認していた。

私が食器類を綺麗に片付け終わる頃には、村長夫人の説教も終盤を迎えていた。

「…いいですか、他の皆にもよく言うておくように。村の恩人であ

るお嬢様に下手なちよっかいを出そうものなら…」

「……はい、わかりました!」「」「」

軍隊並みの声の揃い方が可笑しくて、私は笑い出さないように堪える。

「…返事だけはいいんだから、まったくもつ…」

勝手口のドアを閉めながら苦笑する村長夫人の手から、彼らもつてきた贈り物の一部を受け取る。

卵と生肉、チーズやぶどう酒などをテーブルの上に移動させた。

「貴女は良い教師だったのでしょね」

「…さあ、どうかしら」

嬉しそうに笑う村長夫人の横顔を見ながら、私は主への注目度が高いことを危惧していた。

ちいさな農村では話題がないだろうから…と…ある程度予想していたものの、これほど好意的に迎えられるとは。この様子だと、村の外で話題にされることも十分考えられる。

主をあの御方から守るために、二重三重の備えがあるとはいえ、今は消息不明になっているのが望ましい。これ以上村人たちの口の端に上るようなことがないよう、主にも協力してもらわなければ…と考えていると、私の目の前に花がいっぱい飾られた花瓶が出現した。

顔を上げると、村長夫人がにっこり笑って言った。

「お嬢様のお部屋に、こちらの花をお届けにあがってくださいな」

「…はい」

体よく炊事場を追い出された私は、おとなしく二階の主の部屋へ向かう。

控えめにノックして入室すると、主はソファでうたた寝をしていた。長旅に加えて様々な気疲れからくる疲労が、また癒えていないのだろう。

花瓶を寝台近くのチェストに飾ると、ブランケットを取り出して主の身体にそっとかけた。

主を起こさぬよう部屋を退出し、階段から窓の外にふと目をやると、先ほどの少年たちが手をふっているのが見えた。

「……………」

首を傾げている私に向かって、今度は手招きをはじめた。

どうやら呼ばれているらしいと気がついた私は、村長夫人に気づかれないように、表のドアから外へ出た。

「呼び出したりして、すみません！ あ、俺、トーマスっています」

代表格らしいトーマスが頭を下げると、他の三人も少し遅れて頭を下げた。

その仲のよさを微笑ましいと思いながら、私も名を告げる。

「私のことは、セドリックと呼んでください。…それで、ご用件は？」

彼らはお互い顔を見合わせて迷っている様子を見せたが、再びトーマスが代表して話すことに決まったらしい。そばかすだらけの顔に真剣な表情を浮かべて、彼は質問を口にした。

「あの…セドリックさんには、恋人とか…奥さんはいますか？」  
「……は？」

突然の予想外の質問に、固まる。

「…あ、いや、いるならいいんです！ 何処の誰だとか、どういう人だとか、そういった話が聞きたい訳じゃなくて、えっと」

私以上に動揺しているトーマス少年が気の毒になって、できるだけ優しい口調で言った。

「すみません、突然の質問に驚いただけで…怒っていませんから、大丈夫。私にそういう『特別な女性』が居るか居らないかで…何か問題でも？」

どういう話なのか解らないうちは話せない、という姿勢を匂わせる。

「あ…その…ウチの村には、ちょっと…男に厳しいガキンチョがいます…」

「…？ ひょっとして、赤頭巾を被った少女のことですか？」

「そうそう！ なんだもう誰かから聞いてたんですか？」

「いえ、詳しいことは全然。ただ、気をつけるように…と。村長夫人からは気にするなと、真逆のことを言われたのですが」

「あ…ハンナ先生はなあ…可愛い娘に寄ってくる害虫がどうなるうと気にしないから」

「…？」

私は少年たちから詳しい話を聞きだすことに決め、人目のつかない位置へと移動した。

「それで？ 赤ずきんちゃんの新しい情報が手に入ったんでしよう？」

主は夕方になるまで目を醒まさなかったため、昼食と夕食を兼ねた食事を摂っている。

村長夫人はとつくに帰宅しているし、来客の予定もないため、主は素の口調に戻っていた。

「ご主人様、口にもものが入っている状態でお話してはいけません。お行儀が悪いですよ」

「……。」

口を閉じて目で先を話せと訴える主に微笑みかけながら、私は話を再開した。

「赤頭巾の少女の名は、リーナ。彼女がこの村の住人になったのは、二年前のことだそうです」

「…二年前？」

「はい、王都の孤児院に居たところを、ジャックという男性に引き取られたんだとか」

「…ハンナの娘さんと、ジャックの関係は？」

「ジャックがリーナを引き取って、二人で暮らすようになってから半年後に、マリナがジャックと結婚したそうです」

「…へえ、既婚者で子供ができなかつたから、孤児を引き取つたんじゃないくて、結婚前の独身男が？　なんか事情がありそうだね」

「その辺りの詳しい話は、わかりません。彼らも知らないそうです」

「ふうん？　それで？　赤ずきんちゃんの男嫌いとお前の女性関係にどんな話の繋がりがあるのかな？」

にやにやと人の悪い笑みを浮かべる主は実に楽しそうだ。

私は大げさにため息をつきながら続けた。

「彼女<sup>リーナ</sup>は、マリナに手を出そうとする独身男性を、手厳しく追い返しているそうです」

「…？　マリナはジャックと結婚したんじゃないかった？」

「リーナの保護者であり、マリナの夫のジャックは、半年程前から行方不明になっているそうです。もともとマリナは村一番の美人で、求婚者が多数いる中、自分からジャックの処に半ば押しかける形で結婚したため、彼女を諦められない男たちが夫の不在をいいことに…という事のようにです」

「成程。それで『助平な男共』限定って、ハンナは言ったわけだね」  
「そのようですね」

「…保護者の留守を守ろうとしている、赤ずきんちゃん…か…」

主は食後の紅茶に口をつけながら、意味深に呟く。

赤頭巾の少女に深く関心を持つ主の姿を見て、私は何故か不穏な空気を感じていた…。

03 接近遭遇（前書き）

セドリック 視点

### 03 接近遭遇

「 約束の3日間、家の中で大人しくしていたのだから、今日は外へ散策に出てもいいのよね? 」

朝一番に主が口を開いて言った言葉は、朝の挨拶でもなく、食事の前のお祈りでもなく、外出の確認だった。

『 静養 』の目的で村へやってきたという表向きの理由も含め、旅の疲れでとても外出できる状態ではない…ということにして、村中の注目が集まっていた初日から3日間、主には外出を控えてもらっていた。

真つ先に確認をとるとは、よほど退屈していらっしやっただろう。

私は主の問いに苦笑しながら頷いた後、今朝のメニューを説明する。

本日の朝食用に作ったのは…春野菜のキツシュ、ジャガイモとニンジンにキャベツとベーコンを入れたトマトスープ。

パンは昨日村長夫人が焼いてくれた胡桃入りのパンを温め、バターを塗り、レタスとハムを挟んだ。

デザートは林檎ジャムを味のアクセントに入れたスフレチーズケーキ。

飲み物は癖のないセイロンティーを用意した。

未だ成長途中の主には、たくさんの栄養が必要だ。

こちらに来てからというものの、主の食欲が増しているので、少しずつ食事の量も微調整していた。

完食してくださることが嬉しくて、慣れない料理にも作る意欲が沸いてくる。

主の食事が終る頃、村長夫人が籐のバスケットを持って食堂へやってきた。

「失礼いたします。お嬢様、こちらに本日のお昼ご飯を入れておきました。パンに野菜とチキンを挟んだサンドウィッチです。デザートには、苺のタルトを焼きました。セドリックさんと一緒にピクニック楽しんできてくださいね」

「まあ、嬉しい。ハンナさん、ありがとうございます」

主は天使のような笑顔で村長夫人に礼を言うと、籐のバスケットを大切そうに撫でた。

「お嬢様、今日は日差しが強くなりそうですから、日傘か帽子を被ってくださいませね」

「はい」

村長夫人の助言を受けて、主は二階の自室へと駆け足で向う。

「ご主人様、そのように慌てなくても出発にはまだ時間が……」

後姿に声をかけたが、主の返答はない。

私は食器を下げる仕事を村長夫人に任せて、主の後を追って二階へ上がった。

軽やかな鼻歌が廊下に漏れていることに眉を顰める。

と、同時に、主の部屋のドアがきちんと閉まっていなことに気がついた。

「ご主人様、無用心ですよ」

主の部屋に入ってドアを閉めてから、低く響めた声で注意する。主はこちらを見ずに軽い口調で謝罪の言葉を口にする、私の目の前に白いレースの日傘と水色の帽子を差し出した。

「セドリツク、お前はどちらが似合うと思う？」

「…ご主人様には、どちらもとても良くお似合いですよ」

「ちがうの。今日の私の服装<sup>わたくし</sup>には、日傘と帽子どちらがより似合うのかを聞いているの」

「……それは失礼しました。そうですね…日傘の方がご主人様をより清楚に見せてくれますが、村の中をいろいろと歩いて回るのですよう？ でしたら、両手は空けておいたほうがよろしいでしょう」  
「それもそうね。…じゃあ、帽子の中から選びましょう。どれにしようかしら…」

うきつきと帽子を手にとつて、とつかえひつかえ鏡の前で試着する主は年相応の……いや、幾分不相応な部分があるものの、子供らしくはしゃいでいる姿は可愛らしかった。

私は主が帽子を選び終わるまで黙って見守り、村長夫人に見送られてピクニックに出かけた。

私たちが借りている丘の上の赤い屋根の家からは、村全体を見下ろせる。

今日は村の西側を見て回ることに決めて歩き出した。

農作業中の村人たちに手を振ったり、簡単な挨拶を交わしながら、ゆっくりと村を見学して回る主は、キラキラと瞳を輝かせている。王都や本家の屋敷の中では、滅多に見ることができなかった主の喜色に、私の表情も緩みがちになった。

だんだん見知らぬ人間と言葉を交わすことに慣れてきた主は、畑で育てている農作物の名前を聞いたり、いつ頃収穫するのかとか、どんな花が咲くのか…等、気さくに村人たちに話しかけるようになっていった。

お昼を食べるのにお勧めな場所は？ …という主の質問に、仲の良さそうな老夫婦は少し先の丘にちいさなシロツメグサのお花畑がある…と教えてくれた。

草が生い茂っている場所や雑木林の中には毒を持つ昆虫等が生息しているため、絶対に入らないよう忠告も受けた。

主と私は老夫婦に礼を言って別れ、教えてもらった場所で昼食を取ることにした。

ぶ厚い耐水性のある敷布を広げ、その上でバスケットを開く。

バスケットの蓋の部分に食器類が重ねて収納されていて、ケースの部分には隙間無くサンドウィッチとイチゴタルト、そして水筒が入っていた。

ひとつひとつ取り出して準備をしている私の姿を、主は目を輝かせて見守っている。

「 そんなにお腹が減っているのですか？」

尋ねると、主は首を振った。

「…よく、物語で『外で食べる食事は格別だ』なんて場面があるから…それが本当なのかどうか、今からわかるんだと思うと、なんだかわくわくするの」

「……………」

私が主のお傍に仕え常に警護に当たるようになるまで…ご両親は常に愛児が暗殺される危険を日々感じて過ごしていたのだという。幸い狙われている本人である主は精神を病むことは無かったようだが…逆に『普通』であることが『普通』ではない気がしてならない時がある。

よく笑う朗らかな主の笑顔が、果たして本物なのかどうか……。

「…あ！」

主の声でふつと我に帰ると、帽子が風に飛ばされて近くの雑木林に落ちていくのが見えた。

「私が拾ってきましたから、ご主人様は先に召し上がって下さい」「いいわ、セドリツク。私わたくしが行ってきます。ちいさな子供ではないんですもの、自分の帽子ぐらい、自分で拾えるわ」「ご主人様！」

私の制止の声を振り切って、主は駆け出してゆく。ほんの50メートル程先の雑木林だから…と…私も後を追いかけることはしなかった。

主の姿を目で追いながら、手は昼食の準備を進める。  
皿の上にサンドウィッチと苺のタルトを移し、マグカップに水筒の  
中の紅茶を注ぐ。

これで準備完了だ。

私<sup>が</sup>が立ち上がって主の傍へ歩を進め始めたとき、視線の先の主が急に  
転んで尻餅をついた。

「きゃあ!？」

主の悲鳴に駆け寄ると、すぐ傍の木に鋭く光るナイフが食い込んで  
いた。

「...?」

よく見ればそのナイフは、蛇の頭を木に縫いとめている。

この蛇は…確か、毒蛇だ。

青ざめる私と主に、冷やかな声が投げつけられた。

「毒蛇に注意しろ…って、誰かに言われなかった?」

雑木林の繁みの中から音を立てて表れたのは、背の低いちいさな女  
の子だった。

まだとても幼い…6つか7つぐらいだろうか。

赤いフードから覗く艶やかな栗色の髪の毛、萌葱色もえぎの瞳、そして真  
つ赤なサクランボのような唇。

とても愛らしい整った外見なのに、『お人形のような』という言葉  
が浮かんでこないのは、彼女の瞳に宿る強い光のせいかもしれない。

その色鮮やかに輝く瞳には、明確な苛立ちが浮かんでいた。

「…聴こえていないの？ あなたたち、頭がお花畑なだけじゃなくて、耳まで悪いの？」

とても可愛らしい声で辛辣な台詞を吐く少女を、私と主は呆然と眺めていた。

少女はそんな私たちを見て、ちいさくため息をつくとき、音も無くこちらへ歩み寄って、木に刺さっていたナイフを蛇ごと引き抜いた。

「…っ！」

主は蛇を恐れて後ずさりし、私はそんな主を後ろに庇うように立つ。

少女は私たちの動きには目もくれずに、片足でのたうつ蛇を足蹴にしながら、ナイフの刃の状態を丁寧に確かめ、腰のホルダーに仕舞った。

「あ、あの、助けてくれて…どうもありがとう」

震える声で少女にお礼を言う主に倣って、私も頭を下げる。

「お礼の言葉なんていらさないわ。謝礼のお金なら受け取るけれど、赤頭巾の少女は可愛らしく小首を傾げてそう言った。

彼女は固まった私たちを数秒眺めた後、くるりと背を向けた。

そのまますたと歩き去ろうとしていることに気がついた主が、

彼女を呼び止めようと声をかける。

「…あ、待って。貴女のお名前を教えてくださいませんか？」

赤頭巾の少女はピタリと足を止めると、振り返らずに言った。

「わたしは人に名を尋ねるときは、自分から名乗るのが礼儀だと教わったけど…貴女が受けた教育は違うの？」

「…え…？」

「それとも、自分ならば礼儀を無視しても許されるって思ってる？」

まあ、どうでもいいけど」

「わ、わたくしは…」

「わたし、仕事があるの。お嬢様の暇つぶしのお相手は、別の人に頼んで」

「…。」「」

「じゃあ、さようなら」

赤頭巾の少女は振り返ることなく、そのまま足早に去っていった。

その夜、主は大荒れだった。

「…うううー…」

「ご主人様、そのように唸るのは止めてください。お行儀が悪いですよ」

「だってセドリック！ あんなちっちゃい子に一方的に言い負かされて、悔しいじゃない！」

「…言い負かされる前に、助けてもらったのですから、それであの

少女の無礼を許してさしあげてはいかがですか？」

「べ、別にあの子にへりくだって欲しい訳じゃないし。それに無礼だつて怒ってる訳でもない」

「…では、何がそんなに不満なのですか？」

「ほとんど全部」

「…なるほど、出逢った最初からやり直して、あの少女と仲良くしてみたいということですか？」

「そんなわけ…いや…そうかな？　そうかも？」

首を捻る主に、ホットココアを淹れて差し出す。

「私気がついたときには、彼女のナイフが毒蛇を仕留めた後でしたが…あの子がナイフを投げた…ということに間違いはないですか？」

「…うん。雑木林に飛んでいった帽子を取りにいつて、足元に何かいるって気がついた時には、もう、蛇が鎌首をもたげていて…咬まれると思つて悲鳴を上げた瞬間、あの子がナイフを投げて助けてくれた」

「　距離はどれくらいあつたか、覚えていらつしゃいますか」

「…30…40メートルぐらいかな？」

「それが本当たしたら、ものすごい動体視力とナイフ投げの腕です。あんなちいさい少女が、どこでそんな技を身につけたのか…」

首を捻る私の姿を、主は可笑しそうに眺めている。

「…なんですか？」

「んー？　今夜はセドリツクの方が赤ずきんちゃんのことと夢中だなあ…つて思つて」

「…は？　というか、あの子がリーナだとは…」

「あの子はリーナだよ。まず間違いなく、彼女が噂の赤ずきんちゃ

んだ」

「ご主人様がそう思われる根拠は？」

「勘、かな」

「…勘ですか…」

そう言われてしまうと、反論する余地もない。

「うん、決めた！ 明日は赤ずきんちゃんの家へ行こう！ 謝礼金を持って」

「……。」

「ちゃんとお礼をするっていう用事があるし、ハンナに赤ずきんちゃんの手が空いている時間帯を教えてもらって、その時間に尋ねていけばもうちよっと相手をしてくれると思うんだ」

「…ご主人様、何が目的なんですか？」

「お礼だよ、お礼。命を救ってもらったお礼はきちんとしないとね」

「……で、本当のところは？」

「毛を逆立てた小猫ちゃんを懐柔できたら楽しそうじゃない？ 自分だけに懐くのが嬉しいよね？」

「……逆に鋭い爪で引っかかれて、泣いても知りませんよ？」

はりきる主を止めても無駄だと諦めた私は、ため息をつきながら窓の外の月を見上げた…。

### 03 接近遭遇（後書き）

セドリックは世界料理全集（？）っぽいものを見ながら適当に作っています。

トマトが欧州で一般的に食用となったのは、18世紀のことだそうです。

こちらの村では、流行に先駆けて栽培&食用を開始していたということ。

なんか食べ物なことばかり書いている気がしてきました…（苦笑）

2011.07.12

リーナの瞳の色を変更しました。

（はしばみ色…ってグリーン系の色の名前だと思い込んでいたのですが、クリームイエローでした。ごめんなさい）

04 幸福在処（前書き）

セドリック 視点

## 04 幸福在処

翌日、主は村長夫人に『赤ずきんの女の子に助けられたので、改めて御礼をしに伺いたい』と、昨日あった話を演技力満載で打ち明けて、少女の家の場所や手の空いている時間等を聞きだした。

外見の特徴から、昨日主を助けた少女は『リーナ』で間違い無いとのこと。

イルウク村には10歳以下の女の子は、リーナしかいないらしい。

それを聞いた主は、僅かに眉を顰めた。

「……同じ年頃の女の子の友達がないなんて、寂しくはないのかしら？ あの子は男の子と遊んでいるから、あのような口調でお話するの？」

「リーナのあの口調は、この村へ来たときからですよ。それに、あの子にまともに相手をしてもらえる同年代の男の子は……」

村長夫人は苦笑しながら首を振る。

「もともと、女の子のほうが男の子よりも早く精神的に大人になりますし……その上リーナは飛びぬけて賢い子ですから、同年代の男の子では子供すぎて相手にならないのでしょうか。うちの末の息子……アルトもたまにちょっとかい出しているみたいですけど、リーナは大人と話したり、何かを学んでいることが多いですね」

「……そうなの……あの子にも、お友達がないのね」

ちいさな声で呟いた主の言葉は、村長夫人の耳には届かなかったようだった。

「ハンナさん、賢いとは…どれくらいなのですか？ それに、昨日のあのナイフの投げ技は…」

考え事を始めた主に代わって私が質問すると、村長夫人はくすくすと笑い出した。

「あらあら、お二人ともリーナの事ばかりですね。あの子は、初等学校で学ぶ内容は総て修学済みです。6歳になる前に初等学校の分が終わってしまったので、今は週に一度、私の家で中等学校の勉強をさせていますわ」

「……え？」

「…まあ、驚きますよねえ。私も実際にテストをして、リーナの学力を確かめるまでは信じられなかったんですよ。なんでも、孤児院でお世話になったシスターが、昔大学で教鞭をとっていた方だったそうで、物心ついた頃から学ぶことが遊ぶことだったと聞いています」

「…。」

「貧富の差が、子供たちに勉強する機会を奪うことのないように…と、教会の日曜学校の後に勉強会も開くような、教育熱心な方だったそうですよ。……そうそう、ナイフ投げや体術などは、退役して村へ帰ってきた元軍人さんに教わっています。教師と生徒というよりは、お爺ちゃんと孫みたいに」

「…いつたい、どうしてそんな…。周囲の方々は、あんなにちいさい女の子を止めなかったのですか？ 普通の少女が習得するようなことではないから、止めるようにと言うのも…周囲の大人の責務なのでは？」

つい咎めるような口調で尋ねた私に、村長夫人はふっと顔色を曇らせた。

「私も娘も、何度も止めたんですよ。でもね、あの子は…自分の里親の代わりに…半年前から行方がわからないジャックが…いつか必ず村に戻ってくるから、それまでは自分がマリナと家を守るんだって言ってる…」

村長夫人の声が、僅かに震える。

「…そちらの事情も知らず、失礼なことを…」

慌てて謝る私に、村長夫人はぎこちない笑顔で笑いかけてくれた。

「いいんですよ。…もっと…子供らしく、女の子らしく遊ばせてあげたいという気持ちもあるんですが、リーナがそうしたいと強く望むことを、マリナも、私も、夫も止められないの。結局、私たちはあの子に甘いんです」

昼食の時間になる頃には、私たちの間に漂っていた微妙な空気は一掃されていた。

食事を終えて、村長夫人に見送られながら、私たちは赤頭巾の少女…リーナの家に向った。

ご主人様の今日の服装は、薄い水色のワンピースに白のエプロンをあわせたエプロンドレスを身にまとい、美しいプラチナブロンドの髪の毛はカチューシャで纏めている。

手に持った白いレースの日傘をくるくると回しながら歩いている主の表情は、いつもと違って捉えどころが無い。

伝わってくる雰囲気ギリギリしたものではないので、ご機嫌は悪くない筈なのだが…と…内心私が首を傾げていると、不意に主が口を開いた。

「セドリツク、お前も赤ずきんちゃんのことを可哀想だと思う？」

「…ハンナさんが、リーナを不憫だと思っているのは確かでしょうが…私個人がどう思うかと言われると、微妙なところですね」

主は、私も孤児だったことを知っている。

孤児の中から身体能力が高いことを見出され、特殊な訓練を受けて腕の立つ護衛として『売られて』、今ここに在るということを。

「私わたくしは、彼女は…憐れまれることを良しとせず、そこに留まらず、自分の望むままに先へ進んでいくような子じゃないかと思うわ。昨日、ほんの少ししか言葉を交わさなかったけれど…：自分が必要だと思ふことを…習得するために努力している話を聞いたからかしら」

虚ろな表情で、主は日傘を回しながら歩を進める。

「何より、あの子からは『生きてる』感じが、すごく…：したの」

「生きています、ですか？」

「そう。私とは違って…ね」

それきり口を閉ざした主は、日傘を持つ位置を変えて、私の目から自らの姿を覆い隠す。

くるくると回る白いレースの日傘は、春の日差しと私の視線から主  
を守り続けた。

## 04 幸福在処（後書き）

セドリック視点のターンは、これで終了です。  
次話は、赤ずきんちゃん（リーナ）視点に変わります。

タイトルは最初「家庭訪問」だったのです。

リーナの家の前扉が開かれるまでを書く予定でしたが、余韻重視で省略しました。

代わりにつけた四文字は「幸福の在処<sup>あじか</sup>」とお読み下さい。

「初等学校」＝「小学校」、  
「中等学校」＝「中学校」という感じ  
にイメージを置き換えて下さい。

自分で自分の下手な文章に凹み、全く息抜きになってないこの現状

…… orz

05 お友達になりたい(前書き)

リーナ  
視点

## 05 お友達になりたい

日が昇る頃に働きはじめ、日が沈むまで働いてから、家に帰る。孤児院に居たときも、ジャックに引き取られてこの村の一員になってからも、わたしの一日の過ごし方はあまり変わっていない。

ジャックは「子供は遊ぶついでにお手伝いをするぐらいで、ちょうど良いんだよ」といつも言ってくれたけど、わたしはジャックの傍にいたかったから、ジャックと一緒に果樹園の仕事ができるのが嬉しかった。

今から考えると、二年前：5歳のわたしは、今よりもっとちいさくて……傍にいと、手伝うどころか邪魔になることばかりだったと思う。

でも、ジャックは一度だってわたしを邪魔者扱いせずに、ひとつひとつ丁寧教えてくれた。

秋に木の幹の粗皮を削るのは、皮の下に潜む害虫や卵を駆除するため。余分な枝の剪定は、来年の林檎りんごの実にお日様の光がたくさん当たるように、願いをこめて。

春に余分な林檎の花を摘むのは、ひとつの花からできる実にたくさん栄養をあげるため。

『摘花』が終ったら、次は『受粉』。残した花に実がなるように、丁寧に。

炭焼きの煙から作った紅茶色の液体と果実酢とお酒を水に加えて作った消毒薬を、こまめに散布するのは害虫から林檎の木を守るため。

夏にちいさな実を摘んで数を調整するのは、できた実を大きく育てるため。

たくさんの実を育てると、林檎の木が疲れてしまうから、欲張らないことが大事。

『摘実』が終えたら、木の周辺の下草をこまめに刈り取る。虫が増えないように、土の栄養を雑草に奪われないように。

夏の終わり頃には、葉を摘む。お日様の光が実にたくさんあたって、真っ赤になるように。

『葉摘み』が終ったら、たくさん林檎の実を育てている木に肥料をあげて、甘くて美味しい実がなるように応援する。

…林檎の実の収穫までに必要な、たくさんのこと。みんな、ジャックに教えてもらった。

忘れないように書き留めておいたノートが、今のわたしに何をすればいいのか教えてくれる。

ジャックが戻ってくるまで、守ってみせる。

この果樹園も、マリナも。

わたしは何度目かわからない誓いを心の中で呟いて、空を見上げた。お日様の位置から、お昼頃だということがわかる。

その直後に教会の鐘が鳴り、時刻が12時だということを教えてくれた。

梯子はしから降りると、家に向かって駆け出した。

少しでも遅れると、マリナが気を遣って、お昼ひるご飯を用意してくれ

ようとするから。

マリナはこどものわたしから見ても、すごく可愛いひとだ。姿かたちじゃなくて、中身が。

ちよっとお馬鹿さんだなあ……ってあきれれることもあるけれど、マリナがジャックのお嫁さんでうれしい。

大好きなジャックの大好きなひとを、わたしも好きって言えることが、しあわせ。

マリナは「私のほうがお姉さんなのに。お母さんって呼んでくれてもいいのに」って拗ねるけど、でもわたしよりマリナのほうがずっと……。

焦げ臭い匂いに、ふっと思考が途切れる。

視線を上げて煙突を確認すると、案の定黒い煙が立ち上っていた。

ここまではいつものことだけど、今日は悲鳴が聞こえた。

「マリナ!?!」

勢いよくドアを開けて家の中に飛び込むと、竈の前に座り込んでいるマリナの姿があった。

「どづしたの、どこか怪我した? やけど?」

駆け寄ってマリナの顔を覗き込むと、ちよっと涙目になったマリナが首を振って言った。

「怪我はしてないわ。火傷はちよっとだけ。……それはいいんだけど……あの……リーナ、怒らないでね?」

「…なに？」

「今度こそ大丈夫だと思ったの。ほら、失敗は成功の母って言うでしょう？ だから、今度こそ…」

「…。」

「…いつも、ごめんね」

マリナは言い訳の言葉を濁して謝った後、レンガ造りのオープンの中をゆび指した。

オープンの中を覗き込むと、まっくろに炭化した……丸パン（？）の成れ果てがたくさん。

「……マリナ」

「…ごめんなさい」

「…ちがう。怒ってはいないわ。あきれてはいるけれど。それより、早く立って」

「…?」

しよんぼりとつつむいているマリナの手を引いて、炊事場の隅にあるちいさな井戸の横の流し場に移動させる。井戸から水を汲み上げ、やけどしたというマリナの手に水をかけ続けた。

水を汲み上げるたびに、ギシギシと音を立てるロープの音が、静かな家の中に響く。

「 やけどをしたら、すぐに冷やす。傷がのこったら、たいへんでしよう?」

「…。」

「マリナが良くても、わたしとジャックは気にするわ。大好きなマリナが、傷つくのはいやなもの」

「…うん」

幸い、マリナのやけどは、右手の指先にほんの少し。  
聞けば、焦げ臭いことに慌ててオーブンからパンを取り出そうとして……オーブン用の手袋をはめるのを忘れてしまったらしい。

十分に冷やしたあと、薬草から作った軟膏をやけどした部分に塗って、包帯を巻く。

「今日からやけどが治るまで、水仕事と料理はぜんぶ禁止」  
「……えー？」

「えー……じゃないでしょう？ マリナの裁縫や刺繍のお仕事までは禁止しないけど、無理はだめ」

「……でも」

「だめです」

「だって」

「だって、も禁止」

「……むう〜」

反論を封じると、マリナはぷうっとな頬を膨らませて黙り込んだ。

わたしはマリナが作った『丸パン』の残骸をオーブンから取り出して、ちよっとだけためらってから、ゴミ箱へ捨てた。いつもは、もう少しマシなものができる。それらは取っておいて、マリナ宛に届けられる『貢物』のお礼にと……他人に押しつけて処理しているんだけど、ここまで真っ黒なものはさすがに難しい。プレゼントというより、嫌がらせになっちゃう。

わたしは竈かまどの熾火おきびを起こした。火の力がつよくなるまでフライパンに油をなじませておく。

その間にパンケーキの生地を作る。小麦粉と卵と牛乳、それに膨ら

し粉を入れてかき混ぜるだけ。最後に少しだけ味のアクセント用のレーズンを入れる頃には、フライパンから白い煙が出ていた。いったんフライパンを火から遠ざけて、濡れたふきんの上に置いて冷ます。マリナはこのひと手間を忘れて焦がしてしまうことが多い。フライパンの中心にできるだけ高い位置からそおっと生地を落とすと、きれいな円形に広がる。フライパンを火の上に戻して、ふちにぶくぶくと気泡がでてくるまでじっと待ち、頃合をみてひっくり返す。きれいな狐色に焼けたらお皿に移して、バターをぬってメープルシロップをかければできあがり。

てきぱきとパンケーキと飲み物（マリナには朝淹れたコーヒーにミルクを混ぜたカフェオレ、自分にはミルク）を用意して、テーブルにつく。食事の前のお祈りを捧げてから、あつあつのふわふわパンケーキに噛りついた。

「美味しい」

ひとくち食べたマリナが、いつものようにわたしを褒めてくれる。ジャックとマリナは、ほめ上手というよりは、親馬鹿…もとい、妹馬鹿なんじゃないかと思う。

「そう？ 良かった」

わたしはうまくうれしい気持ちを言葉にできなくて、そっけない返事になってしまっけど…でも、気持ちがたわゆるようにと願いながら、マリナに笑顔をむけた。

あたたかい家。

雨が降っても、嵐になっても、心配することのない、居場所。

おなじものを食べて、おいしいと言ってくれる家族。  
ジャックとマリナが与えてくれた、わたしの大切な場所。大切なふたり。

守るから、ぜったい。

ジャックは必ず帰ってくる。わたしとマリナのところに。必ず。

わたしにはできないことがたくさんあるけど、でも、できることもあるから、やれることをやる。

無いものを数えない。未来じゃない、今、できることをする。

ジャックの果樹園と、マリナを守る。

だから。

ジャック……待ってるから……わたしたち、ずっと、ジャックの帰りを信じて待ってるから……だから……必ず帰ってきて。

昼食を食べ終わった頃、ドアがノックされた。回数は4回。

村の住人同士なら3回が普通だから、滅多にないことだった。

マリナが椅子から腰を浮かしかけたのを手で制して、わたしがドアを開けるために席を立つ。

ドアを開けて、ジャックの消息を教えてくれる人が立っていたら……と考えると、手が震えた。

わたしはぐっとお腹に力をいれて、唇をかみ締める。

覚悟を決めてドアを開けると……そこには、昨日会った……頭がお花畑なひとたちが立っていた。村に大金を寄付し、身分と素性を隠して静養に訪れた……という噂のふたり。

「……こんにちは、赤ずきんちゃん」

キラキラしたお日様のような髪の毛に空色の瞳の少女が、わたしに向かつて挨拶をした。

両手で軽くスカートの裾をつかんで、少し腰を落とす………というのは、たぶん、挨拶なんだと思う。はじめて見たから、ちょっと自信がないけど、たぶん。

返事をする気もおきなくてわたしが黙ってふたりを眺めていると、少女が困ったように小首を傾げた。わたしの目には、その仕草は計算されたものとして写る。

「あの、私わたくし、昨日助けていただいたお礼に伺いましたの。謝礼金なら受け取るとおっしゃっていたでしょう？　ですから……」

わたしは最後まで聞かずに、言った。

「……冗談だから」

「え？」

「お金の話をしたのは、冗談なの。あなたたちがどういう反応をするか、見てみたかっただけ。あれくらいで謝礼を要求するひとは、この村にはいないわ。……ご用はそれだけ？」

言外にとつと帰れ、という気持ちをこめて見返す。

「どうしてそんなことを言ったんですか？」

キラキラの少女の後ろに控えめに佇んでいた背の高い男の人が、尋ねた。

わたしはそのひとの顔を見上げて…首が痛いなと思いながら…答える。

「どういう反応をするのか、興味があったから」

「何故？」

「…春は、農作業が一番忙しい時期なの。こないだの嵐でいろいろと被害が出たから、今年は余計に。村長さんは、出かける前にお断りするつもりだと言っていたわ。それなのに、あなたたちは村の事情も構わずに、お金で無理を通したのでしょうか？」

「…。」

「どんなことも、お金で解決できると思っているのかと…ああいう風に言ってみたの。違ったのかなって思っていたけど…違わなかったのね」

「それは…」

わたしは何かを言いかけたふたりに構わず、頭を下げ謝る。

「ほんとうに冗談のつもりだったの。わざわざ来てもらってごめんなさい。お礼のお金なんて受け取れないから、帰ってください。それじゃあ…」

ドアを閉めようとしたわたしの手を、少女がぎゅっと握った。

予想外の彼女の力の強さに、わたしは思わず悲鳴をあげる。

「いたっ！」

「…あ、い、いめんなさい」

彼女はわたしの悲鳴を聞いてぱっと手を離してくれたけど、代わりにドアをつかんでいた。

これでは、ドアが閉められない。

不機嫌に歪みそうになる顔を、自制心で押し留める。

がんばれ、わたしの表情筋。

冷静に、れーせーに。

「まだ、なにか、あるの？」

ないだろう、ないはずだ、ないに決まってる。とっとと帰れ、この暇人が！…などと、心の中でぶーぶー文句を言うわたしに、キラキラの少女は言った。

「あわたくしの…私、あなたとお友達になりたいの。私のはじめてのお友達になってくださる？」

「ぜっぜつつたいに、いや」

気がついたら、わたしは彼女の申し出を脊髄反射で断っていた。

## 05 お友達になりたい（後書き）

はい、5話はここで終了です。

予定ではもう少し先へ進む予定でしたが、キリがいいのでここで切ります。

お嬢様の立場から考えると、酷い場面で終わってますが…（苦笑）

リーナの年相応の『可愛い話し方』をなんとか文章で表現したいと、心の中の考えや会話文に平仮名を多目にとりまぜてますが、『賢い』という設定上難しめの言葉や漢字がそのままだったりします。違和感を覚えた方がいましたら、ごめんなさい。

このところ、メインの小説の執筆を放置していたので、暫く戻ります。

不定期更新ですが、週1ぐらいで…毎週土曜日に更新できると良いなあ…。

（全部で50話ぐらいの話になる予定です。適齢期編（？）まで書くとしたら、もっともっと伸びますが、幼年期編はそのぐらい）

06 お手伝いしますわ(前書き)

リーナ 視点

06 お手伝いしますわ

ぜったいに、いや。

無意識のうちにでた言葉に、自分自身が驚きながら……でも、取り消さない。

正直な、わたしの気持ち。

嘘でも、間違いでもないから。

キラキラのお嬢様は綺麗な瞳を見開いて、驚いている様子だった。

泣くか、怒るか…。

彼女がどんな反応をしても動揺しないように覚悟を決めて、自分の表情は消したままじっと見守っていると……彼女は『にやり』と笑った。

底意地の悪そうなその笑みに、一瞬背筋がゾクッと震える。

わたしの主導だった形勢が…流れが、変えられてしまう。

そんな予感がして、反撃にでなくちゃ……って焦ったとき、後ろからのんびりとした声がかかる。

「リーナ、どうしたの？ お客様なら家の中に…」

「もう、お帰りになるところだから」

あわててマリナを遠ざけようとしたけれど、遅かった。

「…そうなの？」

わたしの背後から、ひょいっとマリナが顔を出す。

そして、今にも泣き出しそうな顔を作った彼女に目を留める。

「　　あらあら、どうしたの？　お友達とケンカ？」  
「ちがうわ」

わたしは、二重の意味をこめて否定する。  
お友達でもないし、ケンカでもない。

「…わたくし…わたくしは…」

か細く震える彼女の声は、迫真の演技だった。

わたしがただの観客だったら、素直にほめたと思う。

迷惑を被っている今は、ひたすらうつつとおしい。早く帰ってほしい。

マリナは瞳を涙で潤ませているお嬢様の姿とわたしを見比べる。

「　　アレは『演技』だから。心配する必要はないわ、マリナ」

わたしがそう言った途端、お嬢様は再びパツと表情を変えた。  
今度は心底嬉しそうに笑っている。

…なに？

わたしの言動の何が彼女を喜ばせたのか、わからない。

思わず、胡散臭いものを見る眼つきで睨みつけてしまう。

彼女はそんなわたしを見て、くすくすと軽やかな声で笑い出す。

お嬢様の予想外の反応にわたしが戸惑っているうちに、彼女は矛先を変えてマリナに話しかけた。

「はじめまして、マリナさん。私、わたくし丘の上の赤い屋根のお家に滞在している者です。訳あって、名前を名乗ることのできない無礼を、どうぞお許してください」

流れるような動作で優雅な礼をするお嬢様に、マリナは丁寧なお辞儀を返す。

「はじめまして。ご事情があつて氏素性を隠している…というお話は、父から村の皆に伝わっております。どうかお気になさらず」「ありがとうございます」

二人はにこにここと微笑みあっている。

「…ところで、今日はどんなご用件でこちらに？」

話の水を向けたマリナに、お嬢様は哀しげな表情で瞳を伏せた。

「…ええ…その…私…わたくし家の事情でほとんど外に出ることなく育ちましたの。そのせいで、お友達がいままで一人もいなくて…この村に滞在している間だけでも、リーナさんとお友達になれたらと思つて、お願いしに伺つたのですが、先ほどきつぱりと断られてしまいました」

「…まあ…」

マリナが視線でわたしに「本当？」って問いかけてくる。

わたしは頷きつつ、口を開いた。

「わたしには果樹園の仕事がたくさんあって、遊んでいる暇なんてないの」

「…では、私わたくしお手伝いしますわ」

「だめよ。お嬢様にできることじゃないし、させるわけにもいかないわ」

わたしは強い口調で言う。ここでつけられる訳にはいかない。

「あなたは村に滞在しているお客様であって、労働をしに来たわけではないでしょう？ それに、遊び半分で任せられることじゃないの」

「…それは…」

「貴女のお付きの人は、わたしの意見に賛成してくれてるみたいだけれど？」

お嬢様は振り返って、背の高い男の人の表情を窺う。

男の人はお嬢様の懇願するような表情を見ても厳しい表情を崩さず、黙って首を振った。

「残念ですけれど、諦めるよりほかなさそうですね」

淋しげな表情と弱弱しい口調で、彼女はそう言つと…顔をまっすぐに上げて別れの挨拶を口にした。

「お忙しいところ、お邪魔してしまって申し訳ありませんでした。

…それでは、ごきげんよう」

踵を返して背をむけたお嬢様に、マリナが声をかける。

「あのおう…もしよろしければ、私がお嬢様のところに向く形で…お話相手を務めましょうか？」

突然の申し出に、わたしはあわてた。

「マリナ？」

「…リーナ、黙って」

しいつと人差し指を口に当てて、マリナがウインクする。

「私は料理はできませんが、裁縫や刺繍、編み物が得意なんです。お嬢様がお望みならお教えすることもできますし、私が仕事をしながらお話し相手を務める…という形で構わないのなら、お役に立てるかもしれません」

「それは…」

お付の人が何か言いかけたのを、お嬢様は止めた。目を輝かせてマリナを見つめる。

「わたくし私は、とても嬉しいけれど…迷惑ではなくて？ お仕事の邪魔になつたりしないかしら？」

「さすがに集中力のいる難しい工程の部分にとりかかっているときは無理ですけど、それ以外なら」

「…本当？ 本当に、お言葉に甘えてもいいの？」

「はい、もちろん」

ふたりの間で、とんとん拍子に話がすすんでゆく。

わたしとお付の男の人は、どちらともなく視線をあわせて……同時

に深いため息をついた。  
止めたいけど、もう、止められない。  
諦めのため息。

最終的には、14時から16時頃までマリナが丘の上の家まで出向く…ということではまとまった。  
もちろん、マリナの都合の悪い日は自由に訪問を中止する…という条件で。

このときのマリナの優しさが、後々『大迷惑』になってわたしの身に降りかかることを、まだ誰も知らなかった…。

## 06 お手伝いしますわ(後書き)

進展があまりない6話になりました。(プロットと少しづつズレが生じてきてます)

今回「視点移動があっても、話の流れを止めない」ことが課題に含まれているのですが、当初設定した「5話前後で視点移動」を遵守すると、ちよつと話の流れが滞りそうなので、次話はマリナ視点に変更します。

07 お嬢様と午後のお茶会（前書き）

マリナ 視点

## 07 お嬢様と午後のお茶会

祖父の代まで暮らしていた家を改築し、借家として貸し出す……という提案をしたのは、長兄のカイトだった。

祖父が他界してから一年後に祖母が亡くなり、住む者が誰もいなくなつた古い家。

先祖が代々受け継いできた歴史のある家だった。

父は母と結婚する際、両親の許しを得ていなかったこともあり、二人で新しい家を建てていた。

たくさんの思い出が詰まつた生家を放置して、荒れるままにするのは忍びない……という父の嘆きを聞いて、長兄が採算がとれる計画を提示し、次兄のクルトが主な改築作業を引き受けてくれた。

頭脳派の長兄と、肉体派の次兄が手を組むと、大抵のことは何でも魔法のように片付いてしまう気がする。

私にできることといったら、カーテンを新調したり、新しい壁紙を選んだり……と兄たちに比べれば微々たることばかりだったけれど、家族全員で力をあわせ、それぞれが自分のできることとして、一つのことを成し遂げる……というのは、思いのほか楽しいことだった。

今、私は、その借家に滞在しているお客様のお話し相手として、この丘の上の家に招かれている。

村に多額の援助をしてくださった恩人に失礼があつてはいけな……最初の数日は緊張していたけれど、一週間も経つとだいぶ打ち解けて普通に話せるようになってきた。

「 マリナさん、もう一杯お茶をいかが？ お菓子も遠慮なく召し上がってくださいね」

客間のテーブルの上には王都で購入してきたという、高級そうな洋菓子がところ狭しと並べられていた。

鮮やかな色のドライフルーツがたくさん入ったバターケーキは、表面にお酒を塗って熟成してあるらしく、食べると甘いケーキの味と芳醇なお酒の香りが口の中に広がってとても美味しい。

私に珍しい東洋のお茶を勧めてくれるお嬢様は、天使のような笑顔で微笑んでいる。

「ありがとうございます、お嬢様。…ですが、もう十分ですわ」

お礼を言ってからやんわりとお断りすると、お嬢様は頷いて白磁のポットから手を離れた。

手づからもてなそうとしてくださいださるお嬢様の優しさを感じながら、リーナがこの方のことを酷く警戒していたことを思い出す。

あの子は、まだ7歳なのに…とても賢く、聡い。

ジャックが去年の秋の終わりに行方不明になってからというもの…、ジャックが戻るまで私と果樹園を守ると言い張って、年相応のちいさな女の子らしい言動は少なくなってしまった。

リーナの決意は、親愛の情からくるものだと思う。

血が繋がっていないなくても『家族』だと想ってもらえていることは、とても嬉しい。

でも…あの子が背伸びをして頑張っているのは、私が頼りないから。私に、頼れないから。

私一人だけでは、リーナを安心させてあげることができないということ。

その現実が…そんな自分自身がとても情けなくて、辛い。

「……マリナさん？」

気遣わしげな声で名を呼ばれて、私はハッと我にかえる。

「え？ あ、申し訳ありませんお嬢様。ちょっと、考え事をし  
てしまつて…」

「お仕事の手は止まっていたので、お声をかけたほうがいいと思  
いました。確か、そのテーブルクロス…急ぎのご注文だとおっしゃ  
つていましたよね？」

「ええ、そうです」

鉤針一つで、細やかな紋様を作りあげてゆくレース編みは、手馴れ  
てくると考えなくても編めるようになる。細くて真白い糸を、力を  
込めすぎず、緩めすぎずに、一定の力加減を維持する必要があるけ  
れど、慣れれば手が自然に編み続ける。

「差し障りがなければ、何を考えていたのか教えてくださる？」

無邪気な笑顔で私の表情と手元のレース編みを交互に眺めているこ  
の少女に、悪意のカケラも見出せない。  
けれど、リーナの直感を信じるなら…この方は見かけどおりの可憐  
な少女ではないはず。

私はまだ確信がもてずにいるけれど、考えていたことそのままを口  
にすることはできなくて、嘘でも本当でもない答えを口にした。

「ジャックの…夫のことを、考えておりました」

「半年ほど前から行方不明になっている…と…ハンナさんからお聞きしましたわ。」「心配でしょうね」

「…。」

私は曖昧な笑みを浮かべる。

この半年間、誰もが同じような言葉をかけてくれて、心配をしてくれた。

たくさんのお遣いと援助を受けていることに感謝の気持ちはあるけれど、ジャックがいない場所で彼のことを話していると、どこか不確かな…まるで薄いベールに包まれた世界を眺めているような…気持ちになっってくる。

…でも…今日は、いつもよりふわふわした感じがする。私、どうしたのかしら？

内心首を傾げていると、お嬢様が少しためらいながら口を開いた。

「好奇心で質問しているように聞こえたら、ごめんなさい。…でも、私にも、何かお手伝いできることがあるかもしれないわ。マリンさんのご主人が行方不明になった時のことを、話してくださいさる？」

澄んだ水色の瞳に捕らえられて…私は促されるまま、質問に答え

た。  
ジャックが、晩秋に…最後に収穫した林檎を荷馬車に積んで、一人で王都へ向ったこと。

お得意様の商店やお屋敷に林檎を納入して、銀行へ売上金を預けた

後の消息がつかめないこと。

荷馬車を預かってくれていた商店のご主人によれば、ジャックは「すぐに戻る」と言っていたこと。

ジャックが自分の意思で行方不明になる理由は、思い当たらないこと。

家族の問題は無く、リーナはジャックと私によく懐いてくれていて、私たちもリーナを愛していること。

「ジャックさんがリーナさんを孤児院から引き取ってから…半年後ぐらいに、マリナさんとご結婚されたと聞いたのだけど」

「ええ…そうなんです。ジャックは私の上の兄と仲が良くて…よく家にも遊びに来ていて…私にいつも優しくしてくれて…私…昔からジャックのことが大好きだったの…」

頭の芯がぼやけて、だんだん口調が乱れてくる。

すっかりしなくちゃって思っ、鉤針で手の平を突いても、まったく痛みを感じない。

…あれ？ 私…どうしちゃったの…？

「半ば押しかけるような形だったそうですね。マリナさんは、情熱的なよね」

「いやだ、恥ずかしいわ。私…リーナのことを口実にしたんです。

『ちいさな子供には、母親が必要でしょう？』って、強気で立候補したの。ジャックはいつも私に優しくしてくれたけど、恋愛対象として見てもらえなくて…ずっと…ほんとうの妹みたいに…。だから、それぐらいの勢いがないと、駄目だった」

あの時は、必死だった。

私たちのことをよく知らない人は、ジャックがリーナを口実に私を口説いたと思っっているそうだけど、**事実**は真逆。私がリーナの健やかな成長を願うジャックを口説き落とした。

ずっと、ジャックに一人の女性として見てほしかった。でも、自分からは踏み出せずにいた。

ひきとつたちいさな養い子…リーナとの間にゆっくりと…でも確実に…強い絆を育んでいくジャックの姿を見て、焦りを感じた。このままでは、二人っきりの『家族』が完成してしまう…と。その前に、なんとかしないと…って。

「邪魔だとは、思わなかった？」

「……え？」

「ずうっと、長い間ジャックさんを慕ってきたのでしょう？ その貴女あなたを差し置いて、貴女より先にジャックさんの『家族』になったリーナに、嫉妬しなかった？」

『邪魔』。『嫉妬』。

黒く澱んだ言葉が、耳から身体の内へ入ってくる。

「…わたし…は…」

崩れ落ちそうになる意識の淵で、過去の自分の気持ちを思い出す。

「初めはそうだった…かも…しれない。でも、リーナは大好きなジ

ヤックの『家族』だから、私にとっても大切な存在で……ジャックと一緒に……可哀想なあの子を幸せに……守ってあげたい」

「では、今は？ 血の繋がらない子供と二人きりで取り残されている今も、そう願ってる？」

「……わたし……は……」

続く言葉を紡ごうとしたけれど、まぶたがとても重い。一度目を閉じたら、もう、開くことができない。

私の意識は、暗闇と転がり落ちていって……止めることができなかった。

「 マリナさん、マリナさん……」

可愛い少女の声が私の名を呼んでいる。

何度も名を呼ばれ、身体をゆさぶられて、ふっと目が覚めた。

「……え？ わ、私……？」

ぱっと身体を起こすと、軽い眩暈がした。

どうやら私は長椅子の上で寝てしまっていたらしい。

「無理に起こしてしまって、ごめんなさいね、マリナさん。よく眠っていらっしやっただから、そのままにしておいてあげたかったのだけれど、もう遅い時間だから……」

「いえ、あの、こちらこそ申し訳ございません。お話し相手としてお邪魔しているのに、寝てしまうなんて……」

羞恥で顔がどんどん赤くなっていくのがわかる。  
椅子から立ち上がり、頭を深く下げて謝罪する私を、お嬢様はあわてて止めた。

「いいの、どうぞ気にしないで。もともとお忙しいマリナさんに無理を御願いしたのは、こちらなのだもの。急ぎのお仕事のために、昨日の夜はあまり寝られなかったとおっしゃっていたし…、疲れているときにお腹がいつぱいになれば、眠くなるのも当然だわ。一眠りして、少しは楽になりました？ どこか、具合が悪いところは？」

訪問先で眠り込んでしまった私の無礼を責めることなく、体調を気遣ってくださるお嬢様の優しさに感謝しながら、頭の芯がぼうつとしている自分を不思議に思う。

寝不足だったから？ お腹がいつぱいになっていたから、寝てしまったの？

それに…私…今日、お嬢様と何を話していたんだっけ…？

ほんの数時間前のことなのに、ぼんやりと霏がかかっているようで、何も思い出せない。

「…マリナさん、本当に大丈夫？ 今日はこの家に泊まっていきますか？」

「え？ あ、いいえ、とんでもありません。そこまでご迷惑をおかけする訳にはまいりませんし、家にリーナを一人置いておくわけにも…」

「私は、わたくしマリナさんさえ良ければ、彼女もこちらに泊まっていただ

いても構いませんわ。セドリツクにリーナさんを迎えにいら  
えば……」

「いえ、お気持ちだけで。本当に、お気遣いありがとうございます」

これ以上強く引き留められては、お断りするための言葉を選ぶのも  
苦勞しそう……と思った私は、あわただしく仕事道具をまとめて籠に  
入れ、村娘風の服が欲しいというご注文を口約束で承りつつ、お嬢  
様と従者の方に見送られながら家へ帰った。

07 お嬢様と午後のお茶会（後書き）

今回は久々に少し長めになりました。

予定ではもつと人数が多くて（表面上は）和やかな女の子の集いになる筈だったんですが…ああ、和やかさとコメディが足りない！

web拍手・お気に入り登録、どうもありがとうございます。

自分の下手な文章に凹み、スランプに悩み、逃亡したくなったりとき、励まされています。

08 きまぐれな猫(前書き)

セドリック 視点

08 きまぐれな猫

夕闇が迫る時刻、心もとない足取りで帰っていく村長の娘の後姿を、主は暫らく見送っていた。

その瞳には剣呑な光が宿っている。

他人から見れば、微笑んでマリナさんを見送っているように見えるだろう。

主が自ら望んだのに、彼女が帰った後はいつも機嫌の悪さを顕わにする。

村長夫人は夕食の準備を終えて、とつくに帰宅していた。

私は玄関の扉の鍵を閉め、家中の戸締りを済ませてから、客間に戻り主に尋ねた。

「…ご主人様、マリナさんにお出ししたお茶に、何を混ぜたのですか？」

私の単刀直入な質問に、主はふっと表情を和らげた。

「叔父上にもらった特製のお茶。飲んでからしばらくすると催眠状態になって、質問されたことに本音で答えてしまう効果がある上に、後で何を言ったのか思い出せなくなるから口止めも不要で、人体には害がないっていう優れものらしいよ？」

……そろそろ緊張もほぐれて、いい感じに効くかと思って試してみただけ、ばっちりだったね」

にこにこ笑いながら、主はテーブルの上のお菓子をつまむ。

「どうしてそんなことを？ そんな貴重な茶葉を使う価値のある人物とは思えません」

「一週間も彼女のつまらない話につきあっていたら飽きちゃったし、退屈だったし、赤ずきんちゃんの周辺の情報を収集したかったし」

主の間延びした声には、罪悪感のカケラも無い。

「そんなにお嫌なら、もうこなくていいと言えばよろしいのでは？」

「…もつと赤ずきんちゃんの話が聞けると思ってたの。王都で流行してるドレスの形とか、美味しい飲食店の話とか、有名貴族の噂話とか、好きなタイプの男性は？ とか…：ゼーんぜん興味の無い話題ばかりでうんざりしてた。だから最後に、こっちの興味のある話題につきあってもらったんだ」

「……。」

主が毎回不機嫌になっていた理由が腑に落ちた。

つまり、今回のことは…主の当初の目的を達成するため。

…と同時に、興味のない話題につきあわされた仕返しでもあるのだろう。

それは自分の目論見が外れたやつあたりですよね…とは言わずに、私は別の質問を投げる。

「先ほどマリナさんに、村娘が着るような洋服を作って欲しいとおっしゃっていましたが、それを口実にして今後もこちらに彼女を呼ぶおつもりですか？」

「うん、その通り。今度は彼女に『仕事』を依頼するのだから、こちらも遠慮せずいろいろなわがまま言えるよね」

「いろいろ、ですか…」

含みを持たせたその言葉に裏を感じて呟くと、主は人の悪そうな笑みを浮かべる。

「なに？ 何か言いたいことがあるような顔をしているけど？」

主は、片足を組んでソファに座り直した。

その顔には、さあ言うてごらん何でも聞いてあげるよ…とでもいうような、妙に大人びた笑みが浮かんでいる。

身体が歪みますからきちんと正しい姿勢で座って下さいと注意しつつ、私は身の内に湧き上がった疑問をどう言葉にすればいいのか考えていた。

「…ひととおり見学し終わった後のこの村が、ご主人様にとって屈な場所だということはわかりますが、暇つぶしにしては随分とあの赤ずきんの少女に執着しているように見えます」

「……そう？」

「はい、今までには無かったことです」

「そうか…そういえばそうだね。自分でも気がつかなかったな。でも、それはお前が気にすべきこと？」

「従者としてどこまで主の心情や望みを把握しておくべきなのか、自分でもまだ掴みかねていますが…」

私は言葉を濁す。

行き過ぎた過干渉が双方にとって良くないだろうということは、頭ではわかっている。

だが、具体的にどこまで…という線の引き方が、わからない。わかっていることだけ、告げる。

「…しかし、不安要素ではありません」  
「不安？」

「ご主人様が私の想定範囲内で行動される分には対応可能ですが、かつてない行動パターンにはとっさに対応できないこともあるでしょう。その時に危険に晒されるのは、ご主人様の命です」

「…。」  
「私はご主人様の『従者』ですが、私の本来の仕事は『護衛』です。主人の命を守り、危険を排除するお役目を頂いている立場の私としては、彼女の存在は主の安全を脅かす『不安要素』。そう思わざるを得ません」

一拍おいて、更に言い募る。

「私たちはここに身を隠すためにやってきました。ご主人様の命の危機が去るまで身を潜めて、在るべき場所に帰ることが一番大事で大切なこと。ご主人様の退屈を紛らわせるのに必要なものがあるならば、何でもご用意させていただきましたが、好奇心で村人たちに深く関わるのは極力控えて下さい」

「……禁止する、とは言わないの？」

「言えません。そんな風に言えば、逆効果でしょうから」

「そうだね。セドリツクは本当に私のことをよくわかってる。天邪鬼だからね、私は」

本当に楽しそうに笑う主の言葉に、私は訂正を加える。

「ご主人様は、天邪鬼ではないでしょう？ 天邪鬼ならば、私の指摘にすぐに頷いたりしませんよ」

「…では、お前は私の性質をどんな言葉にする？」

主の美しいアクアマリンの瞳が煌くのを見て、猫の目みたいだ…と

思った。

それがそのまま口をついて出る。

「そうですね……きまぐれな猫のようだ……という言葉がぴったりじゃないかと」

深く考えず素で答えた私の台詞に、主は腹を抱えて大爆笑した。

翌日の朝「昨晚お前のせいで笑いすぎて、お腹が痛い。筋肉痛になったよ」と文句を言われたが、そんな軟弱な腹筋ではこの先やっていけませんよ…と、厳しく(?)突き放し、筋肉の重要性を説いて話をすり替えた。

気まぐれと思いつきで、人に自白剤もどきの茶を飲ませる主人であっても、私はそれを『悪い』とは叱れない。

結局のところ、私も主には甘いだけなのかもしれない。

私はマリナさんの身体に悪影響が出ていないことを祈りつつ、主が朝食を食べる姿を微笑みながら見守っていた。

08 きまぐれな猫（後書き）

次話は、リーナ（赤ずきんちゃん）視点に戻ります。

09 お嬢様と勉強会（前書き）

リーナ  
視点

09 お嬢様と勉強会

日曜日。

ほんとうなら安息日は、仕事もやすんで家族とゆっくりすごす日。

だけど、客人のお世話係をひきうけたハンナ先生は、丘の上の家に来ているんな家事をこなしていた。

……そしてなぜか、わたしも一緒にいる。

「リーナ、どうしたの？ 手がとまってますよ」

「ごめんなさい、先生」

教科書の詩を見ながら、黒い石版に白墨はくぼくで文字を書き写している途中だった。

わたしは先生の注意をつけて、再び勉強に集中しようとする。

ふわふわのソファの座りごこちはすごく良い。

でも、わたしの向かい側の席に座って、こちらを見ているお嬢様の視線が、ものすごく鬱陶しい。

「あの…なにか？」

無言で見つめられていることに我慢できなくなって顔をあげると、彼女は輝くような笑顔をわたしに向けた。

「リーナさんはとても綺麗な字を書くのですね。お上手ですわ。わたくし、見惚れていましたの」

「……。」

ぜったいに、嘘。

そう思いつつ、わたしは何も言わずに心のなかでため息をついた。

ハンナ先生に今までのように勉強をみてもらえない…ということは、先生がこの家事を手伝うという話を聞いたときから予想はついていたし、わたしの勉強は普通の子よりずっと進んでいるから、しばらくの間授業を受けなくてもまったく問題はなかった。

こんな風に先生の仕事先にお邪魔してまで、教えてもらわなくても良いと何度も訴えたのだけど、お嬢様も一緒に勉強したがっているから…という理由で押し切られて、今、わたしはここにいる。

そもそも、普通の…農民として暮らすなら、初等学校の勉強だけで良いのに。

中等、高等、大学の勉強が必要なのは、一握りの…選ばれたひとたちだけ。

同じ施設で育った『兄』たちと、一緒に教育を受けていたわたしは…。

「リーナ？」

先生の声で、八つと現実を引き戻された。

「今日は、集中できていないみたいね」

「…ごめんなさい」

言い訳をせず、謝るわたしを見て先生は微笑む。

「いいわ。今日は書き取りの勉強ではなく、朗読にしましょう」  
「…はい」

先生が開いたページの詩を詠みはじめる。

この国の公用語とは違う、ことば。

ラテン語で、歌を歌うように。

聞け。

彼方、かの声。

遠く近く わたしを呼ぶその声は  
懐かしき故郷の 父と母に似た あたたかな声  
闇に沈みかけた わたしの心を 呼び覚ます

冷たく凍えた手足に あたたかな血が廻り  
潰れたかに思えた 勇気が再び蘇る

わたしには もう何も無いと 泣いたが  
わたしには まだ 二本の手と足があり  
世界と繋がる 目と耳が残っていた

故郷から遠く離れたところへ派兵された、軍人さんの詩だった。  
わたしが一節目を詠み終えたところで止めると、先生は窓ガラスを  
拭きながら、いくつか発音がおかしいところを指摘してくれて、一

緒に何度か練習した。

「赤ずきんちゃんは、ほんの少しだけ舌足らずな発音をするのね」  
「……はい」

お嬢様はわたしの呼び名をきまぐれに変える。

『赤ずきんちゃん』『子猫ちゃん』『リーナさん』『森の妖精さん』  
等々。

それは別にかまわないのだけど、遠慮のない視線と、生ぬるい雰囲  
気を醸し出すのは、止めて欲しい…と、切実に思う。鳥肌がたつか  
ら。

彼女の美しい容姿は、絵画から抜け出た精霊のような透明感のある  
はかな儚さを連想させるけれど、その笑顔からにじみ出るなんともいえな  
い『黒さ』…というか…『裏』に気がついている人はいないみたい。

わたしには、なんで他のみんながわからないのかが、わからない。  
こんなにもわかりやすい人なのに。

不快感を表情に出さないよう、今日もわたしの表情筋は大活躍して  
いる。

あとで筋肉痛になりそうで怖い。

「お嬢様も、ラテン語を学んでいらつしやるとお聞きましたか」  
「ええ、ハンナさん。家庭教師の先生に教わっていたけれど……自  
信はありませんわ」

「自信がないのなら、尚更勉強しませんとね？」

「…ええ、そうですね」

ハンナ先生に優しくたしな窘められて、お嬢様は苦笑していた。  
ソファから立ち上がり、ラテン語の本を手にとって…掃除の終わった  
窓辺に立って朗読を始める。

窓から差し込む光が彼女のプラチナブロンドに透けて、まるで光を  
まとった天使のように見えた。  
メゾソプラノの美しい声が、静かな客間の中の唯一の音。

抑揚の少ない朗読を聴いているうちに、わたしのまぶたはだんだん  
と重くなってゆく。

…ん…だめ。  
寝ちゃ、だめよ。

一生懸命自分に言い聞かせる声も、やがてまったく利かなくなった。

わたしの意識が浮上したとき、燃えているような熱い額に冷たい何  
かが触れた。  
熱くて、熱くて、苦しかったのが、ほんの少しだけ和らぐ。

「きもちいい…」

思わずつぶやいた言葉に、返事がかえってきた。

「そう？ それはよかった」

暗闇の中、目を凝らしても声の主の姿は見えない。

「…だあれ？ マリナ？」

熱のせいか、いつもより自分の声が舌足らずになっていることに気がついた。

深く沈むこむような、上等のベッドに寝かされている。

ここは、丘の上の家なのかしら。

「ちがうよ。マリナじゃない」

かえってきた返事には、ほんのすこしだけ棘があつて。わたしは熱で朦朧もろうとした頭を働かせる。

声は、高め。

話し方は、幼い。敬語でも丁寧語でもない。

こんな風にわたしに話しかける人…いたかな？

「…あなたは、だあれ？ ここは、どこ？ いまは…」

何時ごろなの、と続けて訊こうとして……わたしが寝かされているベッドの傍に座っている人の後ろに、窓があることに気がついた。逆光で傍についていてくれた人の姿はわからないけれど、窓の外の空に星が瞬いているのが見える。

いまは、夜。

月と星の灯りしかないから、この部屋は真っ暗で…すぐ傍にいるひ

との顔さえわからない。

「家に、帰らなくちゃ」

「…だめだよ、リーナ。まだ寝ていないと」

ベッドから身を起こそうとしたわたしは、すぐに布団の中に戻されてしまった。

力がぜんぜん入らなくて、ろくに抗うこともできない。

「わたし、帰る。きつと、マリナが心配してる」

「…だめ。君は授業中に高い熱を出して、倒れたんだよ。マリナには知らせがいつているから、心配ない」

「そう、なの？」

ほんの少しだけほつとして、わたしはベッドからの脱出を止めた。誰かの手が、わたしの額の上から落ちたタオルを拾い上げる。水の音がした後、もう一度冷たいタオルが額に乗せられた。

「ありがとう」

お礼を言うと、そっけない返事が返ってくる。

「どういたしました。…熱冷ましの薬をハンナが用意してくれたけど、飲める？」

「……………飲む」

「すっごく嫌そうな顔してるけど？」

くすくすと笑いながら言われて、わたしはぶうっと頬が膨らむのを止められなかった。

「だって、苦いんだもの、その薬。…本当は、嫌なんだもの」

素直にそう告げると、『誰か』はまた笑う。

「嫌だけど、飲むわ。早く治して、元気になって、マリナを安心させてあげなくちゃ」

「…。」

『誰か』は、ベッドの上に身を起こした私の背にふわふわのクッションを差し入れて、楽な姿勢になるよう調整した後、差し出した手の中にちいさなマグカップを置いてくれた。

わたしは、部屋の灯りがついていないことに少しだけ感謝する。

光があるところでのこの薬を見ると…匂いや味よりも、まずその色に腰がひけてしまうから。

覚悟を決めて、熱冷ましの薬に口をつける。

一口飲んだら、あまりの苦さにむせてしまった。

「…っ！」

「リーナ、大丈夫？」

ゆっくりと背中をさすってくれる『誰か』に感謝しながら、頷く。

「へいき。がんばって飲まないで、熱が下がらないし…マリナが心配するから」

もう一度口をあけて、一気に飲んでしまおうとした時、わたしの手の中からマグカップが奪われた。

「…?」

「リーナ…涙がでてるよ。君が泣いてしまうほど、飲みにくい薬なの?」

『誰か』は、そつとわたしの頬に手をのばして…触れる。

熱で火照ったわたしの肌を、その手はすこしだけ冷やしてくれた。

「…うん…すごく苦いの」

冷たい手が気持ちよくて、目を閉じる。

「じゃあ、手伝ってあげる」

「…?」

ぐいつと後頭部に手を差し入れられた。

なにをするつもりなのか訊こうと口を開いた瞬間、唇に柔らかいものが押し当てられ、次いで苦い熱冷ましの薬が口の中に流し込まれる。

「…んっ」

後ろに仰け反っていた頭を前に傾けられて、その動きと共に口から喉へと薬を飲み下すことができた。

あつという間の出来事に、わたしはぼんやりと暗闇の中の『誰か』を見上げる。

口の中に残る薬の苦さだけが、夢ではないと教えてくれていた。

「本当にすごく苦いね、この薬」

『誰か』の呆れたような眩きを聞いて、ふっと笑みがこぼれる。わたしの表情がわかったのか、少しあわてた言葉が返ってきた。

「リーナの言葉を疑っていたわけじゃないよ？」

「…うん」

『誰か』の足音が少し遠ざかって、こぼこぼ…という水音が聴こえた。

「リーナ、口直しの水…飲みたい？」

「…うん、飲む」

わたしは深く考えずに答える。

その後で、今度は自分ひとりで飲めるということを伝えなくちゃ…と思ったときには、もう唇を塞がれていて…口移しで水を与えられていた。

こくん、こくん、こくん。

口の中の苦い薬の味を、爽やかな水が洗い流してゆく。

「レモン 檸檬水の味、わかった？」

『誰か』の問いに、わたしは首をふって否定の意をあらわす。

「そう。まだ熱で味がわからなくなっているんだね。…には、とても甘く感じたけど」

『誰か』は、わたしの背中に置いてあったクッションを引き抜くと、

再びベッドに寝かせてくれた。

あごの下までかけ布団をしっかりとかけられて、額には冷たいタオルを置いてくれる。

「ぐっすり寝て、早く元気になって。……の可愛い、赤ずきんちゃん」

そつと耳元で囁かれた言葉と、まぶたに落とされた唇の感触を、わたしは夢と現の狭間で受け取っていた。

09 お嬢様と勉強会（後書き）

ご精読ありがとうございます。

ラテン語について（Wiki より抜粋）

近代において、広く欧州知識人の公用語として用いられた。

学問的世界においては、ラテン語はなお権威ある言葉であり世界的に高い地位を有する言語である。現在でも学術用語にラテン語が使用されるのには、学術用の語彙が整備されており、かつ死語であるために文法などの面で変化が起きない（現実には中世・近世を通して多少の変化はあったが）という面、あるいは1つの近代語の立場に偏らずに中立的でいられるという面も見逃すことはできない。

現在においてもラテン語の知識は一定の教養を表すものである。日本での「古典」「古文」ないし「漢文」に相当する科目として存在する。

10 お嬢様と朝食を（前書き）

リーナ 視点

翌朝、目を覚ましたら、ベッドの傍に泣き出しそうな顔をしたマリナがいた。

マリナの震える瞳の中に、わたしの顔が映っている。

わたしはかすれる声で、謝罪のことばを口にした。

「マリナ、心配かけて…ごめんなさい」

「……謝らないで、リーナ。謝るのは、私。あなたの体調の変化にすら気がつかずに……」

ぼろぼろと涙をこぼすマリナの後ろから、ハンナ先生が顔を出す。

「あら、目が覚めたのね。リーナ、熱はどう？ ……うん、だいぶ下がってきたみたいね。食欲は？ 何か食べたいものはある？」

わたしはふるふると首を振って、何も食べたくないことを伝える。

「マリナを……」

慰めてあげてほしい…と目で伝えると、先生は大きなため息をついた。

「まったく…ジャックもリーナも、マリナに甘すぎるわ。泣き止むまでほっつておけばいいの」

「母さん、酷い」

先生はぐずぐずと鼻をかんでいるマリナの背中を、バンッと勢いよ

く叩いた。

「…ほら、しゃきつとしなさい！ 泣いている暇があったら、リーナに果物でも食べさせてあげて。食欲がなくても、何か少しでもお腹に入れておかないと、治るものも治りませんよ」  
「うん。リーナ、すぐにもってくるからね」

ぱたぱたとマリナの足音が遠ざかっていく。

「まったく、あの子はいくつになっても泣き虫なんだから」

ハンナ先生は苦笑いしながら、わたしの額の上のタオルを冷たいものに取り替えてくれる。

「先生……ここ…丘の上のお家…？」

「そうよ。お嬢様が空いている部屋があるのだから、使って欲しい…と言って下さったの」

「…。」

「治ったら、きちんとお嬢様にお礼をしなくてはね」

「…はい」

すぐくすぐく嫌だけど、お部屋を借りているお礼はきちんとしなくてはいけない。

これ以上余計な借りが増える前に、早く治さなくちゃ。

強く決意したあとで、ふと、昨日の夜のことを思い出す。

「先生、昨日…わたしの傍についてくれた子…知ってる？  
お部屋が暗くて、誰なのかわからなかったの」

あのひとにもお礼を言わなければ。  
そう思つて何気なく訊いた質問だった。

「昨夜は誰も手伝いに来ていないはずよ？」

「…え？ だつて…」

「私が残るかマリナを呼ぶと言つただけど、お嬢様とセドリックさんが…今晚はこちらで面倒を見るとおっしゃつて」

「…そう、なの？ じゃあ、あれは…」

「…いったい、誰だつたの…？」

きちんと考えたいのに、熱のせいか頭がうまく回らない。思考がぐるぐると定まらない。

それでも一生懸命手がかりになりそうなことを思い出そうとしているところに、マリナが戻ってきた。

「粗く潰した苺に、砂糖とミルクをかけたものよ。私が熱を出した時、母さんがよく作ってくれたものなんだけど…リーナの口にあつかしら？」

「マリナ、ありがとう」

器の中には、赤い苺とほんのりピンク色に染まったミルクがたくさん入っている。

味がわかるかどうか不安に思いながら、まずはミルクを一口飲んだ。

「…どう？ 味がわかる？」

「すこしだけ、甘いかも」

マリナとハンナ先生に見守られながらゆっくりと食べたあと、わたしは再び眠りについた。

明日には起き上がれるようになって祈りつつ…。

次の日の朝、わたしは小鳥の鳴き声で目を覚ました。  
ベッドから身を起こして、窓の外を見ると、朝日が半分ぐらい顔を  
出したところだった。

6時ぐらい、かな？  
ベッドから降りたときちよつと足元がふらついたけど…熱は下がっ  
ているみたいだし、大丈夫。

わたしの着替えの服は、ベッドの脇の小机にきちんと畳まれて置い  
てあった。  
顔を洗ったあとでタオルを濡らし、夜着を脱いでタオルで身体をき  
れいに拭いてから、洋服に着替える。

シーツや枕カバーは後で洗濯するのは確実だから、簡単なベッドメ  
イクで済ませた。  
借りていた夜着もきちんと畳んで置いておく。

音をたてないように気をつけながら静かに階段を下りて、わたしは  
炊事室を目指す。  
そうつとドアを開けると、背の高い男の人が一人で調理している姿  
が見えた。

確か彼の名前は……セドリックさん。

「おはようございます、セドリックさん」

緊張しながら声をかけたわたしに、彼はにこやかに応対してくれた。

「…おはようございます。起き上がって大丈夫なのですか？」

「はい。二日間もお邪魔してしまって、もうしわけありません」

「いいえ。貴女をお引き留めしたのは、私の主人の意向が大きかったのですよ。お気になさらないで下さいね」

セドリツクさんは、子供のわたしにも丁寧に話してくれる。

そんなところは、ジャックにとても良く似ていた。

…まあ、あのお嬢様の従者なら、これくらい性格が良くないと途中で辞めてしまうに違いない。

「あの、何かわたしにもお手伝いできることはありませんか？」

そのために、降りてきた。

じつとセドリツクさんを見つめると、微笑みと苦笑が混じった表情が浮かぶ。

「…貴女は病み上がりですし、まだちいさいのですから、気にせず寝ていて良いんですよ」

「もうだいじょうぶ、です。お手伝いしたいの」

退かない覚悟で答えると、彼はちいさなため息を漏らした。

「……貴女というひとは……」

「？」

なにか怒らせるようなことをしてしまっただろうか？

わたしが首を傾げた瞬間、お腹の虫が鳴いた。

きゅるるるる。

ぱつと頬が熱くなる。

うう、はずかしい…。

おそろおそろセドリックさんを見上げると、彼はふんわり笑って言った。

「それでは、まず、味見をしていただきましょうか。貴女が美味しいと言ってくださったら、私も主に自信をもってお勧めできますからね」

丘の上のお家の朝食は、朝からとても豪華だった。

パンにハムとホワイトソースを挟んで焼いたクロックムッシュ。茹でたアスパラガスとじゃがいもの上にポーチドエッグとバターをそれぞれのせて、かるく塩と胡椒をふり、全体にチーズを削ったサラダ。

飲み物はダージリンのストレートで、デザートは、苺のムース。

セドリックさんのお手伝いをしながら、味見と称してたくさん食べさせてもらう。

そうしているうちに、わたしのお腹はいつの間にか満腹になっていた。

朝食の支度が総て整い、セドリックさんがお嬢様を呼びにいつの間、わたしはワゴンに料理とティーセットを乗せて食堂へ運ぶ。

セツティングなんてよくわからないから、ワゴンテーブルのすぐ近くに置いておく。

このまま食堂の中で待つのがいいのか、廊下に出て待つのがいいのか迷っているうちに、お嬢様がセドリックさんと一緒に現れた。

「おはようございます、リーナさん。もう体調はよろしいの？」

朝から無駄にテンションの高いひとだな…と…内心あきれながら、わたしは深々と頭を下げる。

「…おはようございます、お嬢様。このたびは、たいへんご迷惑を…」

わたしが舌を噛まないように気をつけながら、丁寧語でお礼を述べている途中に「お礼なんて必要ないわ」とお嬢様に強引に遮られてしまった。

本人が聞きたくないというのならいいか…と、わたしは頷いてすみやかに食堂から退出しようとした。

「リーナさん、何処へ行くの？」

お嬢様の鋭い声にびっくりしながら、わたしは答える。

「…？ 家に、帰ります」

「…朝食は？ わたくし、リーナさんと一緒にできるのを楽しみにしておりますのに」

悲しげな表情。残念そうな声。

今日も朝からお嬢様の演技力は絶好調らしい。

観客の立場であるわたしにとっては、鳥肌がたつて仕方が無いほどの名演技。

「先ほど、セドリックさんのお手伝いをしながら味見をさせていただったので…お腹いっぱいです」

「…まあ、ずるいわ！ セドリックと一緒にするのは良くて、わたくしでは駄目なの？」

「…。」

お嬢様の瞳は、涙で潤んでいる。

涙まで自由自在にできるとは……上流階級のひとたちのスキルも馬鹿にできない。

わたしが違う方面で感心していると、お嬢様は焦れたようにわたしの手を握った。

「リーナさん？ わたくしの声、聞こえている？」

「…？ はい」

「そう？ 良かった。じゃあ、今日の貴女はわたくしのものなの。だから、帰っては駄目よ？」

「……はい？」

突然の話に、わたしは目を見開いてお嬢様を見上げる。

「うふふ　目がまんまるになっているわよ、わたくしの子猫ちゃん」

…いや、うふふじゃないし。あなたの猫でもないから。わたしは説明を求めます。

お嬢様はわたしの困惑した視線を受け止めながら、笑顔で言った。

「…食事は無理でも、お茶くらい一緒に召し上がってくれるでしょう？ 食べながらどういふことなのか、お話してさしあげるわ」

「…。」

こうしてわたしは、お嬢様と朝食を一緒にすることになったのです。

10 お嬢様と朝食を（後書き）

ご精読ありがとうございました。

本当は「苺と練乳＋ミルク」にしたかったのですが、練乳は1800年代の発売だったので、砂糖で代用しました。

お嬢様の台詞の「私」にルビをふるのが面倒になったので、ひらがな表記に変えています。

11 お嬢様の恩返し(前書き)

リーナ 視点

11 お嬢様の恩返し

朝食の席でのお嬢様の話をまとめると、こんな感じだった。

お嬢様がマリナに服を注文した

先日助けてもらったお礼に、わたしへのプレゼント用の服も頼んだ服のデザインの参考に、お嬢様の服をマリナに見せてあげることによってわたしにどんな服が似合うか、お嬢様の服を使って着せ替えして遊ばましよう

恩返しの品としてふさわしいドレスにしましょう

「…。」

それで、今、こんなことになっているらしい。

わたしはふんだんにレースが飾られた豪華なドレスを着せられて、マリナとお嬢様の前に立たされている。二人はきゃーきゃーはしゃぎながら、次はコレを…でもこっちもいいですよ…などと盛り上がっていた。

もともとお嬢様のドレスだから、わたしが着るには大きい。

本当ならひざ下文のドレスは、わたしが着ると踝あたりまでのロングドレスになっている。

それでも十分似あっているから問題ない…と二人に口を揃えて言われてしまつて…わたしは反論の糸口を失っていた。

そもそもお礼つて…恩返しつて…相手の迷惑わたしにならないということが、必須条件ではないの？

「襟と袖口には、こちらのドレスのデザインと似た感じでレースを付けたいんですが、お嬢様はどう思われますか？」

「…そうね、良いと思うわ。色はリーナさんの瞳の色にあわせたらどうかしら？」

「ええ、素晴らしいと思いますわ。それでは、全体的に緑の色調で…」

真剣な表情で相談している二人に気がつかれないように、着替えの服を抱え、そうつとお嬢様の部屋を抜け出す。

これ以上、着せ替え人形のように遊ばれてはたまらない。

慣れないペチコートでふんわり広がっているドレスの裾を踏まないように、慎重に階段を下りた先でアルトと鉢合わせした。

「…あ、アルト」

アルトはマリナによく似た顔に驚きの表情を浮かべて固まっている。

「……え、お、お前…リーナか？」

「うん、わたしだけど…？」

それがどうかしたのって訊いたら、アルトは顔をぶんぶん左右に振った。

「ど、どーしたんだよ、その恰好？」

「マリナとお嬢様に遊ばれていたの。こんなドレス、わたしには似合わないのに…」

わたしがため息まじりにそう言うと、アルトはまた激しく頭を振った。

そんなに頭をふって、気持ち悪くならないのか…謎。

「そ、そんなことない。すごく可愛い」

「……かわいい？ わたしが？」

アルトの言葉に驚いて、下から顔を覗き込むように訊き返した。わたしの視線に気がついたアルトは、顔を真っ赤にしてのけ反る。

「…ちよ！ おまえ、そんなに近づくなよっ」

「……？」

1m近く離れていると思うのだけど…近いのかしら。とりあえずわたしが一步後ろに下がる。

「あー、その、なんだ…」

「…？」

本当は早くこの丘の家を出ていきたいのだけど、アルトがまだ何か言葉を選んでいる様子なので、とりあえず待ってみる。

小首を傾げてアルトを見上げているわたしの耳に、くすくすとちいさな笑い声が聞こえてきた。

笑い声のする方角に視線を移すと、マリナが壁の向こうからひよっこり顔を出して笑っていた。

「姉ちゃん、何のぞいてるんだよ!？」

「ええ〜? だって、邪魔しちゃいけないかなあ…って思ってた…っ!」

「アルト、お姉ちゃんにバレてないと思ってるの〜?」

うふふふと含み笑いをするマリナを、アルトは真っ赤な顔で睨みつけている。

「顔、赤くなってるわよ〜?」

「うっせーな! 姉ちゃんには関係ないだろ?!」

「関係あるもーん。私はリーナの保護者で、アルトのお姉ちゃんだもーん」

「…っ」

二人が姉弟喧嘩けんかに気をとられている隙に…と…わたしはそろりそろりと玄関の方角へ向けて歩き出す。

またお嬢様の部屋に引き戻されては、たまらない。

玄関まであと少し…というところまで来て、どこで服を着替えたらいいいのか…という問題に気がついた。

宝石のようにキラキラ光るボタンや綺麗な色のリボンがたくさん付いているドレスを、一人で脱げるのかということも…。

「ごじごじ」

ため息と一緒に口から出たつぶやきに、意外なところから声がかかった。

「どうかしましたか？」

低くて柔らかな声が落ちてきて、顔を上げると……セドリックさんがわたしの後ろに立っていた。

わたしが事情を話すと、セドリックさんは苦笑しながら手伝いを申し出てくれた。

わたしはありがたく厚意に甘えることにして、客間で着替えさせてもらった。

「……ありがとうございます。とてもたすかりました」

ぺこりとお辞儀をしながらセドリックさんに御礼を言うと、ほんわりとした笑みを返してくれる。

「いいえ、どういたしまして。……元はと言えば、私の主の一方的な恩返しが原因ですからね」

「……」

たしかにその通り……だと思ったけれど……とりあえず口には出さずに、わたしは曖昧に微笑んでおく。

「それに……」

セドリックさんは手馴れた手つきでドレスを片付けながら、話を続けた。

「リーナさんと普通に話せるようになったのは、嬉しいことです。

……何か、心境の変化でも？」

さりげない問いかけの奥に隠された何かを察知して、わたしは息を大きく吸った。

ここは、間違えてはいけないうところ。

勘だけど、そんな気がする。

「先週、一週間ずっと……マリナがこちらで見聞きした話と、何を質問されてどう答えたのか……わたしに話してくれたから……」

緊張で、声がかすれそうになる。

「……その話を聞いて、わたしたちの『敵』ではない……って思ったの」

「……敵、ですか？」

「そう」

頷いた私に、セドリックさんは少しの間沈黙して……問いかけた。

「それは、リーナさんの里親の……ジャックさんが行方不明になっているというお話の……？」

「そう。ジャックが自分の意思で姿を消すわけがないから……誰かにさらわれたことは間違いないの。……誰が、どんな理由で……ってことがわからないのだけだ」

「大変失礼ですが、人ひとりを長い間……人目につかないように

隠して生かしておくのは、大変なことですよ？ 本当にジャックさんに失踪する理由がないとしたら、もう亡くなっていると考えるほうが…」

わたしは、最後まで言わせなかった。

「そんなことない。ジャックは絶対に生きているもの」

「…リーナさんがそう思う根拠は？」

セドリックさんはドレスを畳んで客間のテーブルの上に置き、わたしと視線が合うようにしゃがみこむ。

「ジャックが死んだら、絶対に、わたしとマリナにはわかるもの」

「……。」

「亡くなったひとはみんな天国へ行くけれど、何か言い残したことがあるひとは、親しいひとの夢枕に立って、最後のお話をしていくんだって…聞いたの。ジャックがもし亡くなっているのなら、絶対に、わたしとマリナのところに来るわ。……ジャックがわたしたちの夢に出てこないのは、無事な証拠なの」

わたしはきちんと理由を話したのに、セドリックさんは痛ましいものを見るような表情で。

わたしは、ああ、またか…と思う。

また、理解されない。

ジャックが生きていることを、否定される。

早く忘れる、諦めると…。

「　　そんな顔でわたしを見ないで」

わたしの視界が歪む。  
涙のせいで。

「リーナさん…」

困惑したセドリックさんの声と表情から逃れたくて、私は少しずつ後ろに下がる。

客間のドアに後ろ手が触れた瞬間、何か別なものに手をとられて引き寄せられた。

ふんわり甘い花の香りとキラキラ光る髪の毛が、わたしの嗅覚と視界を支配する。

「　　ご主人様？」

セドリックさんの焦った声が聞こえたけれど、お嬢様は彼の方を見向きもせず無邪気に言った。

「赤ずきんちゃん、一緒に逃げましょう？」

「…え？」

わたしが返事をしないうちに、ぐいっと強い力で手をつかまれて…  
…気がつけば駆け出していた。

丘の上のお家から、外へ。

12 お嬢様の秘密？（前書き）

リーナ  
視点

12 お嬢様の秘密？

セドリックさんの制止する声を振り切って、わたしたちは走った。

走って、走って、走って……息がうまくできないほど走って……ようやく疲れた足を止めて、地面の上に座り込んだ。

しばらくの間肩で息をして、苦しい呼吸を整えていたのだけど、ふとした拍子にお互いの目があつと、なんだか可笑しくて同時に笑い出す。

「「あはははははは！」」

笑ったら、また呼吸困難になった。

「…ちよ…つと、苦しい。お腹いたい」

「あはは…わたくしも」

今度はわたしから、お嬢様の手を取って立ち上がった。

「…リーナさん？」

不思議そうな顔でこちらを見上げるお嬢様に、短く理由を告げた。

「「」つちから水音がするの」

お嬢様の手をひいて、てくてくと歩いてゆくと、すぐにちいさな小

川を見つけた。

小川のふちに座り、両手で水をすくって喉を潤す。

「……おいしい！ ただの水が、こんなに美味しく感じるなんて」

お嬢様の言葉が可笑しくて、わたしはまた笑い出した。

「お腹がへっっているときに食べるごはんが、とってもおいしく感じるのと、おんなじだと思う」

「……そうなの？」

お嬢様の驚いた表情を見て、わたしは例えが悪かったな……と……すこしだけ後悔した。

「わたくしは、お腹が減ったまま我慢することも、喉が渴いたのに飲むものが無いということも、今まで一度もなかったから」

「……」

「でも、初めて知ったわ」

邪気の無い心からのお嬢様の笑顔を見て、わたしはつい本音を漏らす。

「いつも、そんな風だったらいいのに」

「……え？」

「いま、ほんとうに言葉どおりのことを、思っていたでしょう？」

「……ええ」

「いつもは、言葉と本音と表情が、あっていないから」

怒るか否定するか……と……思いながら率直に告げると、意外にもお嬢様はわたしの言葉に頷いた。

「そうね」

その静かな横顔に、陰りが見えたような気がして、わたしは目をこしごしとこすってみた。

柔らかそうなプラチナブロンドの美しい髪が、強い風に吹かれて揺らめいている。

宝石のように綺麗な水色の瞳は、伏せられている長いまつげに半分以上隠れていた。

淡い淡紅色の唇はすこしだけ開いていて…言葉を搜しているように見える。

「盾や鎧みたいなもの？」

「…え？」

「あなたにとつて、笑顔や…丁寧なものいいは、何かを守ったり、何かを防いだりするものなのかしら…」と思つて

「…赤ずきんちゃんは、どうしてそんな風に思つたの？」

逆に問いかけられて、わたしはちよつとだけ考え込んだ。  
何故つて…それは。

「…楽しそうに見えないから、かも」

「…。」

「ジャックが行方不明になつた後…わたしも、マリナも、他のひとの前では…平気な顔をしていなくちゃいけなかつた。すこしでも沈んだ顔をしていると、心配をかけたり、憐れまれたりするから」

「…それは…」

「あなたと同じじゃないかもしれないけど、気になつたの」

「…。」

「どこかで息抜きしないと、苦しくなるから」

「…ええ、そうね」

わたしは弱弱しく頷くお嬢様を見て、セドリックさんは素顔を見せられる相手ではないのかと…疑問に思った。

「…ただ、そこまで踏み込んで話をするのは、さすがに失礼かも…と…思い留まる。」

お嬢様とセドリックさんは、『客人』であって…ずっとこの村に残るひとたちじゃないから。

「…あなたが…」

お嬢様が顔を上げて、まっすぐにわたしを見た。

「…赤ずきんちゃん、あなたはわたくしの本当を受け止めてくれる」

「？」

「…。」

その真剣な表情に驚いて、わたしが一瞬言葉を失った時、雷鳴が轟とんいた。

生木を裂くような雷の音と地響きが辺りに響き渡り、大粒の雨が激しく降り注ぐ。

木の下で雨宿りして、防げるような雨じゃない。

とっさにそう判断したわたしは、再びお嬢様の手を取って駆け出した。

「こつち！」

大粒の雨に打たれて、またたく間に全身びしょ濡れになる。

この場所から丘の上の家まで戻るより、わたしの家の方がずっと近い。  
強い風にあおられ、雨でぬかるんだ土に足をとられそうになりながら、必死で前だけを見て進んだ。

風と雷いかずちの音が邪魔で、大声で話さないとよく聞こえない。

「雷かみなりの光と音の間隔が、どんどん縮まっているわー！」

「あの丘をこえれば、わたしの家だから！」

やっとの思いで我が家へたどり着くと、家の中が濡れないように急いで玄関の扉を閉めた。

戸棚の中から乾いたバスタオルを引っ張り出してお嬢様に押付けてから、手早く暖炉と竈やかんに火を入れた。

薬缶やかんに水を汲んで、竈の上にセットする。

「身体が冷えるといけないから、暖炉のまえに。…今、マリナの服をもつてくる。濡れた服をきがえて」

わたしはお嬢様にそう言って駆け出そうとした……のだけど、寸前で引きとめられた。

「わたくしよりも先に、あなたが着替えて。忘れているようだけど、赤ずきんちゃんは病み上がりなのよ？ せっかく熱が下がったのに、濡れた身体のままでは駄目。またあの苦い薬を飲むのは嫌でしょう？ ……ね？ そうしてちょうだい」

「……うん。急いできかえてくるから」

ここで押し問答しても時間の無駄になる。そう判断したわたしは、自分用のバスタオルを持って屋根裏部屋に移動した。

水の滴るびしょ濡れの服は、想像以上に脱ぎにくくて大変だった。苦勞して脱ぎ捨てて、バスタオルで身体を拭き、乾いた下着と服を身に着ける。

髪の毛はバスタオルにくるんで、ぎゅっと絞る。ジャックやマリナに望まれるがまま、髪を伸ばしていたことを少しだけ悔やんだ。

くるくるつと髪の毛を巻き込んで、バスタオルを頭の上でまとめると、マリナとジャックの寝室に駆け込む。マリナの衣装箱の中から比較的丈が短めのワンピースと新品の下着を抜き出して、急いで階下へと降りた。

「おそくなって、ごめんなさい」

パタパタと足音を立てて駆け寄ると、お嬢様は濡れた服を脱いで、暖炉の正面に座っていた。バスタオルで身体を包み、もう一枚のバスタオルで髪の毛を乾かしている。

暖炉の炎のやわらかいオレンジ色の光に照らされて、お嬢様の髪の毛はキラキラと輝いていた。

「これ、マリナの。綿だから、肌ざわりは悪いかもしれないけど。……すぐに、あたたかいお茶をいれるから」

できるだけお嬢様の素肌を見ないようにして着替えを差し出す。手の上から服の重みが消えたのを感じてから、くるっとお嬢様に背を向けたとき……後ろから抱きしめられた。

「……だめ。髪の毛をちゃんと拭いてこなかったでしょう？」

わたしが抗議する間もなく、バスタオルが解かれて……濡れた髪の毛が広がった。

「あとでやるから、へいき。離して」  
「だめだよ」

耳元の近くで囁かれて、びくっと身体が震える。

お嬢様は優しい手つきでわたしの髪の毛を拭きながら言った。

「……ちゃんと乾かさないと、また熱が出てしまうから」

ちいさな子に言い聞かせるようなその口調に、カチンときて言い返す。

「だいじょうぶだもの」

「…そう?」

「また熱がでて、お薬をのめば治るもの」

わたしの言葉に、お嬢様はくすくす笑いながら尋ねた。

「…泣くほど苦かった薬なのに、また飲みたいの?」

「…え?」

どうして、それを知っているのか……と、訊くつもりだった。

振り返ると、わたしを抱きしめていたひとのバスタオルがはらりと解けた。

……つるぺたな胸と下半身を見て、あの夜、わたしの傍にいてくれたひとが、誰だったかを知った。

「わたし、絶対に秘密は守るから」

「…。」

「あなたが女装趣味の変態だなんて、誰にも言わない。秘密は必ず守るわ。他人に言えない趣味があるってたいへんなことかもしれないけど…想像もできないけど…あなたがこの村にいるあいだ、わたしにできることがあるなら、できるだけ力になれるようがんばる」

……。

わたしが誠意をこめて、秘密を守ると誓ったのに、ものすごい……  
く微妙な顔をされた。

何がいけなかったのか、よくわからない。

13 秘密を解いたそのあとで(前書き)

アリス 視点

### 13 秘密を解いたそのあとで

初めから、彼女には隠し通す気はなかったのかもしれない。

隠したくない。

隠されたくない。

偽りの姿のまま、生きていたくない。

本当の自分を、誰かに知ってほしい。

幼い頃から、誰にも言えなかった望み。

生まれたときから、生き永らえるために『女の子』として育てられてきた。

出生届に書かれた名前も、すべて偽り。

我が子を殺されないために、という両親の願い。

守るため…延命するための、苦肉の策だったという。

いつしか、『自分』が本当に生きているのかさえ、よく解らなくなつた。

解らないから、『自分』の命など、どうにでもなればいと思つていた。

生き延びていても、『虚しい』と思う感情は積もっていくばかりで、苦しかった。

偽りの平和の中で身体は順調に成長してゆき、偽りの姿で敵を欺けるのもあと僅かな時間しかない。

覚悟を決めた両親と叔父が、こちらから反撃に出ることを決めたのは、去年の秋のこと。

長い時間をかけて集めた『敵』の悪事の証拠を公にして、国王陛下に直接訴え出た。

最高裁判所の審議が進む中、敵が送り込む暗殺者の手から逃れるために、従者と二人で国内を旅して回った。

ひとつの処に長く留まれば、それだけ敵に見つかる可能性が高まる。引き続き性別を偽ったままで年齢を詐称し、名と身分を隠して各地を巡った。

目立たぬように一人だけ付き添う優秀な従者が、自分のために誠意尽くしてくれているのは…良くわかつている。

彼には感謝しているが、『自分』の生に対する執着は無かった。

周囲が必死になればなるほど、『生きている』という実感が希薄になつてゆく。

暗殺を警戒しながら身を潜めて生き延びているけれど、『生きている』ことが幸せなのかわからない。

どんな形で『自分』が死ぬのだとしても…自らの運命に抗えずに消えるだけだと…他人事のように考えていた。

いつ殺されたとしても、きっと、何も感じないだろう。

確かに、そう、思っていたのに……彼女の怒りに燃える瞳を見た瞬間、総てが一瞬にして覆くつがえされた。

初対面のちいさな女の子は、多くを語らなかつた。

だけど、不用意に雑木林に足を踏み入れた自分を、眼差しひとつで責めたてた。

何故、もっと注意しないのか。

何故、もっと気をつけないのか。

何故、もっと自分を大切にしないのか。

両親は自分の身の上を憐れみ、腫れ物に触るように扱った。

真綿に包まれるように大切に育てられてきたから、面と向って剥きだしの感情をぶつけられるのは、初めのことで……とても驚いた。

彼女の烈しい感情に驚いて、自分の嘘を見抜く彼女の洞察力に驚いて、予期せぬ反応が得られる度に『自分』が喜んでいる事実に驚いた。

彼女のことを、もっと知りたい。

彼女と一緒にいたら、いつか『自分』を取り戻せるかもしれない。生きたいと……生きていたいと、思えるようになるかもしれない。

そう思って……そう願って、赤ずきんの少女に近づく布石を打った。

初めは、彼女と一緒に住む女性を歓迎して…間接的にこちらに敵意がないことを示す。

次に、一緒に勉強する…という口実を作って、彼女を自分の家に呼び寄せた。

彼女が高熱を出して倒れたのは想定外だったけれど、熱に浮かされた彼女は歳相応の可愛い素顔を見せてくれた。

病気で弱っているときも、マリナのことばかり口にする彼女に苛つきながら、初めて見た彼女の涙や、あどけない笑顔に心を揺さぶられた。

利用するだけ、楽しませてもらうだけ……それだけのはずだったのに。

自分でも気がつかないうちに、いつの間にか気持ちに変化していて、自分自身のことよりも、君のことが気になって仕方がない。

…本当は男であることを知られたら、女装していたことを軽蔑されるのかもしれない。

命を狙われていることを話したら、厄介げんえんごとに巻き込まれたくないと、けんえん倦厭されるのかもしれない。

…でも。

それでも。

君に嘘はつきたくない。  
ひとつの嘘を隠すためには、新たな嘘が必要で……繰り返す度に、  
虚しさを覚えるから。

まっすぐに人の目を見て話す君と、偽りの姿で『友情』を育むのは  
嫌だ。

本当の姿を見られて、抱える問題を知られて、壊れてしまう関係な  
ら……修復不可能なくらいに、跡形もなく全て壊れてしまえばいい。

だから、バスタオルを押さえなかった。

身体を覆っていたバスタオルが解けて、私の生まれたままの姿を見  
た彼女は、恥じらいも動揺も見せずに……力強い口調で宣言した。

「わたし、絶対に秘密は守るから」

リーナの綺麗な萌葱色もえぎの瞳には、真摯な気持ちまじが宿っていた。

軽蔑されなかったことにほっと一安心したとき、続けて言われた言  
葉に固まった。

「あなたが女装趣味の変態だなんて、誰にも言わない。秘密は必ず  
守るわ。他人に言えない趣味があるってたいへんなことかもしれないな

いけど…想像もできないけど…あなたがこの村にいるあいだ、わたしにできることがあるなら、できるだけ力になれるようがんばる」「……。」

女装趣味の変態…か。

それは想定外だった。

確かにこちらの事情を知らなければ、趣味で楽しんでいると思われるのは仕方が無いけど。

さて、どうしよう。

少しだけ冷静に戻った頭で考える。

今ならまだ、こちらの事情を話さずに…やりすごせる。

『女装趣味』だという誤解をそのまま生かせば、自分という災禍にリーナを巻き込むことなく…いつものように…あともう少しの間だけこの村で過ごし、行く先を告げずに消えればそれで終わり。

…それで、関係は絶たれる。

リーナのことを考えたら、それが一番いい。

『敵』に、自分と親しくしていた…なんて知られたら、命さえ危うくなるのだから。

けど。  
でも。

迷っている私に、リーナが心配そうな表情で話しかけてきた。

「わたし、なにかあなたを怒らせるようなこと、言った…?」

少し、舌足らずな声で…赤い唇で、問われる。

その唇が甘く柔らかなことを、あの夜に知った。

今でさえこれだけ愛らしい少女なのだから、あと数年も経てば誰もがひづか跪かすにはいられないほどの美しい女性に成長するだろう。

…そして、いつか誰かの手を取る。  
私ではない、別の誰かのものになる。

「嫌だ」

気がついたら、本音の言葉が口からこぼれ落ちていた。

「…え?」

赤ずきんの少女は、突然言われた言葉に首を傾げる。

その仕草も、濡れた艶やかな栗色の髪も、美しい萌黄色の瞳も、何もかもが愛しくて。

「誰にも譲れない。絶対に」

気持ちを言葉にしたら、迷いは晴れた。

自分の顔を覗きこんでいる愛しい少女に手を伸ばし、抱き寄せて耳元で囁く。

「私の名前は、アリス。アリストテレス」

「…ありすとてれす？」

私の腕の中でじたばたと暴れて、少しだけ距離を取ったリーナが復唱した。

「そう。大昔のギリシャの哲学者の名前にあやかって名付けられた名前。女の子として…性別を偽って暮らしていた場所では『アリス』と呼ばれてた」

「…女装は、アリスの趣味じゃないの？」

疑わしげなリーナの眼差しが可笑しくて、笑いがこぼれる。

「好きではないけれど、嫌いでもないよ。女の子として育てられていなかったら、とつくに殺されていたからね」

「…どうして？」

「え？」

「その話、秘密なのでしょう？ いままで名前を言わずにいたのに…どうして、今、教えてくれたの？」

まっすぐな瞳で核心に切り込む彼女の聡明さが愛しくて、私はまた微笑んだ。

「リーナと友達になりたいから」

「…。」

「偽りの姿のままでも、友達になれたらうけど……隠し事がある  
と、いつかきつと嘘が必要になる。身内以外には知られてはいけな  
い『秘密』だけど、リーナには知っておいて欲しかったんだ」

近い将来に『友達』以上の関係になりたいと思っているけど、今は  
黙っておく。

「『秘密』を聞かせてしまったことで、迷惑をかける可能性がある  
から…黙っていようかと迷ったんだけど……ごめんね？」

にっこり笑いながら謝ると、リーナは私の頬に手を伸ばし、両手で  
掴んでひっぱった。

「…いひゃいよ？」

「痛くしてるんだから、あたりまえ」

「…?」

「確信犯のくせに、笑いながらごめんね…なんて、しらじらしい」

リーナは冷めた声でそう言つと、私の頬から手を放した。

「…バレてた？」

「アリスの嘘も演技も、わたしにはすぐわかるもの」

つんと逸らされた彼女の横顔にキスをした。

わざと大きな音がするようにして。

「きゃっ!?!」

「ごめんね、の気持ちを改めて示してみた」

おどけた口調で言ってみると、リーナは顔を真っ赤にして叫んだ。

「もう! アリスのばかばかっ」

腕の中で暴れる彼女を抑えようと力を込めた瞬間、床に落ちていたバスタオルに足を滑らせた。

どすん!

ガタガタガタン!!

大きな音と身体に感じた鈍い痛みに、一瞬目を閉じた。

目を開けて状況を確認すると……裸の自分がリーナを押し倒しているような格好だった。

リーナは頭を打って気絶しているのか、目を閉じたまま私の身体の下で身動きひとつしない。

「ご主人様、これはいったいどういうことなのか…説明していただけますね?」

冷やかな声が頭上から降ってきた。

顔をあげると、そこには私の忠実な従者が全身ずぶ濡れで……青ざめながら立っている。

セドリック、その顔怖いよ？

…と、言って茶化したかったけれど、自分の保身のために黙って微笑んでみせた。

14 心の距離（前書き）

セドリック 視点

## 14 心の距離

主とリーナさんが家の外へ出て南の方角に駆け出していったのを見た私は、村長夫人とマリナさんに私が二人を探してくると伝えてから、二人の後を追って外へ出た。

方角だけを頼りに進んでいくと、真つ黒な雲がすごい速さで空に広がってゆくのが見えた。

春の嵐が、再びこの村を襲うのかもしれない。

リーナさんが一緒なのだから大丈夫だと思う一方で、主の命を狙う者が既にこの村まで追ってきていたら、この好機を逃すわけが無いという不安に駆られる。

「とにかく、今はご主人様とリーナさんを早く見つけなければ」

自分の心を叱咤しながら歩を進めていくうちに、大粒の雨が降ってきた。

あつという間に豪雨となり、視界が遮られ、激しい落雷の音以外は何も聞こえなくなる。

荒れ狂う風が、横殴りの雨を叩きつけてゆく。

「この雨では、雨宿りもできないはずだ。だとすれば…」

賢いあの少女なら、木の下ではこの雨風を防げないとすぐに判断するだろう。

…では、どこに向う？

この近くに、雨風が防げる猟師小屋などは、あつただろうか？

なだらかな丘の上に立って辺りを見回すと、見覚えのあるモスグリ  
ーンの屋根の家が見えた。

「あの家は…」

リーナさんとマリナさんの家に、よく似ていた。

この村の住宅は屋根の色以外はほとんど同じ造りだから、道に沿って歩かないと見分けがつき難いが……

他人の家でも、一雨宿りさせてもらっている可能性はある。

丘を下って、ドアをノックしようとした瞬間、中から人の声が微かに聞こえる。

思わず手を止めて、耳を澄ますと『アリス』という名が聞き取れた。

探している二人がこの家の中にいて、主が自分の名をリーナさんに告げている？

主の命を狙う暗殺者がこの家の中にいて、標的の名を…本人であることを確認しているのかもしれない。

家の中の状況を落ち着いて探るべきか、今すぐ家の中に押し入って主の無事確かめるべきか。

焦燥感に駆られながら必死に考えていると、家の中から大きな音が聞こえた。

私はとつさにドアに手を伸ばして、中へ飛び込む。

鍵がかけられていなかったのか、ドアはすんなりと開いて……家の状況が目に入ってくる。

暖炉には火が入れられていて、家の中は暖かった。

竈では薬缶から湯気が出ている。

暖炉の前の床には、全裸の主と主に押し倒されているような姿勢のリーナさんがいた。

二人の無事を確認し、家の中に他の者の気配が無いことを確認すると、張りつめていた緊張の糸が切れた。

安堵する気持ちと同時に、ふつふつと怒りがこみ上げてくる。

「ご主人様、これはいったいどうということなのか…説明していただけますね？」

怒りを抑えながら声をかけると、少女の顔を心配そうに覗きこんでいた主が顔を上げて私を見た。

主の顔に一瞬浮かんだ戸惑いの表情はすぐに消え、完璧な微笑が浮かぶ。

その笑顔を見た途端、「ああ、駄目だ」と思った。

主が私の前で外面の笑顔を作るのは、本気で煙を巻く決意をしたときだけ。

そんな表情を見せたときの主に、私は一度も勝てたことが無い。

「いいけど、その前に服を着ていいかな？　いつまでも裸でいると、マリナさんが帰ってきたときにまずいでしょ？」

「…そう、ですね」

私は既に半ば諦めた心境で、ため息をつきながら頷く。

「お前も濡れた服を脱いだほうがいい。そのままだと風邪をひくだろうから」

主がぼんつと投げてよこしたバスタオルを空中で受け止めたけれど、端っこがリーナさんの顔に少し触れた。

「…うん…？」

主は半身を起こした彼女の傍に跪いて声をかける。

「赤ずきんちゃん、気がついた？」

「…あたま、痛い」

「君を巻き込んで転んじやった。ごめんね」

主は謝りながらリーナさんの後頭部に手を伸ばして、でつかいたんこぶができちゃったねえ…なんてのん気に笑っている。

私は二人の間に漂っていた緊迫感が消えていることに気がついた。

今朝までは、いままでと同じだったのに。  
この短い時間に、二人の間にあった『壁』を取り除く何かがあった  
のだろうか。

「アリスは、ケガ、していない？」

リーナさんが、主の真の名の一部を口にした。

「私は、大丈夫」

年下の少女に微笑みかける主の顔は、年相応の子供の顔に見えた。

彼女は気配を感じたのか…視線を上げて私の姿を捉え、その美しい  
緑の瞳をまあるく見開いた。

「セドリックさん？」

「…はい？」

名前を呼ばれて普通に返事をしてしまった私を、リーナさんが叱り  
つける。

「そんなびしょ濡れのままでもいいやだめ！ はやく服をぬいで」

「あ…そうですね」

驚きのあまり、すっかり忘れていた。

「いますぐ、ジャックの服をもつてくるから」

ばたばたと足音を立てて、彼女は二階の部屋へ上がって行ってしまった。

主を見ると、マリナさんのものと思われる服を手に着替えをはじめている。

私はちいさなため息をつきながら、バスタオルをテーブルの上に置いて、濡れた服を脱ぎ始めた。

私が濡れた服を脱ぐのを手間取っているうちに、リーナさんが服と乾いたバスタオルを持って降りてきた。

「セドリツクさんは背が高いから、ジャツクの服だと丈が足りないかもしれないけど…」

彼女が差し出した服は、薄手のフランネルのシャツとズボン。綿素材の下着も一緒に手渡された。

今の季節に適した服がすぐに出せるのは、彼がいつ帰ってきててもいように準備しているのだろう。

先ほどの自分の言葉は、どれほど彼女を傷つけたのか。

間違ったことは、言っていない。

けれど、私の『正しさ』は……彼女に優しくなかった。

周囲の人々の気遣いや心配も、善意に基づくものだとは解っていればいるほど、重く感じるものだから。

心配だ…という理由だけで、口にすべきではなかったのかもかもしれない。

私は雨に濡れて冷え切った肌をバスタオルで拭き、乾いた衣服に身を包む。

着替えが終わった後、主と自分の濡れた服を絞って、炊事場の片隅にあった籠に置かせてもらった。

暖炉の前に戻ると、リーナさんがあたたかいココアを淹れて待っていてくれた。

甘さ控えめのココアを飲み干す頃には、身体の芯から温まっていた。

「…これ、誰かの贈り物？」

ココアを飲みながら、主がリーナさんに尋ねる。

ココアは遠い異国でしか栽培できない輸入品から作られる高価な嗜好品で、限られた富裕層だけの飲み物である筈だった。

一家の大黒柱がないこの家には、似つかわしくない。

「マリナあての、貢物のうちのひとつ」

リーナさんはそう言いながら、少しだけ顔を顰めた。

「いらないうって、マリナがいくらいうってもダメみたい。最初は服やアクセサリーだったから、何をもらっても突き返せたんだけど、食べ物捨てるのはもったいないからって押し切られたことがあって。……それ以来、食べ物を持つてくる人が多いの」

重々しいため息をつく少女に、私も訊いてみた。

「マリナさんを慕う男性は、そんなに沢山いるんですか？」

「うん。この村や隣村の男のひとたちは、ジャックのこともよく知ってるし、マリナがジャックのことを大好きなのも知ってるから、控えめなんだけど……性質たちが悪いのは、街のひとたち。

マリナを強引に馬車にのせてつれていこうとしたり、家に押し入ってこようとするから」

「それは確かに、悪質ですね」

「一歩間違えば、誘拐か強盗になるよね」

私と主の言葉に、リーナさんは頷く。

「そうなの。…だから、わたしがマリナを守らなくちゃ」

きゅっと唇を閉じて決意を口にするリーナさんを、主は複雑そうな表情で見守っていたけれど、何も彼女に言わなかった。

ただ黙って三人で暖炉の火が踊るのを眺めているうちに、風雨の音が止んだのに気がついた。

ドアを開けると、むせかえるような湿気を含んだ生暖かい風が家の中に流れ込んでくる。

見上げれば、空は青。

雲ひとつない、綺麗な青空が広がっていた。

「嵐みたいな、通り雨だったね」  
「そうね」

主とリーナさんが、私の腰の辺りから頭を出して空を眺める。そうしているうちに、遠くから誰かの声が聞こえた。

その声が聞こえた途端、リーナさんは瞳を輝かせて言った。

「 マリナだ」

「「え？」」

ちいさな人影が遠くの丘の上に居るのは解るが、私には顔はおろか性別すら解らない。

主も私と同じく、怪訝な顔をしている。

「わたしがマリナを見まちがえるはずないわ」

リーナさんは自信ありげに微笑む。

数分後、丘の上からゆっくりと歩いてくる人物がマリナさんだということが解ると、私は改めて彼女の視力の良さに驚いた。

この少女は動体視力だけでなく、視力そのものがずば抜けている。

遠距離の武器の扱いを学ばせたら、間違いなく凄腕の……。

「…お嬢様、セドリックさん、ご無事でなによりです」

マリナさんの柔らかい声が、私を思考の海から現実へと引き戻した。

「マリナさん、今回のお礼は改めて…」

主の言葉に、マリナさんは慌てて頭を振った。

「お嬢様、そんな必要はありません。お気持ちだけで、十分です」

「でも…」

「本当に結構ですから」

恐縮して青ざめているマリナさんを見て、主は可愛らしく小首を傾げた。

「…じゃあ、またわたくしと一緒にリーナさんと遊んでくださる？」

「ええ、もちろんですわ。まだ、ドレスのデザインが細部まで決まっていますもの」

満面の笑顔で頷きあつ主とマリナさんを見て、リーナさんは眉宇を曇らせている。

綺麗な衣服やアクセサリーで着飾ることが好きなのは、すべての女性にあてはまる普遍の事実だと思っていたけれど、この少女にとっては迷惑でしかないようだ。

私はリーナさんの頭を撫でて「抜け出すときには、また手伝いますよ」と、ちいさな声で伝える。

彼女はきょとんと目をまるくした後、無邪気な笑顔を見せてくれた。

「お二人の洋服は洗濯してから、お返しにあげますね」  
「…申し訳ありませんが、よろしくお願いします」

マリナさんの申し出に甘えることにして、私達は借りた服のまま借り住まいの丘の上の家へ帰った。

後々になって私達の行動が…この後に起きる『事件』の発端になることを、この時はまだ誰も知らなかった。

## 14 心の距離（後書き）

更新お待たせいたしました。

相変わらずの低視聴率（笑）ですが、読んで下さる方がいるからこそ、完結まで頑張ろうと思えます。

前の話ですっかりルビを忘れたのですが、『お嬢様』の一人称は「わたくし」ですが、素のときの『アリストテレス』の一人称は「わたし」です。

ちなみに『不思議の国のアリス』は、イギリスの数学者にして作家チャールズ・ラトウィッジ・ドジソンが、ルイス・キャロルの筆名で1865年に出版した児童文学…ですので、17世紀のこの時代、この国ではアリスの名からあの物語が連想されることはありません。

15 噂(前書き)

マリナ  
視点

嵐のような通り雨が あった次の日は、朝からよく晴れていた。

竈でお湯を沸かして自家製の石鹼を溶かし、タライに移し替える。井戸から汲んだ水で温度を調節し、ぬるま湯にしてから洗濯を開始した。

最初はほとんど汚れのない、仕立てたばかりの洋服や編みあがったレースをタライに入れる。

お客様の大切な注文品だから、手で丁寧に優しく洗う。

それが終わったら洗濯物を少しづつ…順番にタライに入れ、足で踏み洗いをする。

汚れの少ない洗濯物が終わったら、最後に汚れの酷い洗濯物にとりかかる。

長いスカートの裾を膝の辺りまでたくし上げて結び、素足で洗濯物を洗っていると、子供の頃に兄さんたちの後についていって、小川で一緒に遊んだことを思い出した。

川辺で転んで洋服をひどく汚してしまい、母さんに叱られて泣き出した私を、ジャックが優しく慰めてくれたっけ…。

幼い頃の懐かしい記憶を辿りながら、綺麗な水で洗濯物を濯ぎ、青空の下に洗濯物を干す。

お嬢様とセドリックさんの服は、皺にならないように念入りに手で叩く。

後でアイロンをかけて綺麗に仕上げる予定だけど、皺が少ないほう

が楽だから。

すべての洗濯物を干し終わった後、涼やかな春の風に揺れる洗濯物を少しだけぼんやりと眺めてから、家の中に戻って別の家事にとりかかる。

布団を全部干して、家の中の掃除を済ませると、あっという間にお昼の時間になった。

ミルクティを淹れ、リーナが作っておいてくれたサンドウィッチに手を伸ばす。

同じ食卓にリーナがいないことを寂しく思いながら食事を終え、台所を片付けてから買い物をするために外出した。

村で唯一の雑貨屋に足を踏み入れた途端、店内にいた人々に声をかけられた。

「おや、マリナ。今ちょうどあんたの話聞いていたところだよ」

「私、噂を聞いてすごくびっくりしたのよ」

「私もびっくりしたわ。…でも、良かったと思ってる」

店の主であるサリアごめいさんは話好きでいつも賑やかな人だけど、私と同年代の友人：ヘレナとエリーゼまで彼女と一緒に喋りだすのは珍しい。

いつもはマナーを守って、年長者がいる前ではお淑やかに振舞う。年長者を敬い、話のリードを任せ、話題を振られるまで黙って控えているのが普通なのに、今日は一体どうしたのかしら？

私は恐る恐る、サリアさんの表情を窺った。

サリアさんは私の母さんと同じ年代の女性<sup>ひと</sup>だけれど、母とは違った意味で難しい人だった。

毎日多くのお客さんと接するお仕事のおかげ、彼女に話した何気ない会話がいろんな人に伝わってしまうから、慎重に話の内容を選ばなくてはならない。

噂って…なんだろう？

ジャックに関する新しい情報が入ったのかしら？

私の口からジャックの名前を出すと、みんないつも複雑そうな表情を浮かべるから、言葉を濁して訊いてみた。

「あのお話？ 私やリーナに関係することなの？」

「なに言ってるのさ、とぼける気かい？」

サリアさんは笑いながらそう言うけど、でも、解らないものはわからない。

きよとんつと首を傾げている私を見て、今度はみんなが動揺しはじめた。

「…え？ やだ、冗談じゃなくて、本当にわからないの？」

ヘレナは私とサリアさんの表情を交互に眺めている。

サリアさんはそんなヘレナに頷いてみせた。

「…マリナのこの様子を見る限り、ただの噂のようだね。この子は昔から嘘がつけない子だもの」

エリーゼが泣き出しそうな顔で呟く。

「どうしよう…私、いいニュースだと思って、会った人みんなに言  
って回っちゃったわ」

サリアさんはエリーゼの肩をぼんぼんと軽く叩きながら二人に尋  
ねた。

「そもそも、誰が最初に『マリナとお嬢様の付き人がいい雰囲気だ』  
って言い出したんだい？」

「確か、フレッドとジョージよ。丘の上の家に食材を配達しに行っ  
て、偶然見かけたって」

ヘレナの答えに、エリーゼが頷く。

お互いの顔を見合わせて話しているみんなの顔を、呆然と見つめい  
ているうちに…ふっと恐ろしい可能性に気がついた。

まさか…。

いいえ、でも、ありえないことではないわ。

きちんと確かめてからでないと、安心はできない。

「そのお話…誰が、いつ、どんな話をしていたのか…私にも詳しく  
教えてちょうだい？」

私は顔に笑顔を浮かべ、お腹に力を入れてゆっくりとした口調で『

お願い』をする。

この言い方は、母さんから学んだ処世術のひとつ。

やましいことがあれば、人は多かれ少なかれ後ろめたく思うもの。そんな気持ちがあることを知られた上で『お願い』されたら、自分の不利になると判つていても断りにくい。

私の様子にただならぬものを感じたのか、みんなは口々に…先週の半ば辺りから村の中に広まっていたという『噂』について教えてくれた。

「村に大金を寄付できるような方のお忍びの旅だからって…私たちから話しかけてお嬢様を煩わせないようにとか、失礼な物言いをしないようにとか…あと、絶対に素性を詮索しないようにって何度も念押しされたのに、マリナは毎日あの丘の家に招待されていたんでしょう？」

「そうそう、それを疑問に思う人が多かったのよ。何でマリナだけ特別なのかって。そこに、フレッドとジョージの目撃談が加わって…」

「お嬢様のお付きの男性が、マリナにひと目惚れしたからじゃないか…って憶測が飛びかっただよ」

「そんな噂があつたところに、昨日の酷い通り雨のあとで、マリナの家から彼が出てきたっていう目撃談が加わったから、一気に噂の信憑性が増して…」

「自宅に招いて、ジャックの服を貸すくらいなら…こりゃもう二人の仲は決定的なんじゃないかと…」

サリアさんたちが交互に話した内容に、私は驚いて目を見開いた。

「私はお嬢様の無聊ぶじょうをお慰めするための、お話し相手として招待されていただけなのよ。お嬢様の従者であるセドリックさんとは、挨拶程度の言葉しか交わしたことはないわ。

昨日、雨宿りのために家へ招待したのは、私じゃなくてリーナよ。あの子が、雨に濡れたお二人が風邪をひかないようにと、私とジャックの服をお貸ししたの。

私は雨が止むまでは丘の家において…雨が止んでから自宅へ戻る途中、家の外でお二人とお会いしただけ」

私は説明しながら、自分の言葉にみんなを責めるような棘があるのを感じた。

自覚しても…腹立たしくて、止められない。

「みんなが面白がって噂するような事實は、何ひとつ無いわ。セドリックさんに告白されたこともなければ、私が彼に想いを寄せてる…なんてこともない」

怒りと屈辱に、声が震える。

「私は、ジャックの妻よ。夫が行方不明だからって…まだいなくなつてから一年も経っていないのに、どうして…どうしてそんなことを」

涙で視界が歪む。

私は、そんなにふしだらな女だと思われてるの？

私が深く考えずに、お嬢様のお話し相手を務めると言い出したのが…そんなにいけないことだった？

「マリナ、マリナ…ごめんよ。あんたを傷つけるつもりはなかったんだよ。許しておくれ」

サリアさんの大きくて柔らかかな手が、私の涙を拭った。

「他所よその人と自分の村の娘の恋愛話で盛り上がってしまったのは確かだけど…みんな、ジャックのことをよく知っているからこそ、もう、ジャックは生きていないと思うんだよ」

「……。」

「ジャックは、あんたの親父さん…村長ロソと同じくらい、優しくて、働き者で、気のいい男さ。誰よりも研究熱心で…ジャックが長年かけて品種改良した林檎は、どこに売りに出しても評判になるほど美味しかった。」

そんな男が…どんな事情があるろうと、半年もあんたやリーナをほったらかしにしておく訳がない。どこかで生きているなら、必ず戻ってくるはずだよ。それができなくても、手紙の一通ぐらい送って、自分の無事を知らせるはずさ。

これだけ長い間行方不明で、便りたよひとつないのなら、ジャックはもう……死んでるんだ。

万が一どこかで生きていたとしても、自分の意思では戻れない……手紙を出すこともできない処に居て、厄介ごとに巻き込まれているとしか考えられない。

冷たいことを言うようだけど、この村に戻ってこれないのなら……死んだも同然だろう？」

「…!?!? 酷いわ、そんな…」

「マリナ、辛いだろうがよくお聞き。みんなあんたが昔からジャックを慕っていたことを知っているし、リーナのことを可愛がっていることもわかっている。だから、今まで誰も面と向って言えなかったけれど……そろそろ潮時だとは思わないかい？」

あんたはまだ若いんだ。帰らぬ夫のことは忘れて、誰かともう一度

結婚して、子供を産んで、幸せになる道だつてあるんだよ。

リーナのことなら心配ないさ。あれだけ器量よしで、賢くて、働きのいい子なんだ。リーナを養子に…家族の一員として迎えたいって言う人は、この村にもたくさんいる。あの子が望むなら、あたしの家に引き取つてもいい」

「…。」

ぼろぼろと涙を流す私に、ヘレナとエリーゼが話しかけてくる。

「マリナ、そんなに泣かないで」

「…ごめんね。マリナがジャックを待つていた気持ちも解るけど…でも…寂しそうなマリナとリーナの姿を、黙って見守つていた私たちも辛かったの」

「マリナが誰かと新しい恋をして、幸せになれるなら、私たち応援するわ。そうなればいいねって、みんな話してたのよ」

「マリナが誰か他の人に守られて暮らすようになれば、ちいさなりーナがあんなに無理をして、一人で果樹園の仕事をしたり、武術を習う必要もなくなるでしょう？ マリナとリーナ、二人にとって良いことだと…」

私を気遣う視線。

私とリーナを心配する言葉。

わかっている、わかっているわ。

サリアさんに言われなくても、私だって……一度も考えなかった訳じゃない。

だけど、でも…今はそんな話をしている場合じゃない。

「　　ありがとう」

涙をハンカチで拭いて、無理に笑顔の形を作る。

「でも、今、何よりも大事なことは、私やリーナのことじゃないわ」  
「「「……………」」」

私の言葉に、みんなは一斉に怪訝な顔をした。

ああ、やっぱり。

誰も、事の重要性に気がついていなかった。

「サリアさん、この話は…この噂は、私たちの村の中だけに留めておこうという話になってますか？」

「……………それは、」

サリアさんは何かを言いかけて、ハツとした表情で私を見た。  
途端に青ざめた顔に変わる。

「…え？　なに？」

「サリアさん、どうしたの？　マリナとサリアさんだけで話を進めないですよ」

エリーゼとヘレナの戸惑った様子に構わず、サリアさんは深いため息をついた。

「……あたしたちは、考えが足りなかったようだね」  
「ええ、そのようですね」

私はサリアさんの言葉に頷いた。

それは、事実だったから。

そして、ひよっとしたら……もう取り返しがつかないかもしれない、失敗。

『もしも』の話を考え始めると、恐ろしくてたまらない。

私の考えすぎだったら、いい。

ただの心配のしすぎだったと、後でみんなと笑い話にできたらいい。

でも、今は、何よりも優先して……できる限りの手を打たないと。

「父には……いいえ……村長には、私が報告に行きます」

「ああ、頼んだよ。あたしは、馬で畑を回って農作業をしているみんなに注意を促してくる。」

……ほら、あなたたちも協力しな！ 三人で急いで村中の家を回って、あの噂を村の外に漏らさないよう、口止めをするんだ。お嬢様から受けた恩を仇で返すつもりか……って、脅しておいで！」

「……！」「」

エリーゼとヘレナの顔が、一瞬にして強張こわばった。

「あのお嬢様が名前や素性を隠している理由わけが、『気楽なお忍びの旅』をしたって話だけなら、何の問題もないさ。だけど、もしも……何か深い事情があって、素性を伏せてこの村に身を隠しているの

なら、これは大事おおいごとだよ。  
付き人の名前や特徴から、主あもてであるお嬢様もこの村にいと…知られてしまったかもしれない。  
あたしたちの村に客人が滞在しているって話すら、本当は控えるべきだったかもしれないね。

もう既に村の外でこの話をしちまった奴がいたら『いつ、何処で、誰に』話しをしたのか、きつちりと聞き出してくるんだよ。二人とも、いいね？ 解ったね？」

「ええ、解ったわ、サリアさん。私、西の…ポルトスさんのお家から回るわ」

「私は東回りに、アトスの家から声をかけてくる」

「じゃあ、行こう！」

サリアさんの言葉に弾かれたように、私たちは全員でお店の中から外へと駆け出した。

カラララン。

後の方で雑貨店のドアベルが軽やかに響く音を聞きながら、私も精一杯の速さで走る。

スカートの裾が足にまとわりついて、走りにくい。  
転ばないように気をつけながら、必死に走っているうちに、目が覚めるような空の青が視界に映った。

綺麗な青空と、ふんわりした白い雲。

美しい新緑しんりつに彩られた村の風景が、目に眩しい。

あんまりにも平和で…いつも通りに見える世界を見て、不意に泣きたくなる。

神様、お願いです。

どうかこれ以上、悲しみが増えることのないよう、私たちを御守りください…。

心の中で神に祈りながら、私は父の仕事場に向かって走り続けた。

15 噂（後書き）

ご精読ありがとうございます。

マリナは料理以外の家事は普通にこなせるし、いつもボケてるって訳じゃあないんですよ…という処が、今回の話の裏メインでした（笑）

17世紀頃の洗濯について調べたところ…「17世紀以前、洗濯は年に4、5回。洗濯日には人手をあつめ、大釜おおがまに煮たてた湯の中に自家製の石鹼と洗濯物をいれて煮たててあらった。毎日下着を替えるようになるのは、17世紀になってからである」…という記述を見つけました。

毎日の（下着やリネン類の）洗濯のために、各家庭で大釜を用意していたとは考え辛いので、作中ではアレンジさせていただきました。

17世紀の架空の国が舞台なので、これからもいろいろと「この国は特殊なんです！」とか言い張る点が多々あるかもしれませんが、ぬるく見守っていただけると嬉しいですよ。

16 動揺(前書き)

セドリック 視点

主は朝から一人で出かけていた。

「リーナさんの果樹園の仕事を見学に行くから、セドリックはお留守番していてね」と、朝食の席で『命令』され、主に再考をお願いしている途中で村長夫人の来訪に気がつき、お側を離れたのが敗因だった。

戻ったときには既に主は逃走……家の中から姿を消していた。

主に同行を許されず、追うこともできない私は、自室で黙々と隠し武器の手入れを行っていた。

常日頃から衣服に隠し持っている小型の武器を総て外すと、身体が軽くなったのがわかる。

襲撃に備えるための装備とはいえ、一瞬の対応の遅れが命取りになる場合もあることを考え、私は厳選した武器のみを再び身につけ、残りは家の中のあちこちに隠した。

昼過ぎ……お茶の時間には少し早い時刻に、村長が私たちが滞在している丘の上の家に戻ってきた。

彼はまず突然の訪問を詫び、挨拶もそこそこに「確認させていたいただきたいことが……」と、言葉を濁しながら深々と頭を下げる。

主が不在であることを告げ、後日にまた……と言いかけた私を手で制

して、村長は「確認させていただいて、問題がなければ…お嬢様には伏せておいたほうが良い話だと思います」と言って譲らない。

私は嫌な予感を覚えながら、村長を客間に通した。

「確認したいこととは…どういったことでしょうか？」

村長夫人が用意してくれたお茶を勧めながら問いかけると、彼はハシカチで額の汗を拭い、唸るような声を絞り出した。

「何からお話すればいいのか…」

ここで急かすと、余計に話の進み具合が遅くなるだろう…と思い、私はじっと村長の説明を待った。

村長はしばらく思い悩んだ後、おもむろに口を開いた。

「私の娘マリナは、料理こそ不得手ではありますが、縫い物や編み物に関しては、王都の洋品店からも仕事を頼まれるほど良い腕前なのです。…先日、マリナがお嬢様のお洋服や装飾品を拝見させていただきました。いただいた折、素晴らしい品々に感動したと申しております。素材の上質さもさることながら、最新の流行のデザインを取り入れた丁寧な縫製のドレス。小粒とはいえ本物の宝石を用いた宝飾品…」

「…。」

「あれほどの逸品いっぴんを買い揃えることができるのは、高位の爵位を授けられている身分の方に間違いない。高位貴族の顧客の注文にしか応じないデザイナーのドレスがあったことが、その証拠だと言っております」

村長は私の顔色を窺いながら、ためらいがちに続けた。

「決して、お二人の素性を探ろうとしているのではございません。……娘は、もし、自分の推測が当たっているのなら、私がお聞きした『理由』は表向きのもの……お嬢様の縁談に関わるというお話でしたから、娘にも内容は話していませんが……本当の『理由』は違う可能性があるから、私に確かめて来て欲しい……と譲らないのです。もし、お嬢様がお自分の名前や居場所を隠さねばならない深い事情があつて……それがお二人の命に関わるような問題だった場合、命取りになるかもしれない噂があることを……娘は酷く心配しております」

私は努めて穏やかな表情を浮かべ、村長の言葉が途切れたところで差し障りのない相槌を打った。

マリナさんや村長の心配は的を射ているが、だからといって私の一存で『本当の理由』を話す訳にもいかない。

こののどかな村の人たちにとって、私と主は『珍しい客人』だろうから、彼らの話題に多くのぼることは想像の範囲内のこと。

問題は、村人たちの間で……どんな話が噂になっているのかということ。

そして、どうして噂ぐらいで、こんな話に飛び火したのかを知る必要がある。

「『命取り』になるかもしれない、というのは穏やかではないですね。どのような噂なのですか？」

私が平静を装った声で尋ねると、村長は眉を下げ…心底困った表情で言った。

「それが…その…お気を悪くしないでいただきたいのですが」

「はい」

「マリナと貴方が、恋仲になっているという噂なのです」

「……は？」

思わず素で聞き返してしまった私に、村長は滔々（とうとう）と述べた。

「いや、もちろん私はそんな噂は信じていませんし、娘も否定しておりましてし、行方不明になっている娘婿のことも亡くなったとは考えていませんので、娘を他の誰かと再婚させようなんて、これっぽっちも考えていないんです。

……いえ、そうではなく、私どもの話は横に置いておいて…今、私と娘が問題だと考えているのは、マリナの再婚相手に納まるうとあれこれ画策し、手を変え品を変え娘に求婚していた者たちが、その『噂』に動揺し…村の中でだけでなく、街の酒場で失恋を嘆いたり、愚痴をこぼしたりしていたことです。

貴方とお嬢様が…他所から来た二人連れの客人が、私たちの村に滞在している情報までも、村の外の人間に伝わってしまったという可能性が高いと思います」

私は村長の話を聞き、心の中で激しく動揺しながら、頭のどこかで冷静に事態を分析していた。

「念のため確認しますが、あなた方がいう『街』というのは…？」

「王都リーファのことです。…この村には酒場がありません。やけ

酒を飲みに行くのに一番近い…盛り場のある場所です」

「…。」

私は、リーナさんから聞いた話を思い出していた。

「マリナさんを慕う人たちの中で、暴力的な行為に出ることが多い『街の人』というのも…王都の？」

「ええ、そうです。金と力さえあれば、なんでも手に入ると思っている輩が多くて、困っています」

迂闊だった。

この村と王都の距離の近さを考えれば、もっと早くに気がつくべきだった。

私は自分の失態に齒噛みしながら、村長に尋ねる。

「マリナさんは、今どちらに？」

「噂が落ち着くまでの間、女と子供だけでは不用心なので、リーナと一緒に私の家に戻ってくるように…と言いました。今は弟と一緒に、荷物を取りに戻っているはずです」

「…そうですか、賢明なご判断だと思います」

ほっと安堵の息をついて、私は立ち上がった。

「ご質問の件について、私の一存で答えることはできません。主の判断を仰いでまいります」

「…それは、つまり…」

村長の質問が口の端にのぼる前に、私はにっこり微笑みながら言う。

「悪意は無かったのかもかもしれませんが、根も葉もない『噂』を無責任に広めた方々には、それ相応の『代償』を支払っていただくつもりですので、よろしくお伝えください」

失礼します…と形だけは礼儀にかなった挨拶をして、私は客間から退出して外に出た。

リーナさんの果樹園へと足早に歩きながら、現在の状況の分析を続ける。

マリナさんがいくら魅力的な女性とはいえ、一人の平民の女性に関する噂から…私と主のことを探り当てられる人物がそうそういるとは思えない。

高位貴族は普通、使用人の顔や名前など憶えない。

主の護衛である『私』の名を知っている人物は、本家にも数えるほどしかない。

『噂』で私の名や外見の特徴が広まっていたとしても、そこから『私』を特定するのは難しいはずだ。

…主の外見の特徴が広まっているとしたら…？

私は最悪の事態を考え、ため息をつきながら主の姿を探した。



16 動揺(後書き)

2011・08・25 重複表現を一部削除しました。

17 林檎の木の下で（前書き）

リーナ  
視点

## 17 林檎の木の下で

数日ぶりに果樹園に訪れると、辺りの空気には林檎の花の香りがふんわりと漂っていた。

わたしが予想していたとおり、日当たりのよい林檎の木は、もう花を咲かせ始めている。

『摘花』は、とても時間がかかる作業だから、今日はいつもよりもうんと早起きして正解だった。

持ってきたお弁当を東屋あずまやのベンチの上に置き、赤いフードの内側に留めてあった『日除け用のつば』を取り出し、農作業用の帽子として被りなおす。

両手に薄手の手袋をはめて、準備は完了。

梯子はしこを林檎の木の傍に立てて、登る。

自分の身長よりずっと高いところから下を見ると、まだ少し恐いけど…でも、恐いからできないなんて言えないし、言わない。

わたしは下を見ないように気をつけながら、梯子のいちばん上に座って作業を開始した。

……ひとりで黙々と作業をしていると、ふと、誰かの視線を感じた。

下を見るのは恐いから無視して作業を続けていたのだけれど、絡みつくような視線がいつまで経っても外れないことに気がつく。

「…？」

梯子から落ちないように手に力を入れて自分の体を支えながら、そう  
つと視線を感じる方角を見る。

「　そこで、何をしているの？」

わたしの視線の先には、お嬢様：アリスが居た。

白いレースのワンピースを着て、真っ白な日傘をくるくる回しながら  
立っている。

アリスはわたしの顔をまっすぐに見て、微笑みながら答えた。

「わたくしの可愛い赤ずきんちゃんの仕事ぶりを見学に来たの」

「…。」

その返答を聞いた瞬間、ぞわっと鳥肌が立つのがわかった。

寒い…というか、うざったい。

アリスのこの『演技』は、性別を偽る必要があるからだと教えても  
らったけど…でも、苦手。

「一人で来たの？ セドリックさんは？」

アリスの身を常に気遣っている彼が傍にいないのはおかしい…と思  
って訊くと、予想外の答えが返ってきた。

「お留守番しているようにって、言い置いてきたから、ここには来  
ないわ。わたくし、リーナさんと二人きりでお話したかったの。邪  
魔されるのは好きじゃないし」

「…。」

「邪魔って、どういうこと？」 ……とか… 「あなたがわたしの仕事の邪魔をするのはいいの？」 ……という台詞が頭をよぎったけど、口には出さなかった。

それらは…アリスにとって、想定範囲内の返答だと思ったから。

アリスはわたしの抗議や質問を、のらりくらりとかわす『（どうでもいい）理由』をたくさん用意しているにちがいない……そしてわたしは、そんな言葉にいちいちつきあう気はなかった。

わたしは抗議の代わりに、おおきなため息をつく。

セドリックさんがここにいたら、アリスを引きずって帰ってもらえたのにな……。

わたしが拒絶の言葉を口にしなかったことに安心したのか、アリスは果樹園の柵さくの中に足を踏み入れた。

わたしがいる梯子のすぐ傍まで歩み寄って、林檎の木を見上げる。

「わたくし、林檎の花を初めて見たわ。つぼみは薄いピンク色をしているのね。花は白くて……とてもいい香りがする」

そっと枝に手を伸ばして、花の香りを嗅ぐアリスの姿を、わたしは黙って見つめていた。

アリスはわたしの顔を見上げて、いたずらっ子のように笑う。

「一応、リーナさんのお仕事の邪魔をしてはいけないって……わかつ



おきく育てるために、花を摘む作業が必要なの」

アリスの質問は、わたしが昔にジャックに訊いた質問と同じだった。面倒だと思いながらも、ジャックに教えてもらったことをアリスに答える。

「花の摘み方には、なにか法則…決まりごとがあるの？」  
「ひとつの芽から5つ、6つ咲いている花を、中心の花だけを残して周囲の花を摘んでしまうの。こうやって花をへらすと、受粉して実のなる可能性も高くなるから、手間はかかるけど…大切な作業なの」

アリスの質問に答えながら、ひとつひとつ丁寧に林檎の花を摘む。集中して仕事をしていると、次第に余計なことを考えなくなっていく。

黙々と花を摘み続けているうちに、わたしはいつの間にかアリスの存在を忘れていた。

カラアーン、カラアーン、カラアーン

教会の鐘の音を聞いて、ふっと我に返る。

「…もう、お昼？」

思わず呟いた自分の言葉に、わたしの心は揺らいだ。

去年、ジャックと一緒にやったときは、もつとずっと早くに終わっていた。

ひとりでふたり分の仕事はできない。

わかっているつもりだったけど……でも……。

「リーナさん？」

突然耳のすぐ近くで声がした。

「……!?!」

驚いて身動きみじろをした瞬間、バランスを崩す。

梯子の上から落ちそうになった私を、間一髪でアリスが抱き止めた。

「驚かせて、ごめんなさい。リーナさんが深刻な顔で何か考えこんでいたから、声もかけづらくて。貴女の許しを得ずに梯子をのぼって、驚かせてしまって……本当にごめんなさいね」

アリスの真剣な表情とその言葉には、心からの気持ちちがこめられていた。

『演技』の表情や台詞じゃないからなのか、いつもの鳥肌は立たなかった。

わたしはどきどきと跳ねる心臓の鼓動が治まってから、お礼を言う。

「アリスが梯子をのぼってきたことに、気がつかないほどわたしが考え込んでいたのは事実だから。助けてくれて、ありがとう」

アリスはわたしの言葉を聞いて、ちょっとびっくりしたように綺麗な水色の瞳をおおきく見開いて…満面の笑みで言った。

「どういたしました。…正午の鐘も鳴ったことだし、お昼ご飯を食べながら休憩…というのはダメかしら？ ハンナさんに作っていただいた、美味しいフルーツタルトもあるのよ」

わたしはアリスの誘いに頷き、作業を中断して梯子を降りた。

自分で作ったお弁当を持って、林檎の木の下に敷かれたシートに腰を下ろす。

アリスは上機嫌で鼻歌を歌いつつ、籠の中からあれこれ取り出している。

「そういえば、その赤いフード付きのケープ…帽子のつばも出せるようになってるのね」

アリスの物珍しそうな強い視線を受けて、わたしは目をあわせないようにしながら答えた。

「うん、そう。マリナがわたしのために作ってくれたの。果樹園の仕事をしている間、日焼けを防ぐのと…林檎の木の枝で目や顔が傷つかないように。この作業用の手袋も、手が荒れないようにって、マリナが作ってくれたのよ」

優しいマリナ。

料理の才能はないけど、お裁縫と編み物が得意で…マリナの笑顔を見ると、心がふんわりとあたたかくなる。

ジャックが大好きなマリナ。  
ジャックの大切なマリナ。  
ジャックとわたしの大事な家族。

わたしは手袋を外し、お手拭で手をふいてから、サンドウィッチにかぶりついた。  
ゆっくりと咀嚼しながら、ぼんやりと考える。

ジャックが帰ってくるまで、わたしがマリナと果樹園を守るって…  
…がんばればきつとできると信じて努力してきたけど…ひとりだとこんなにも遅い。  
作業の終わりが見えない。

明日はもっと、早起きしよう。  
仕事をする時間を長くすれば、もっと…。

「…さん？ リーナさん、聞こえてる？」  
「え？」

肩を揺さぶられて、びっくりして顔をあげると、至近距離に心配そうな表情をしたアリスの顔があった。

「 どうしたの？」  
「それはわたくしの台詞よ。…わたくしの話、全然聞いてなかったのでしょう？」  
「…。」

こくりとわたしが頷くと、アリスは大仰に肩をすくめた。

「貴女が何を考えて、何を悩んでいるのか…気になるけれど、無理に聞き出そうとは思わないわ。でも、お食事の間くらい、少し忘れてもいいと思うの。難しい顔をしながら食べても、美味しくないでしょう?」

アリスはそういって、わたしに紅茶とフルーツタルトを差し出した。

「疲れた心と身体には、甘いものがよく効くのよ。どうぞ召し上がれ」

これは、ひよっとして、ひよっとしなくても…気を遣ってくれてる? わたしのことを本当に考えてくれてるなら、いまずぐに帰って…と言いたいのを、ぐっと堪えた。

言ったらたぶん、逆のことをされる。

そんな気がしたから、わたしは黙って差し出されたお茶とケーキを受取った。

「…どうもありがとう」

サンドウィッチを急いで食べてから、アリスからもらった紅茶を飲む。

甘酸っぱい香りとはのかな甘みが、口の中にふんわりと広がって消えてゆく。

「今日の紅茶はドライフルーツが入っているフレーバーティなの。お口にあっただ?」

「うん、すごくおいしい」

「ハンナさんの作ってくれたフルーツタルトも美味しいのよ。たく

さんあるから、どんどん食べてね」

アリスはわたしが食べる姿をにこにこしながら見守っている。

わたしがふたつめのタルトを食べ終わって、みつつめはお腹いっぱいだから…と断ると、アリスは自分で食べることにしたらしく、ナイフとフォークで綺麗にタルト切り分けて上品に口に運ぶ。

わたしはそれを見ながら、アリスは（女の子じゃないけれど）本当に『お嬢様』なんだなあ…なんて、改めて感心していた。

お昼ごはんを食べ終わった後、すぐに仕事に戻るために立ち上がった。

手袋をはめて、梯子を上ろうとしたとき、アリスがわたしに尋ねた。

「赤ずきんちゃんは、りんごの花言葉をご存知？」

「…ううん、知らない」

「りんごの花言葉は『選ばれた恋』というのだそうよ。どうしてそんな言葉なのか今までわからなかったけれど、今日、お仕事を見学させていただいて…その理由がわかった気がするわ」

「…？」

「花を摘む必要があることから、この花言葉は生まれたのではないかしら？ 残された花しか、実を結ぶ可能性がないでしょう？ 選ばれた花に『実ができる』のと『恋が実る』のをかけて…『選ばれた恋』」

「…。」

早く仕事に戻らなくちゃ…と焦っていたわたしは、とっさに「それがどうかしたの？」と冷たく切り返しそうになって、あわてて口を

つくむ。

下手な相槌を打つと、あとあとめんどくさそうだから、何もコメントしないようにしよう。

わたしはそのまま梯子をのぼって仕事を再開した。

しばらくした後、アリスは遠慮がちな声音で別の質問を投げてきた。

「あのね……そのう……言いたくなければ答えなくて良いのだけど……

……赤ずきんちゃんは、誰かに恋をしたことがある？」

「……ないと思う」

簡潔に答えながら、作業の手を止めずに花を摘んでゆく。

「恋ってどんなものなのかしらね？ 『恋はするのではなく、落ちるもの』……なんて物語の中にはよく書いてあるけれど、本当に恋に落ちてしまったら、もう取り返しがつかないのかしら？ 本気で止めたいと思っても、やめられないのかしら？ 自分で自分を止められないって、どんな気持ちなのかしら？」

矢継ぎ早に次々と疑問を口にするアリスの姿をちらりと見下ろして、わたしは深いため息をつく。

……アリスの頭の中身は、なんだかすごく平和そう……。

女の子として育てられなければ、生き延びることはできなかった……なんて話が、嘘みたいに見える。

不意に、昔……孤児院で、何度も何度も投げつけられた言葉が記憶の

淵ふちから甦よみがえる。

お前は『いらぬ子』だから、孤こ児院にに居いるんだ  
役立たずのくせに、飯めしだけはいつちよまえに食くいやがって  
なんだその面つら？ お情じやうけで置おいてもらってることわかってねえ  
な？ 生意じやう気きなんだよ！

言葉でこころを、暴力で身体を、たくさん傷つけられた。

…あのときのわたしは、他に行くところがなくて、他で生きる術すべを  
知らなくて、すごく痛いのに、とても苦しいのに、なんでもないフ  
リをして耐えることしかできなかつた。

ジャックが雪の中で凍える私を助け出してくれなかつたら、きっと  
あのまま死んでいた。

誰にも心配されずに、誰にも気かけられずに、雪の中でひとり…  
…死んでいたと思う。

アリスのあの話が…『嘘』だったら、いい。  
嘘をつかれるのは嫌だけど、でも、あの話が『本当』じゃないほう  
が、ずっといい。

誰かに命を狙つわれるほど疎つとまれてるなんて……哀あはしいもの。  
誰かに死んでしまえばいいと思おもわれているなんて……辛くるいもの。

わたしはそんなことを思いながら、花を摘み続けた。

長時間同じ姿勢で作業を続けていると、身体のあちこちが痛くなる。

一区切りついたところで、梯子から落ちないように気をつけながら、肩や腕をぐるぐる回しているうちに、アリスに話しかけられない静かな時間が続いていたことに気がついた。

アリスは丘の上のお家に帰ったの…？

そつと下を窺ってみると、シートの上でまあるくなって寝ているアリスの姿が見えた。

わたしは梯子から降りて、シートの上に膝をつき、アリスの寝顔をじつと眺める。

こんなところで寝ていて…いいのかな？ 風邪をひかないかしら？ 起こして、丘の上の家へ帰るように言うべき？

判断に困って空を仰ぐと、お日様はずいぶん西に傾いていた。

まだ明るいけど、たぶん3時過ぎ。もうすぐ夕方になる。

日が沈みはじめたら、一気に空気が冷たくなるから、やっぱり起こしたほうが…。

わたしがアリスに声をかけて起こそうとしたとき、カサカサと草を踏む音を耳が拾った。

……誰？

アリスの姿を隠すようにわたしが立ち上がるのと、セドリックさんが果樹園の隣の雑木林から姿を現したのは、ほぼ同時だった。

セドリックさんは硬い表情のままわたしに一礼すると、寝ているアリスを揺り起こした。

「ご主人様、起きてください。至急、ご相談しなければならぬことがございます」

18 夢みたあとに(前書き)

アリス 視点

18 夢みたあとに

リーナとまた二人だけで話をして、確かめたいことがあったから、セドリツクを置いて一人で外出した。

昨晚、就寝するまでねちねちと窘められたことに対する仕返したしなの意味合いもあるけれど、『リーナとの会話を誰にも聞かれたくない』だけでもいえる。

「ちいさな子供でもないのに…」

口からこぼれ落ちた呟きに、自嘲する。

悪い夢を見た。

ただそれだけで、こんなにも不安になるのは、何故なのか。

リーナやこの長閑のびやかな村の人々を、自分の家の血塗られた争いに巻き込んでしまうかもしれない…という恐れと罪悪感は、確かにある。だけど、それだけではなくて…。

考え事をしながら歩いているうちに、いつの間にか目的地にたどり着いていた。

予想通り、赤ずきんの少女は朝早くから果樹園で働いている。

挨拶だけでも…と考えて口を開いたけれど、すぐに止めた。

彼女が自分に気がつかないのは、それだけ目の前の仕事に集中しているということに他ならない。

ならば、それを邪魔するようなことはしたくない。  
聞き出したい『話』は、彼女の休憩時間でいい。

誰に見咎められることもなく、私はリーナの働く姿を見つめる。

リーナは高い梯子はしの上に座っていた。

その姿は、林檎の木々の合間に浮かんでいるようにも見える。

白い花がひとつ、またひとつと、彼女の手で摘まれて…地面へと散  
ってゆく。

ほのかに甘い林檎の花の香りに包まれながら仕事をしているリーナ  
の姿は、まるで愛らしい妖精が林檎の花と戯れているようだった。

私は果樹園の柵に寄りかかり、くるくると日傘を回しながら、彼女  
の一挙一動を熱心に目で追う。

透き通るような白い肌。

ほんのりと薄紅色に染まった頬。

甘い苺のような赤い唇。

澄んだ萌黄色の瞳は、時折日の光に透けてキラキラと輝いている。

飽きもせずずっと見つめていたら、彼女が私の居る地上に視線を  
移した。

「　　そこで、何をしているの？」

リーナの声を聞くと、心臓が跳ねるのがわかった。

彼女の目線と意識が…今は自分だけに向けられていることを嬉しく  
思いながら、答えを口にする。

「わたくしの可愛い赤ずきんちゃんの仕事ぶりを見学にきたの」  
「…。」

一瞬、リーナの表情が歪む。

本当に彼女が私の『嘘』や『誤魔化し』を瞬時に見破っていることに驚きつつ、笑い出しそうになるのを堪えた。

果樹園では、昨日のように…自分の素の口調で話すことはできない。いつ、誰が来るかわからない場所では、本当の自分には戻れない。

そのことを残念に思いながら、できるだけ仕事の邪魔はしないようにすると約束し、仕事をする彼女の傍にいる許しをもらおう。

快諾ではなかったけれど、『邪魔だから帰れ』と言われなかっただけで嬉しい。

そう言われたときのことを考えて、あらかじめ山ほど対策を練っていた。

それらが無駄になったことよりも、拒絶されなかったことの喜びの方が大きかった。

リーナが花を摘む手を止めたときや、梯子を移動させるときを狙って話しかける。

どうして林檎の花を摘む必要があるのか、花の摘み方は…等々、本当にしたい『話』とは別のことを話しているうちに、彼女が何かを酷く憂いていることに気がついた。

林檎の花を摘む手は止まっていけないし、表情にも大きな変化は無いけれど、リーナの澁刺はうつとした生気が陰っている。

……訊きたい、と思った。  
理由を聞いて、解決できることなら、手を貸したい。

突然身のうちに湧き上がった想いに、戸惑う。

今まで、誰に対しても、そんなことを思わなかった。  
誰かを助けたいなんて、一度も考えたことがなかった。

それは、自分が常に『庇護』されるべき存在として扱われてきたからだ……ということに思い至る。

自分の命すら自分で守れない、子供だから。  
常に誰かが傍にいて、いつも誰かの手を借りて、12年間生きてきた。

はじめて自覚した思考と感情に揺れながら、目の前の少女を仰ぎ見る。

まだ知り合ってから間もないリーナのことを愛しい想う、この気持ち  
ちは……恋なのだろうか。

それとも、昨夜見た悪夢のとおり……ただの独占欲や執着だけで……あの女と同じ……。

何もかもが悪い兆候であるかのような思考の渦に、深いところまで  
巻き込まれかけた時、教会の鐘が鳴った。

カラァーン、カラァーン、カラァーン

教会の鐘の音で、現実に引き戻される。  
大きく息を吐いて、暗い思考の残滓ざんしを振り払った。

「…もう、お昼？」

リーナの声に不安そうな響きが宿っていた。

彼女の手によって地上に落とされた花々は、白い絨毯のように辺りを埋め尽くしている。

それを見る限り、順調に仕事は進んでいるはずなのに…。

彼女に声をかけようとして、迷った。

リーナの表情を見れば、気軽に話しかけられる雰囲気ではないことがわかる。

だけど、彼女が物思いに沈んでいるうちにも、時間は過ぎてゆく。早起きして仕事をしにきたのだから、その努力が無駄にならないように声をかけ、昼食の時間だと教えるくらいなら…自分にも簡単にできる。

地上からいきなり声をかけると、梯子の上にいるリーナが驚かせてしまいかもしれない。

私は梯子を上り、彼女にそっと声をかけた。

「リーナさん？」

静かに梯子を上ってきたのがいけなかったのか、私が声をかけた瞬間、ビクッとリーナの身体が揺らいた。

バランスを崩して梯子の上から落ちそうになった彼女を、間一髪で

抱き止める。

梯子は大きく揺れたが、倒れることなく済んだ。

ほっと安堵しながら、二人揃って落下する危険もあったのだ…ということに気がつく。

そんなことを考える間もなく、とっさに手を伸ばしていた。

衝動的に動いた自分自身に驚きながら、心臓の鼓動を感じる。

とくん、とくん、とくん。

自分の身体の奥から響く音に意識を向けると、不思議なくらい気持ち静まってゆく。

腕の中に抱きしめた少女のぬくもりを手放しがたく思いながら、平静を装う。

驚かせてしまったことを詫びたあとに、休憩を提案した。

リーナに『ありがとう』と言われた。

ただそれだけなのに、とても嬉しかった。

ありふれたお礼の言葉が何故こんなに嬉しいのだろうか…と考えたら、『自分』の力だけで為したことに對して、お礼を言われたのが初めてなのだ気がついた。

いつも、家名と一族の権勢が周囲の人々に影響を与え、望んでもいない高待遇に身をおいてきた。

だけど、ここでは…ここにいる自分には、そんなことは全く関係な

くて。

自分の行いだけを評価され、認められることが…こんなにも嬉しいことだとは知らなかった。

浮き立つような気持ちを抑えつつ、物思いに沈みがちな5つ年下の少女を気遣いながら昼食を摂る。

ちいさな口に急いでサンドウィッチを詰め込んでいるリーナの姿は、小動物のようでもとても可愛い。

リーナと一緒に食事をする楽しい時間は、あっという間に過ぎた。彼女が食事を終えて立ち上がった瞬間、まだ肝心の『話』をしていなかったことに気がつく。

何の脈絡もなく、訊くにもいけない。どうやって、話を切り出せばいい？

とつさに口から出た言葉「花言葉」を利用し、なんとか話を繋いで…訊きたかった質問を投げる。

「あのね…そのう…言いたくなければ答えなくて良いのだけど…赤ずきんちゃんは、誰かに恋をしたことがある？」

もしも、リーナに想い人がいるのなら…身を退こうと決めていた。昨日は自分のことしか考えずに、自分の気持ちだけを優先して行動したけれど、それではあの毒婦と何ら変わらない。あの女の同類になるのは、絶対に嫌だ。

昨夜の悪夢を現実にしないためには、きちんと彼女のことを知り…

一方的に気持ちを押し付けるのではなくて…。

「ないと思う」

そっけないと思うほど簡潔な答えが降ってきた。

顔を上げてリーナの顔を覗き見ると、彼女は再び目の前の仕事に集中しているようだった。

こちらをチラリとも見ない。

『ある』と言われなかったことに安堵しながら、彼女が『ない』と言いつつ切らなかつたその意味を考える。

鳥籠の中の小鳥のように、外界と隔てられて育った私とリーナは違う。

自分と比べれば、遥かにたくさんの人と出会って、生きていたはず。

初恋とまでは思えなくても、慕わしいと思う人は『いる』…もしかして『いた』？

急に焦って、馬鹿みたいに喋り続けた。

「恋ってどんなものなのかしらね？ 『恋はするのではなく、落ちるもの』…なんて物語の中にはよく書いてあるけれど、本当に恋に落ちてしまったら、もう取り返しがつかないのかしら？ 本気で止めたいと思っても、やめられないのかしら？ 自分で自分を止められないって、どんな気持ちなのかしら？」

答えを期待しつつ…答えが返ってくることに怯えている自分を、混

乱する頭のどこか冷静な部分で自覚したとき、頭上からリーナのため息が聞こえた。

私はハッと我に返って、口を嚙む。

……また、自分のことばかり考えて、仕事をしているリーナの邪魔をしてしまった。

わがままな振る舞いは自重しようと思ったのに。

自分より彼女のことを優先にしようと思っていたのに。

現実では、なかなかうまくいかない。

やるうと思えば、年上らしく振る舞うことができると思っていたけれど、実際はこの有様だ。

しばらくの間、自己嫌悪に陥り……ふと思った。

今まで気遣われることしか無かったんだから、すぐにうまくいなくて仕方がない。

悩むのは、もう飽きた。

今日が駄目でも、明日はうまくできるかもしれない。

明日が駄目でも、明後日がある。

うまくできるようになるまで、何度もリーナを怒らせたり、呆れられたりするかもしれない。

だけど、本当の『友達』なら……喧嘩や口論することは『普通』だと聞いた。

だから、きつと大丈夫。

今できなくても、いつかきつと。

そう割り切つたら、急に眠くなってきた。

あくびを噛み殺しつつ、シートの上に身体を横たえる。

少しだけ、お昼寝しよう。

林檎の花の香りに包まれながら、私はそのまま眠りについたら。

「ご主人様、起きてください。至急、ご相談しなければならぬことがございます」

気持ちよく寝ていたところを揺り起こされると、目の前に深刻な表情を浮かべたセドリックがいた。

眉宇を曇らせている従者の雰囲気から、何かが悪からぬことが起きたことを察した。

リーナはセドリックの隣で、どこか不安そうな顔をしてこちらを見ている。

何か冗談を言つてこの場の雰囲気や和ませようかと思つたけれど、二人とも真面目なタイプだから…笑つてもらえない可能性が高い。私は半身を起し、冗談を言う代わりにふんわりと微笑んでみせた。

主<sup>あるじ</sup>である自分が、余裕と冷静な判断力を失ってはいけない。

私は笑顔の裏に緊張を隠して、セドリックの話に耳を傾けた。

18 夢みたあとに（後書き）

リーナが思うほど、アリスの心中は平和ではなかった…の巻でした。セドリックの話を聞いたアリスがどう反応するか…というところまで書きたかったのですが、文字数のことを考えて、サブタイトルを変更し、次話に回すことにしました。

成人年齢について

今回、地の文章でアリスの実年齢が出てきたので、念の為に17世紀頃の欧州の婚姻年齢を調べてみたのですが、国によって酷く差があつてびっくり。

今まで読んだ（外国が舞台の）物語等でも、婚姻年齢は20歳前後のものが多かったので、史実もほぼその通りに違いないと思つていたのですが…意外や意外、様々な事由から「成人の年齢」25歳、30歳「ぐらいにまで引き上げている国があつたりして、驚きの初婚年齢のデータが…。

（西欧と東欧では激しく違うものの）町人・商人等だけなら、身代を整えるまでに時間がかかるから…という理由で、初婚年齢が高いのは想定範囲内だったので、貴族階級も同じとなると、今まで抱いていた「低年齢の婚姻」のイメージは何だったのかと…（苦笑）

つらつらと考えてみるに、やっぱりアレですね。「ロミオとジュリエット」が原因ですね。原作の二人の年齢は16歳と13歳だとい

う話を聞いて、酷く驚いた覚えがあります。その影響が大きいのかなあ。

あのお話は出会ってから数日間の出来事だったそうで…現代の日本だと「そいつら中二病？」って鼻で笑われそう。

作中の国では、当時の教会法によって定められていた成人年齢を参考に、「成人」婚姻が可能となる年齢」は、「男性15歳、女性13歳」と決めました。（可能というだけで、実際に結婚する or 結婚する人が多い年齢（適齢期）とは異なります）

ちなみに、リーナとアリスはまだ誕生日を迎えていません。（作中の季節は春。リーナの誕生日は冬、アリスは夏なので…季節が巡れば8歳と13歳になります）

19 すべてを生かして(前書き)

リーナ 視点

最初、わたしは離れた場所で…二人の話が聞こえないところで、仕事を再開しようとした。

だけど、マリナも関係する話だと言われて、二人のすぐそばの林檎の木に梯子を移動する。

梯子の上で花を摘みながらセドリックさんの話を聞き……時々アリスの表情を窺う。

話の始まりから終わりまで、アリスはずっとほほ笑みながら話を聞いているようだった。

昨日、アリスから聞いた『秘密』は『本当のこと』なのだということ、心がじわじわと染み入る。

セドリックさんの深刻そうな表情と、いつもとちがう硬い口調が、なによりの証。

アリスなら『ぜんぶ冗談』だった…って言うこともありそうだけど、セドリックさんはきつと…人の命に係わることを冗談で口にしない。だから、今起きていることは、すべて『本当のこと』。

話しを聞き終える頃には、わたしにも事の重大さが理解できた。

マリナやみんなの懸念は、当たっている。

街で広がっているかもしれない『噂』が、アリスの命を脅かす私たちの耳に届いたら…。

どんどん悪い方へと、思考が傾いてゆく。

青ざめたセドリックさんとわたしの顔を見て、アリスは首を傾げてくすつと笑った。

「二人とも、酷い顔色をしているけど…大丈夫よ？ 寧ろ、状況は好転したと言えるわ」

「…？」

アリスの言葉に、わたしとセドリックさんは首を傾げた。

「この村の人々は横の繋がりが強く、『余所者』<sup>よそもの</sup>の動向を掴み、仲間内に素早く伝達することができる…ということが、証明されたよくなものでしょう？ …それなら、逆にわたくしたちの力になってもらうこともできる」

わたしたちの表情が変化するのを、アリスは楽しそうに眺めながら話を続けた。

「わたくしに害をなす者が『噂』を聞きつけてやって来たとしても、わたくしたちが滞在している丘の家は村の中心にあるわ。昼間、村の人たちの人目に付かないように、侵入してくるのは不可能でしょう？ 夜の闇に紛れて襲ってくるにしても、村の周囲は見通しの良い畑が広がっていて、身を隠せる場所や野営に適した場所は無いから、とても大変でしょうね。王都からこの村までの街道は夜には封鎖されているし、黒の森には凶暴な狼がいるから地上に居ることはできないわ。針葉樹の木の上では身体は休められないでしょうし、人目につくから火を焚くこともできない…」

わたしはその言葉を聞いて、イルウク村が四方を黒の森に囲まれている場所に在ることを思い出した。

アリスはまたちいさく笑う。

「村に出入りする人たちの動向に目を光らせてくれるなら、味方が増えたのと同じことだと思わない？ こちらの事情を少し説明して、同情してもらった上で協力をお願いするの。面白おかしく…ありもしない噂を広げた村の人たちの罪悪感をちょっとつつけば、きっとわたくしたちの力になってくれると思うわ」

にっこに、にっこり。

アリスは笑顔でそう言い切った。

「そう、ですね。確かに」

セドリックさんは尊敬の眼差しをアリスに向けて頷く。

「それならば、すぐに私たちが他所へ身を隠す必要はなく…寧ろ、大勢の味方を作れるこの村に居るほうが安全ですね」

「ええ、わたくしもそう思うわ。今回は村長さんを通じて伝達するのではなく、わたくしが村の皆さんの前で直接事情をお話して、協力を求めるほうが…」

相談を重ねる主従の話聞きながら、わたしは何も言えずにいた。

自分の置かれている状況を冷静に把握し、プラスになるような状況を作り出そうとしているアリスの心の強さに驚きながら、ほんのすこしだけ怖いと思った。

必要なら、周囲の人を利用する。

必要なら、真実を小出しにして、同情を買う。

同情を得て、協力を取りつけ…良いことも悪いこともすべて生かし

て、自分の望む現実を作り出す。

苦境にまっすぐ相對する姿勢をすごいと思っけど……でも……。  
莫迦と天才は紙一重だというけれど、腹黒さと要領の良さも紙一重  
なのかもしれない。

わたしはそんなことを考えながら日が沈むまで仕事を続けた。

日没後、馬車に乗ってわたしを迎えに来てくれた村長さんとハ  
ンナ先生に、アリスは手短に事情を説明し、『明日の夕方、教会に  
村の人たちを集めて欲しい』とお願いすると、セドリックさんと一  
緒に丘の上の家へ帰っていった。

村長さんは今夜中にアリスの依頼を村の人たちに伝えると言って、  
果樹園で別れた。

ハンナ先生と一緒に村長さんの家へ向って歩きながら、夜空の月を  
見上げる。

明るい月の光に照らされた道は、いつもとは違う道。

「ハンナ先生、わたしとマリナは……いつまで先生のお家にいなくて  
はならないの？」

「あなたとマリナを二人きりにしておいても大丈夫だとわかるまで  
……かしら」

先生から返ってきたこたえは、曖昧で。

明確な期日が提示されなかったことに、改めて事態の深刻さを改めて  
感じた。

マリナに何かあったら…どうしよう。

言いようのない不安に、ゾクツと身体が震える。

「どんな内容の『噂』が…どれくらい広まっているかはわからないけれど、マリナがお嬢様のお話し相手を務めていたことで、お嬢様と親しい人間だと思われる可能性があるの。もし、お嬢様を狙う人間がこの村に来たら、あの子の身も危ないかもしれない。お嬢様に対しての『人質』にされるかもしれないと考えると…」

先生は言葉を濁して、わたしに柔らかい眼差しを向けた。

先生が言った『お嬢様』という言葉とその意味を、頭の中で反芻する。

アリスは、村長さんと先生に…自分の名と本当は女の子ではないことを話さなかった。

教えられた『秘密』がどれだけ重いかわからないけれど、誰にも言わないように気をつけなくちゃ。

「リーナ、貴女あなたと私に血の繋がりはないけれど…マリナの家族である貴女は、私の家族でもあるのよ」

「…。」  
「私の家はマリナの実家。マリナと貴女のもうひとつのお家なの。慣れるまでは落ち着かないかもしれないけれど、お互い遠慮せず…助け合って暮らしましょうね」

ハンナ先生が差し出した手を、わたしはしばらくの間見つめて…おずおずと自分の手を重ねる。

先生のふかふかの柔らかい手のひらの中に、私の手が包まれた。

繋いだ手のぬくもりが、ほんの少しだけ心を軽くする。

「正直なところ…お嬢様の方のご事情よりも、マリナにしつこく言い寄っていた人たちが『噂』を信じた場合、何をしでかすのか心配なの。暴力をふるうことをためらわない人の前では、女や子供は無  
力だわ」

「…。」

先生の言葉に、わたしは唇をぎゅっと噛みしめた。

お爺ちゃんにいろいろ習っているけれど、まだわたしには大人と正面から戦えるほどの力はない。

練習を重ねて上達し、腕前をほめられた『あの武器』は、殺傷能力が高すぎて…逆に使えない。

「明日にはクルトが帰ってきてくれるから、昼間はいつもどおりで大丈夫よ」

「クル兄が帰ってくるの？」

マリナの二人のお兄さんのうちのひとり、クル兄はタトウク村のイルゼさんと結婚していて、年に数回…農業が忙しい時期にだけ故郷のこの村にもどってくるのが通例だった。

「ええ。北の土地を開墾かいこんするのに牛の力が必要だから、イルゼの牧場の牛たちの出産が終って、手が空いたら来てくれるように…と前から頼んであったのよ。クルトなら安心してマリナの用心棒を任せられるし、果樹園の仕事も手伝わせることができるし、丁度良かったわ」

「…え？」

ハンナ先生は、驚くわたしを見ていたずらっ子のように笑う。

「今日のリーナの落ち込んだ顔を見れば、摘花が思うように進まなかったことぐらい、すぐにわかったわ。貴女が頑張りやさんなのはよくわかってはいるけれど、一人で果樹園の仕事を全部やるうなんて、気負ってはダメよ？ 無理をしてできることと、できないことがあるわ。人の手を、助けを借りることは、恥ではないの」

「…でも、」

先生は苦笑しながら、申し出を断ろうとしたわたしの言葉を遮る。

「どうしても貴女が気に病んでしまうのなら、クルトはマリナの代わりだと思えばいいわ。あの子は鈍くさいから…間違いない梯子から落ちたり、怪我したりするでしょうからね」

「…。」

先生の言葉に、今度はわたしが苦笑した。

ジャックが居たときも、居なくなった後も、マリナは何度も果樹園の仕事をやりたがったけれど…危険なつかしくて仕方が無かった。梯子で高いところまで上れば目を回し、昆虫や毛虫に驚くたびに大きな悲鳴をあげていた。マリナが居るとかえって作業効率が落ちるからという理由を、やんわりとした言い方でしっかりと納得させて、果樹園には出入り禁止とした経緯があったから。

「大丈夫よ、きっと。皆で力をあわせれば、大抵のことは乗り越えられるわ。マリナのことも、お嬢様のことも……きっと、大丈夫」

先生の言葉に、わたしは頷いた。

大丈夫。きつと、大丈夫。

心の中で…祈るように、呟くように、何度も何度もくり返し、不安に怯える心をなだめながら夜道を歩く。

そんなわたしとハンナ先生を、月は柔らかな光で照らしていた。

19 すべてを生かして(後書き)

2011・09・24 語句修正

20 なつかしい思い出(前書き)

リーナ 視点

わたしは次の日もまた早起きして、日が昇った直後から果樹園で働いていた。

ひとりで黙々と作業をしていると、時間がどれくらい経ったのかわからなくなる。

教会の鐘の音でお昼になったことを知ると、花を摘む手を止めて慎重に梯子を降りた。

「んー…」

地面の上に立ち、腕を伸ばして強張った身体をほぐしていると、カサカサと草を踏む音がした。

音のした方向を振り返ると、マリナの年の離れた弟…アルトがいた。彼は無言のままわたしのすぐそばまで歩み寄り、手に持っていた籠をわたしのほうに差し出す。

「…?」

首を傾げたわたしに、アルトは強引に籠を押し付けた。

「お前の昼メシだよ。母さんに頼まれたから、持ってきてやった」

そういえば、今朝、ハンナ先生が「後でお弁当を持って行ってあげるから」と言っていたっけ…。

わたしはぼんやりと思い出しながら、アルトにお礼を言う。

「ありがとう」

籠の中から、香ばしい焼き立てのパンの匂いがする。美味しそうだと思うたら、自然と顔がほころんだ。

「…べ、べつにお前のためなんかじゃないんだからな！ 母さんに言いつけられて、仕方なく来ただけで」

「うん、わざわざごめんね。明日からは、迷惑かけないようにするから」

わたしが謝ると、アルトは一瞬驚いたような表情を浮かべて頭を振った。

「迷惑だなんて、そんな大したことじゃないだろ」

「でも…」

「誰にも頼らないで生きていくつもりか？ 遠慮せずに甘えろよ」

呆れたようなアルトの口調にびっくりして聞き返す。

「わたしが、アルトに甘えるの？」

そう言いながらアルトの顔を見上げると、彼の頬はみるみるうちに真っ赤に染まった。

「ばっ、ちげーよ！ …あ、いや、いいのか？ うん、おかしくないよな？」

「…？」

「俺はお前より3つも年上なんだし、お前は俺の姉ちゃんの家族なんだし、俺はお前の兄貴みたいなものだろう？ 妹は、兄貴に甘えてもいいんだよ」

アルトはカイトさん（マリナの一番上のお兄さん）みたいな口調で、ゆっくりと言った。

いつものアルトとは違う、背伸びしたような言い方がおかしくて、わたしはくすりと笑う。

「アルトお兄ちゃん……って呼べばいいの？」

試しにそう呼んでみると、アルトの頬が更に赤くなった。

「……っ！ 笑顔でその呼び方は禁止」

「……どうして？」

「俺の心臓に悪い」

心臓って……？

わたしが知らないだけで、アルトには何か持病があったのかしら？

首を傾げるわたしの頭を、アルトは軽くなでる。

「まあ、わかんないよな。でも、まだお前は知らなくていいよ」

「……」

アルトの言葉を聞いたら、ふっと頭のなかに懐かしい記憶が甦った。

<僕たちのかわいりり……ーナ>

<ずっと、傍にいるから>

<俺たちが、お前を守るよ>

<誰にも、渡さないから>

<君と………の『本当の名前』を、誰にも知られてはいけないよ>

< どうして？ …うん、その理由は…リーナがもう少し大きくなったら話してあげるから >

< 今はまだ、わからなくていいんだ。僕たちが守ってあげるから >  
< もし、僕たちが離れ離れになることがあっても、必ずリーナを探し出すよ >

< 俺たちは、自分自身とお前を守る力を絶対に手に入れる >

< 誓ったんだ、……………に >

< だから、リーナも忘れないで。自分が愛されて生まれてきたことを >

< 俺たちが、お前を愛していることを >

施設裏の花畑の片隅…お墓の前で、兄さまたちは何度も何度もわたしに言った。

わたしに言い聞かせるというよりは、お墓の下で眠っている母さまに誓っているようだと思いつつ…真剣な兄さまたちの様子が少し怖いと感じていた。

兄さまたちと一緒にいると、陽だまりの中にいるようなあたたかい感じがするのに、母さまのお墓の前に立つ兄さまたちはいつも難しい顔をして、ピリピリする空気を身にまとっていた。

『本当の名前』を秘密にしなければいけない理由を知らないまま、わたしはひとりぼっちになった。

あの嵐の夜、兄さまたちとはぐれて、ひとりで夜の闇をさまよい歩き…崖から落ちた後の記憶はない。

気がついたら、着ていた洋服も、髪を飾っていたリボンも、母さまの形見の十字架も…すべてを失って知らない場所にいた。

その場所の名が『孤児院』だということを教えてくれたのは、わた

しと同じ年頃のこどもたち。  
みんなが大人に怯える理由を、最初はよくわからなくて……次第に  
痛みとともに理解した。

わたしがぼんやりといるいろなことを思い出していると、アルトが  
言った。

「いいから、早く昼飯食べちゃえよ。今日もまた日が沈むまで  
仕事するつもりなんだろ？」

「うん」

アルトに促され、わたしは東屋<sup>あづまや</sup>へ足を向けようとして……止めた。

「アルトはもうお昼ごはんを食べたの？」

「母さんに頼まれた食材を丘の上の家へ配達した後、ここに来るま  
での間に歩きながら食べた。……夕方4時に教会へ集まらないといけ  
ないから、今日はみんな大忙しで仕事をしてるみたいだぜ」

「……そう」

そういえばきのう、アリスが村長さんに頼んで、村中の人を教会に  
集めるように言っていたっけ。

「なんだよ、その気の抜けた返事。リーナは教会へお嬢様の話を聞  
きに行かないのか？」

「鳥肌が立つのがいやだから、いかない」

「……は？」

アルトの怪訝な表情に気がつかないフリをして、踵<sup>かかと</sup>を返す。

アリスにはセドリックさんがいるし……わたしの助けなんて必要ないもの。

仕事の時間を削る気はないし、あの寒々しいアリスの『演技』を観るのは嫌だし。

歩み去ろうとするわたしの背に、アルトの声がかけられた。

「……っと、忘れてた。今朝、お前が出かけた後でクル兄の伝書鳩が着いたんだ。王都に居るカイ兄のところへ寄ってから帰るって。村に着くのは夕方になりそうだったさ」

わたしは足を止めて、振り返る。

「クル兄のことより、マリナはちゃんと村長さんのお家で留守番してる？」

「父さんと母さんにもしばらく一人で外出すんなって言われてたし、大丈夫だろ。姉ちゃんだって、アレでいちおう大人なんだから」

「……それ、本当にそう思って言ってる？」

わたしが疑わしげな目で見ると、アルトは少しひるんだ。

「マリナは自分のことより、他人を優先してしまうところがあるから、一人しておくのは心配なの。できるだけマリナのそばについてあげてね」

わたしの言葉を聞くと、彼は大きな声で笑い出した。

「マリナが危険な目にあうかもしれないっていうのに……なにがおかしいの？」

「怒るなよ。お前と姉ちゃん、二人して同じことを俺に言うから、

可笑しくてさ。血が繋がってないのによく似てるなあ…と…」

「マリナが、わたしのこと…心配してた？」

「ああ、すごく心配してた。こんなときに一人で外に出しても大丈夫かしら…とか、リーナは可愛いから悪い人に攫われちゃうかも…とか、他にもいろいろと」

「…。」

「リーナの瞳は、ジャックの目の色とよく似た珍しい緑色だし…髪の毛は姉ちゃんの色と同じだし、三人ともお互いを大事にしてるから、知らない奴が見たら血が繋がってないことなんて解らないだろうな。すごく仲のいい、『本当の家族』に見えると思う」

「…。」

アルトの優しい眼差しとその言葉の内容に、わたしはどう答えればいいのかわからなかった。

困惑しているわたしの顔を見て、彼は口元に笑みを浮かべる。

「仕事が忙しいときに、話し込んで悪かったな。姉ちゃんのこと、心配すんな。俺の目の届く範囲にいるときは、ちゃんと見守ってるから」

「…うん、よろしくね」

駆け足で村の中央へと戻っていくアルトの背中を少しだけ見送った後、わたしは昼食を食べるために東屋へ向って足早に歩き出した。

20 なつかしい思い出（後書き）

\*\*\* リーナから見た「カイトとクルト」 \*\*\*

マリナとアルトの一番上の兄であるカイトは、リーナがイルウク村に来た時には既に王都で働いていました。年に数回しか帰省しないため、リーナとも深い交流が無く、リーナは彼のことを『カイトさん』と呼んでいます。

（ジャックとカイトは同じ年の親友です）

次兄クルトは隣村のイルゼと結婚するまでの間、ジャックやマリナを通じてリーナとも親しくしていました。リーナが『クル兄』と呼ぶのは特別親しいから…という訳ではなく、彼の親しみやすい人柄の賜物。子供と動物に好かれる彼は、どこでも人気者です。

作中（会話、地の文）で出す機会がないかもしれないので、脳内補完御願いたします。

21 星に願いを(前書き)

マリナ  
視点

21 星に願いを

西の空の端がほのかな茜色に染まる頃、教会内部の柱時計が四時を指した。

ボーン、ボーン、ボーン、ボーン……。

時を告げる鐘の音が鳴るのと同時に、教会の扉が開く。光を背に佇む影が、二つ。

逆光で姿形しか解らないけれど、あれはお嬢様とセドリックさんに違いない。

二人の登場に、みんなのざわめいていた声がピタリと止んだ。

静寂の中、お嬢様は物怖じした様子をみせず壇上に立ち、にっこりと笑う。

その可愛らしい笑顔を見て、張りつめていた気持ちが少しだけゆるむ。

ちいさな吐息があちこちから聞こえる。

私以外にも…緊張して息を潜めていた人がいたらしい。

「皆さん、本日はお忙しい中集まってくださって、どうもありがとうございます」

お嬢様は教会に集まった私たちの顔をゆっくりと見回しながら、よく通る澄んだ声で…親しく友人に話しかけるような柔らかい口調で話をはじめた。

家督争いのため、血の繋がった親族に命を狙われていること。お嬢様の従兄：次期家長候補の方々が、幾人も謀殺されてしまったこと。

確たる証拠がないため、首謀者を捕らえられずにいること。

お嬢様は病弱であることを理由に家督争いから身を退き、暗殺者から逃れるために旅をしていること。

『静養の旅』というのは、氏素性を隠して各地を旅するための、表向きの理由だということ。

壇上のお嬢様の姿を、斜光が照らす。

光を受けて輝く美しい少女の口から淡々と語られる身の上話に、私も皆も息をするのを忘れるぐらい惹き込まれてゆく。

お嬢様の話が例の『噂話』に移り、お嬢様とセドリックさんがこの村に居るといふ情報が王都で広まっている可能性に触れると、噂話を知らなかった人、噂話に加わらなかった人たちの口から、憤りがこもった囁きや呟きが漏れた。

逆に、噂話の発端となった人たち：特にフレッドとジョージは青ざめた表情でうつむいていた。

他にも身の置き所が無いという風にそわそわしている人たちは、周囲の厳しい目線に晒されて余計に落ち着きをなくしている。

「わたくしは、『噂』を広めた犯人を探したくて、皆さんに集まっていたいた訳ではないのです」

お嬢様の声に、その凜とした姿に、私と皆の意識が再び引寄せられ

た。

「起きてしまったことは、もう覆せません<sup>くつがえ</sup>。どんなに願っても、無かったことにはできない」

痛みを堪えるような苦い笑みは、少女のものとは思えないほど大人びた表情で…とても痛々しい。

「この度のこと…皆さんのお力を借りれば、どうにかやり過ごせるかもしれませんが。本来関係のない皆さんを巻き込むことは大変心苦しいのですが、どうかわたくしに協力していただけられないでしょうか？」

再び訪れた静寂の中、お嬢様は深々と頭を下げてそう言うと、私たちに詳しい話を始めた。

『黒の森に囲まれている村の立地条件を生かして、村の周辺と人気の少ない場所や農地を交代で巡回し、見慣れない他所者が潜んでいないか探す』…という、簡単な依頼内容だった。

発見したり、見かけたら…『報告』のみで良い…というのは、私たちの安全優先のため。

お嬢様やセドリックさんにも、どんな人間が暗殺者として雇われているのかわからないから、私たちが危険な目にあわないように…とのご配慮だった。

多額の謝礼も提示され、満場一致でお嬢様に協力することが決まった後、セドリックさんと父さんを中心に、各自の担当する警戒区域と見回りをする順番、二人一組となる組み合わせ等、具体的な話が

進められていた。

お祭りの準備をしている時のような熱気に包まれる中、女子供は先に家へ帰るようにと指示が出て、教会の扉の外へ出たところでサリアさんに声をかけられた。

「　　すごいねえ、あのお嬢様」

「　　…ええ、本当に」

私は頷きながら、夕焼けに染まる空を見上げる。

わずか一時間足らずで…お嬢様が皆の心を惹きつけ、話をまとめてしまったことに、改めて驚く。

まだ教会の内にいる母さんに視線を投げると、先に帰っていないさい…と言うかのように手を振られたので、私はサリアさんと一緒に実家へ向って歩き出した。

「あの『噂話』に関わってた子たちはみんな、気に病んでいたからね。挽回できるチャンスが与えられて、しかも給金も貰えて稼ぎになるとあっちゃあ、やる気も一段と増すってもんさ」

サリアさんの言葉に、私は曖昧な笑みを浮かべる。

本当のことを言えば、無責任な噂を立てて、広めた人たちに怒りをぶつけたかった。

ちゃんと謝って欲しかった。

お嬢様のほうが、私よりもよっぽど大人だわ。

そう思いながらも、貞操が疑われたことに対する怒りは、なかなか消えてくれない。

私は、ずっと昔からジャックだけを想っていた。

彼だけが、私の特別。

彼だけの『特別な人』になりたくて、できるかぎりの努力を重ねてきた。

ジャック以外の男の人と友達にはなれるけれど、それ以上の関係は……想像することすらできない。

ため息をつきたくなるような気持ちを押し殺して、夕暮れの空を見上げた。

茜色に輝く夕日と夕焼けの空を眺めながら歩いているうちに、少しづつ荒れていた心が和らいでゆく。

…空を見上げると気持ちが落ち着く…、そう教えてくれたのは、ジャックだった。

あれはまだ…私がリーナと同じぐらいの歳の頃。

同世代の友達に酷くからかわれて、私は物陰に隠れて泣いていた。

兄さんたちに見つかつたら、何があったのか、誰に苛められたのか…問い詰められてしまうから。

事情を聞いた兄さんたちが私の代わりに仕返しをしたら、また、そのことを理由に苛められる。

だから、誰にも見つからないように…ちいさな身体がもっとちいさくなるように、背中を丸めてうずくまって泣いた。

些細なことをあげつらう友達も、すぐに涙がでてきて何も言い返せない自分のことも、何もかもが嫌だった。

ジャックはそんな私を見つけると、軽々と自分の肩の上ののせて、いつもよりずっと高い視点から空を見せてくれた。

私が泣いていた理由も、隠れていた事情も、ジャックは何も聞かなかった。

空を見上げることの楽しさを語りながら、私が泣き止むまで傍にいてくれた。

「悲しいとき、怒ったとき、どうしようもなく苦しい気持ちを抱えているときは、空を見上げるんだ。

綺麗な青空を見ると、心が洗われるような気持ちになるよ。

ゆっくり流れていく白い雲を眺めていると、気持ちが少しづつ落ちていく。

夕日は、あたたかいオレンジ色をしているよね。

日が暮れる時間の空は、刻一刻と色を変えてゆくんだ。

ほんの短い間に、何色もの色に染まって……やがて真っ暗な夜になる。

夜の空も、僕は好きだよ。

毎日姿を変える月は見飽きることがないし、星の瞬きはすごく綺麗だと思う。

広く限らない大きな空は、いつだってちっぴけな僕らを優しく見守っていてくれるから、心が落ち着くまで……もう大丈夫だと思っただけ、ずっと空を見上げていればいい。

うつむいて、下を向いて、顔を隠して泣いて…空の景色を見逃してしまふのは、もったいないと思わないかい？

ほら、世界はこんなにも綺麗だよ」

私はジャックの優しい声に誘われて顔を上げ、目に飛び込んできた景色の美しさに驚いた。

どこまでも続く水色の空。

光を受けて輝く小川の水面。

見渡す限りに広がる畑の緑。

見慣れていたはずの何もかもが、鮮やかな色に見えて…びっくりした。

私は目を見開いて驚きながら、どうしていつもと違って見えるのか訊こうとしたけれど、できなかった。

微笑んで私を見ているジャックの瞳に魅入られて、口から言葉が出てこなかったから。

光に透けてキラキラと輝く彼の緑の瞳は、宝石のように美しかった。

よく似た色の瞳を持つリーナを初めて見た時、「他人とは思えなくて、引き取ってきてしまった」というジャックの話を、私はすぐに信じた。

『ジャックの隠し子』説が噂になって広まった時には、夜も眠れないくらい悩み…当のリーナの口からしっかり否定されるまで、半信半疑で苦しい日々だった。

緑色の眼を持つ人は、この村にはジャックとリーナだけだし、王都でも見かけたことがない。

『森の国』と謳われる隣国から来た行商の人の話だと、隣の国でも尊い血筋の方にしか現れない珍しい色だというから……他所で見かけないのは当然のことなのかもしれない。

王都のお土産屋さんで見たこの国の王族の方々の絵姿は、金の髪に青い瞳が多かった。

美しい『湖の国』と讃えられていることと、王族の方々の外見の特徴から、この国では青が最も尊い色だと定められているのかもしれない。

だとしたら、式典の際などの礼服やドレスには……。

「リナ！ マリナ、あたしの声聞こえてるかい？」

「…えっ？」

突然聞こえたサリアさんの大声に、驚いて足を止める。横を見れば、サリアさんが呆れ顔で私の腕を掴んでいた。

「やれやれ、あなたのその…考え事をし始めると周囲がまったく見えなくなる癖、まだ治ってないんだね？ 実家に帰るんだったら、道はあっちだろう？」

「あ…」

私はサリアさんの言葉で、分かれ道に立っている現実気が付いた。実家に戻るのであれば、左の道。

私が今進もうとしているのは、右の道だった。

「サリアさん、教えてくれてありがとうございます」

私は頭を下げてお礼を言う。

「……でも、私、このままこの道を行います。この道の先には、ジャックの果樹園があるから。リーナを迎えに行つて、それから実家に帰ります」

ジャックやリーナのことを考えていたから、何も考えなくてもこちらへ足が向いてしまったんだわ。

そう思いながら話していると、サリアさんの渋面に気が付いた。

「マリナ、お嬢様だけでなく、あんたも当分は身辺に気をつけないと危ないんじゃないかい？ こんな時間に一人で出歩くなんて……」  
「ええ、でも……まだ夕方だし、空も明るいから、大丈夫ですよ」

心配そうなサリアさんにもう一度別れを告げて、私は果樹園へ向けて歩き出した。

この道の先に、ジャックの大切な果樹園がある。

そこにはリーナがいて……彼の代わりにひとりで、林檎の木の世話をしている。

果樹園には出入り禁止だと言われているけれど、中に入らなければ大丈夫よね。

自然と足早になっている自分に気がついて、思わず笑みがこぼれた。久しぶりに林檎の花と香りが愛でられる機会に、胸がはずむ。

リーナが良いといったら、花が咲いている枝を少しもらって、家に飾ろう。

歩いていると、夕暮れの空に一番星が光っているのを見つけた。

流れ星ではないけれど、あんなに綺麗なお星様なら、願い事を聞いてくれるかしら。

叶えてくれる力はなくても、私の願い事を否定や批判をせずに…聞いてくれるかしら。

「また、ジャックとリーナと私…三人で一緒に暮らせますように」

誰にも聞き咎められないよう、ちいさな声で星に願う。

私の願いは、変わらない。

私は今もジャックの無事を信じているし、彼のことだけを愛している。

「……待ってるから。リーナと一緒に待っているから、必ず私たちのところへ帰ってきてね」

星にジャックの面影を重ね、語りかけるように願いながら、私は果樹園へと歩き続けた。

22 よみがえる恐怖(前書き)

リーナ 視点

## 22 よみがえる恐怖

林檎の花を摘む手を止めて空を見上げると、茜色に輝く夕日と綺麗な夕焼けに気がついた。

ジャックと一緒に果樹園の仕事をしていたときは、休憩するたびに空を眺めて、いろんなことを教えてもらった。

太陽の位置で時間を計ること。

農作業に適したタイミングを、夜空の星に教えてもらうこと。季節ごとに雲の形は変わり、それぞれの呼び名が異なること。

ジャックがいまここにいなくても、ジャックが教えてくれた『知識』がわたしを支えてくれている。

「がんばらなくちゃ」

決意を声に出して呟いたとき、わたしの耳が人の声を拾った。

「……………いねえな。どうなってんだ？」

「何処へ行きやがったんですかね、この村の連中は」

聞き覚えのない、男のひとたちの声。

何かを…誰かを探している？

声と足音はどんどんこちらへ近づいてくる。

嫌な予感がして、わたしは急いで梯子を降りた。

どこかに身を隠そうとしたけれど、彼らがわたしを見つけるほうが早かった。

「　なんだ、ガキじゃねえか。一人か？」  
「…そうみたいですわねえ」

果樹園の近くに現れた見知らぬひとたちは、わたしを値踏みするような眼で見ている。

気圧されないようにぐっとお腹に力を入れて、わたしも相手を観察した。

背が高めでやせているひとは、珍しい褐色の肌の色をしていた。

着ている服や靴などの身なりは良いけど、底意地の悪そうな目つきをしてわたしを見ている。

となりにいるひとは、背が低めで太っていて…全体的にまるっこい感じ。

洋服や靴は汚れているうえに、ずいぶんくたびれている。

わたしに視線を投げながら、やせているひとの様子をチラチラと上目遣いで窺っていた。

「兄貴、このチビに訊いてみちやあいかがですか？　他に人がいますせんし」

「仕方ねえな。ブラン、お前が訊きだせ」

「へい。…おい、チビ、村の連中はどうした？　オトナが一人も見当たらねえ訳を知ってるか？」

ブランと呼ばれたふとっちょさんは、ずかずかと果樹園の中に足を踏み入れて私に尋ねた。

彼が近づくと、お酒の匂いが鼻についた。

このひと…酔っ払ってるんだ。

ふとつちよさんに兄貴と呼ばれてた、威張<sup>えは</sup>った口調のひと、酔っ払っているのかもしれない。

お祭りの日でもないのに、まだ日が高いうちからお酒を飲み始めるひとたちが、まともだとは思えない。どうしよう。

答えていいの？

わたしが迷っていると、えばりんぼさんが足で果樹園の柵<sup>さく</sup>を蹴っ飛ばした。

「さっさと答える！ 口がきけねえのか、このクソ餓鬼がっ！」

大きな声と、蹴られた柵<sup>さく</sup>が軋<sup>きし</sup>む音が耳に飛び込んできて、わたしの身体がビクツと震える。

怖い。

孤児院での記憶が脳裏に甦<sup>よみがえ</sup>る。

ささいなことでも大声で怒鳴られて、暴力をふるわれたのは、孤児院にいた三ヶ月のあいだけ。

赤ちゃんの頃からずっと孤児院<sup>こじ</sup>にいる、と教えてくれた子は大勢いた。

その子たちと比べたら、三ヶ月なんてとても短い。

だけど、その三ヶ月で…『力』の無い者は虐げられ、抗うこともできないことを知った。

見知らぬ人の怒鳴り声が、わたしの中で眠っていた恐怖と恐れを呼び起こす。

身体が震え、歯の根があわない。

わたしの怯える様子を見て、二人は大きく舌打ちをしながら近づいてくる。

「…いやっ、こないで」

逃げなくちゃ。

早くここから逃げて、知らない人たちが村の中に入り込んでいて、誰かに伝えなくちゃ。

そうしなければいけないとわかっているのに、身体が動かない。足が震えて、一步も動けない。

「なんだ、喋れるじゃねえか」

えばりんぼさんが口元に笑みの形を作って、わたしの顔を覗きこむ。その眼には冷ややかな光が浮かんでいて、本当は笑っていないことがわかる。

作られた笑顔は、怒っている表情よりも、ずっと恐ろしかった。

「俺たちはな、友達に会うために、王都からはるばるやってきたんだ。ところが、着いたのはいいが、どの家を訪ねても、みいんな留守。長旅で疲れてるっていうのに、友達にも未だ会えず、そいつの家を尋ねようとしても、人っ子ひとりいない…って困ってるのさ」

えばりんぼさんは作り笑顔のまま、猫なで声で話を続ける。

「困った俺たちは、畑になら人がいるかもしれないと思って、見知らぬ土地をさ迷い歩き……やっとお嬢ちゃんを見つけたんだ。急ぎの用があつて、さっきはつい怒鳴っちゃったが、脅かそうと思って

やったわけじゃねえ。長旅で疲れている上に、気が焦ってたんだ。許してくれるよな？」

獲物を前にして舌なめずりする獣のような…ねばっこい視線と台詞に鳥肌が立つ。

嘘。

このひと、嘘をついてる。

理由も根拠もないけれど、反射的にそう思った。

同時に、このひとたちの狙いが誰なのか…どう答えればいいのかを考える。

誰を探しているの？

アリス？ それともマリナ？

今なら…まだみんな教会にいる？

みんなが大勢いる場所なら、教えても大丈夫？

わずかな時間にめまぐるしく考えていると、わたしの沈黙を是と判断したえばりんぼさんが、大仰な仕草で喜びを表した。

「そうか！ 許してくれるか！ お嬢ちゃんは可愛い上に、優しいんだなあ。……そんな優しいお嬢ちゃんに訊きたいことがあんだが

…」

えばりんぼさんの大きな手が、ゆっくりと伸ばされる。

あの手には掴まえられたら、逃げられない。

力では、絶対に敵わない。

逃げなくちゃ。

早く、早く、早く！

……でも、身体が動かない。

逃げ切れられなかったら？

逃げ出そうとして捕まったら、もっと酷い目にあうことを、わたしは知ってる。

口答えをひとつでもしたら、何倍にもなって返ってくる。

頬を叩かれ、お腹を蹴られ…髪の毛をわしづかみにされて、床や壁に叩きつけられる。

よみがえった鮮明な記憶の『痛み』を思い出したことで、恐怖は倍増した。

また逃れられない暴力に晒されるのかと思うと、恐ろしくて震えがとまらない。

わたしは、大きな手が近づいてくるのを呆然と見ていることしかできない……。

パンッ！

何かが弾かれるような大きな音と同時に、聞き慣れた声が耳に飛び込んできた。

「じちの子に触らないでっ……」

23 わきあがる勇氣(前書き)

リーナ 視点

## 23 わきあがる勇氣

わたしをかばうように現れたひとは、マリナだった。

マリナはわたしとえばりんぼさんの間に立って、今まで一度も聞いたことのないとがった声を放つ。

「うちの子に、何をしようとしていたんですか？」

えばりんぼさんは大仰に肩をすくめて答えた。

「ちよつとそこのお嬢ちゃんに訊きたいことがあったから、近寄っていただけだぜ？」

「質問だけなら…あんなに近寄らなくても、手を伸ばさなくても、できますよね？ 何か他の目的があったとしか思えません」

ピシヤリと叩きつけるようなマリナの物言いに、ふとつちよさんがゆるんでいた表情を一変させた。

「てめえ、兄貴に向って何だその言い草は！」

ふとつちよさんの怒鳴り声にも、マリナの背中中は揺るがない。落ち着いた声で応じる。

「そんなに怒鳴らなくても、ちゃんと聞こえています」

えばりんぼさんは真顔でマリナをじっくり眺めてから、ニヤリと笑った。

「随分と胆のすわった女だな。いいねえ、あんた。俺の好みだよ」

「…。」  
「気の強い女は、嫌いじゃない。少しづつ心を折って、屈服させて  
ゆく楽しみがあるからな」

「…。」

マリナはえばりんぼさんの冷やかな視線と毒を含んだ言葉を黙って受け止めている。

わたしは声も出せずにマリナの背中を見つめているうちに、彼女の  
手がわずかに震えていることに気がついた。

「…マリナ…」

ちいさな声で呼びかけると、マリナは後ろを振り向かないまま…いつもの優しい声で答えてくれる。

「大丈夫よ、リーナ」

わたしを背中に隠すようにかばってくれているから、マリナの表情は見えない。

でも、ちいさく震えている指先が、マリナの本当の気持ちを表しているように思えた。

マリナもわたしと同じで……本当は怖いんだ。

どうして？

どうすれば見せかけだけでも、心強くいられるんだろう？

そう思った瞬間、お昼にアルトと交わした言葉が脳裏に浮かんだ。

<マリナは自分のことより、他人を優先してしまうところがあるから...>

<お前と姉ちゃん、二人して同じことを俺に言うから...>

わたしがいるから？

わたしを守るために、マリナは『怖い』と思う気持ちを抑えて、気丈にふるまっているの？

その答えを見つけたとたん、暴力に怯えていたわたしの心がふわりと軽くなった。

わたしのために、あの泣き虫のマリナが心を奮<sup>ふる</sup>い立たせているのだと思うと、どんどん胸が熱くなつてゆく。

わたしがマリナを大切に思うのと同じ気持ちを、マリナもわたしに抱いてくれている...？

だから、怖くても...怯えずに...逃げ出さずにいられるの？

そうだとしたら、わたしにもマリナと同じことができるはず。

心の中にわきあがってくる勇気が、過去に味わった恐怖を押しつけてゆく。

マリナがわたしを守ってくれるように、わたしもマリナを守りたい。

今のわたしは、抵抗できずに...ただ耐えることしかできなかった二年前のわたしとは違う。

正面から戦って、勝つことができないことは変わらない。

だけど、『できる』こともある。

きつと、うまくいく。

大丈夫、わたしはうまくやれる。

わたしは大きく深呼吸してから、一步前に出た。

マリナの横に立ち、彼女の震える手をぎゅっとにぎった。

「…リーナ？」

不思議そうな表情を浮かべるマリナに、わたしは笑いかけた。

わたしの笑顔を見て、ほんのすこしでもマリナが安心してくれるといい。

そう思いながらほほ笑んで、もう一步前に進む。

マリナと位置を入れ替える瞬間、ちいさな声で頼んだ。

「マリナ、わたしが時間をかせぐから、隙をみて……東屋にある、あの『赤いひも』をひっぱって」  
「…っ！」

カイトさんが発案して、クル兄が中心となって村中に設置したという…『アレ』を使えば、村のみんなに助けを求めることができる。村の中で異変が起きていることを、みんなに伝えられる。

『アレ』を起動させるためのひもは、村の中のあちこちにある。果樹園（くだ）には、東屋の中にひとつだけ設置されている。

今いるこの場所からは少し遠いから…わたしがあそこまで走って行くより、マリナのほうがずっと速い。

だから、作戦としては間違っていない。

わたしの意図を察したマリナが何か口にするより前に、ふとっちゃんさんが怒鳴った。

「てめえら、何をコソコソと話していやがる！」

「…別に？」

生意気に聞こえるようにわたしが短く言い返した言葉は、狙い通りふとっちゃんさんの勘に触ったらしい。顔を真っ赤にして、えびりんぼさんを押しのけ、こちらに歩みよってくる。

わたしは背中に隠した左手でマリナに後退するように指示を出しながら、右手を腰のベルトに回す。

喧嘩は、最初が肝心。

『勢い良くハツタリをかまして、相手をビビらせることに成功すれば、七割方勝てる』と言っていた、クル兄の言葉を思い出しながら、タイミングを計る。

三、二、一、ゼロ！

ふとっちゃんさんがわたしに向って振り降ろした手を、ベルトに隠していた短刀ナイフで思い切りよく切り払った。

ザクっ！

ナイフから伝わる手ごたえが軽すぎたことに驚いて見れば、ふとちよさんは無様な格好で地面に転がっている。

「…つと、あぶねえ、あぶねえ。ブラン、俺が助けてやらなかったら、お前の手はお嬢ちゃんの手でザックリ切られてたぜ」  
「……………どうして？」

何故わたしが攻撃をしかけることを、えばりんぼさんはわかったんだろう？

思わず口から出た疑問に、彼はあっさりと答えてくれた。

「さっきまでとは、目の色が違ってたからな」

「…？」  
「踏みつけられ、虐げられることを…受け入れている奴らは、目が虚ろなんだよ。そういう奴らは、死んだ魚のような目で…現実を見やしねえ」

えばりんぼさんは確かにわたしを見ながら話しているのに、どこか遠くを見ているような目をしている。

視界の端でふとちよさんが地面から立ち上がるのを見て、わたしは短刀を構え直した。  
油断しないよう、ふたりの動きを見逃さないように気を引き締める一方で、頭の中に疑問が広がってゆく。

このひとたちは、いったい何をしに…何が目的で、イルウク村に来たの？

マリナの姿を見て反応しなかったということは、マリナに再婚を迫

るひとたちとは関係がない…？  
ううん、そうとは限らない。

マリナを誘拐するために、誰かに雇われたひとだという可能性もある。

アリスの命を狙っているひとの手先だという可能性もあるけど、そんなひとたちがお酒をのんでやって来るかしら？

仕事をしにやって来たのに、仕事を済ませる前から酔っ払っているなんて…ないような気がする。

でも、今日は下見とか…偵察<sup>ていさつ</sup>、情報集めだけのつもりだったら…あり得る？

わたしの見ている前で、えばりんぼさんはふとっちょさんに小声でささやいている。

マリナではなくわたしに注意を引きつけておくためにも、何の目的でこの村に来たのか、訊きたいことは何なのか…こちらから話をふったほうがいいのかもわからない。

わたしが口を開こうとした瞬間、背後からカタカタカタと音が鳴り響きはじめた。

けっして大きな音ではないけれど、だんだんと音が広がってゆく。

「…な、なんだ、この音は!？」

24 ふたりの絆と涙(前書き)

リーナ  
視点

## 24 ふたりの絆と涙

うるたえた声をあげたふとっちゃんを、えばりんぼさんが一喝した。

「落ち着け、馬鹿野郎！ さっきの女が何かを仕掛けてくるはずだつて、前もって教えてやったただろうがっ」

さっきのふたりのないしょ話は、その話だったんだ。

わたしは疑問と不安要素のひとつが消えたことに安堵しながら、マリナが鳴らしてくれた音に耳を澄ませる。

カタカタカタカタ…、カタカタカタカタ…。  
カタカタカタカタ…、カタカタカタカタ…。  
カタカタカタカタ…、カタカタカタカタ…。

リン、リン、リリン…。  
チリーン、チリーン、チリーン…。  
トン、トン、トトトン、トン、トン…。  
シャラララン、シャラララン、シャララン…。

遠くのほうから異なった音の響きが、かすかに聞こえてきた。

わたしは全ての地区の『仕掛け』が鳴っていることに安堵しながら、怒気をあらわにしたえばりんぼさんとふとっちゃんに、ゆっくりと説明をはじめた。

「これは村の中で『異変』が起きた時や、『危険』を知らせるために鳴らす音。村を五つの地区に分けて、それぞれ違う音を奏でるものを設置しているの。どこかひとつが鳴り始めたら、村全体の仕掛けがづぎづぎに動き始める」

「…んだと？」

「どの音が最初に鳴り出したのか…音の違いで『発生』した場所を伝えられるわ。だから、この地区に『異変』が起きたことは、もう村のみんなが知っているの。そして、この音を聞いたひとは全員、武器をもって発生地区へ駆けつけてくる」

「へえ？ ありふれた鳴子なるとこを改良して、そんな警戒態勢けいけいを敷いているとはな。こんなちなけな村に、たいそうな知恵者がいたもん  
だ」

えばりんぼさんは軽く口笛を吹くと、厳しい表情のままふとちよさんに命じた。

「ブラン！ とつと尻まくって逃げるぞ」

「…え？ ちよ、ちよつと待ってくださいよ、兄貴い…」

素早く身を翻して遠ざかっていくふたりの姿を、わたしは半ば呆然として見送っていた。

あのひとたちに『音』の説明をしたのは、警告と牽制のため。

わたしとマリナの身の安全を確保しつつ、わたしたちに危害を加えたら…駆けつけてくる村のみんなが黙っていないことと、欲しがっている情報が手に入らなくなることを覚さとらせるためだった。

追いかえすほどの効果があるなんて、考えていなかった。

大勢の村のひとたちがこの場所に集まってくると聞いて、即座に逃げ出したのはどうしてだろう？

あのふたりは「友達」に会いにこの村へ来たと言っていた。

本当に人を探していて、やましいことがないなら…ここに駆けつけてくる村のみんなに尋ねたり、再会できるかもしれないんだから、逃げ出す理由はないはずなのに。

誰かを探していて…でもそれを隠したい…人目につきたくない理由があるからだとしたら…それはいい？

「リーナ！」

思考の海に沈んでいたわたしの耳に、マリナの声が飛び込んでくる。わたしが後ろを振りかえると、マリナがわたしに抱きついていたのは、ほとんど同時だった。

「リーナ、リーナ、大丈夫？ あの一とたちに何かされなかった！  
？ どこか怪我は？」

マリナはわたしをぎゅうぎゅう抱きしめながら、矢継ぎ早に質問を重ねてゆく。

「…マリナ…」

わたしはマリナを落ち着かせるために、ぼんぼんつと背中を軽く叩いた。

「マリナ、わたしは大丈夫よ。ケガなんかしてないし、どこも痛く

ないわ」

「…本当に？」

「うん」

マリナはわたしを抱きしめていた腕をゆるめて、膝をついた。目線をあわせるために姿勢を変えてくれたマリナへ、わたしは謝罪のことばを伝える。

「ごめんなさい」

「…リーナ？ 何を謝っているの？」

「わたし、マリナを危険な目にあわせてしまったわ。守ってあげられなかった」

本当なら、ひとりでなんとかしてはいけなかった。

ジャックの代わりに、わたしがマリナを守ると誓っていたのに。

うつむいたわたしの頬を、マリナの手が優しくなでた。

「リーナがジャックの代わりに私を守ろうとして、たくさん努力してくれていることは、誰よりも私がよくわかっているわ。『守る』ことができたかどうかなんて、気にしなくていいのよ」

「…でも、わたしは…」

マリナはわたしの話をさえぎって、強い口調で問いを放つ。

「リーナは何故私を守ろうとしてくれるの？」

「わたしは、ジャックの代わりに…」

「じゃあ、リーナはジャックが家に居たら、私のことはどうでもいいの？ 気にならないし、関わりたくない？」

「そんなことない！」

思いがけない言葉に驚きながらわたしが否定すると、マリナはふんわりと微笑んだ。

「私も貴女と同じなのよ、リーナ」

「…。」

「ジャックが居ても、居なくても、私はリーナのこと大切なもの。リーナも、私と同じ気持ちだって、思ってもいい？」

マリナの問いに、わたしはちいさく頷いてみせた。

「リーナは、ジャックになろうとしなくていいのよ？ リーナはリーナ。ジャックの代わりを務めようとして、無理をしなくてもいいし、それ気に病む必要もないの」

「…でも、わたしは…」

「リーナがジャックに…ジャックと私に恩を感じていて、私たちの役に立つようにと、頑張ってくれているのは…とっても嬉しいし、助かっているわ。けどね、貴女は大切なことを忘れてる」

「…？」

「私たちが『家族』だっていうこと」

「…かぞく…？」

マリナは人差し指でわたしの鼻の先を、ちょんつと押した。

「ほら、やっぱり忘れてた」

「…。」

「貴女を孤児院から『引き取ってあげた』んじゃない。『面倒をみてあげている』のでもないわ」

マリナはわたしの瞳をまっすぐに見つめながら、ゆっくりと言った。

「私たちは、『家族』になったから一緒に居るの。お互いに助けあうことは必要だけれど、何かをしなければ…何かができなければ『家族』ではなくなる……なんてことは絶対に無いわ」

「…。」

「家族は他人ではないから、甘えてもいい。頼ってもいいの。支えあい、助けあうばかりではなくて、身内だからこそ、厳しいことを言ったり、言われたりもするけれど……良いことも悪いことも一緒に乗り越えていく仲間というか…」

「…良いことも、悪いことも…?」

「そう。人生、いいことばかりじゃないから。…でも、一人ぼっちじゃなくて、傍にいてくれる誰かがいたら、いつも以上に頑張ることができたり…」

言葉をさがしながら、マリナは一生懸命に話を続けている。

たぶん、マリナがわたしに言いたいことは、きのうの夜にハンナ先生が言ったことと同じ。

遠慮せずに甘えてもいい関係なのだというのを、わたしに伝えようとしてくれている。

もつとずっと前から、何度も教えてもらった。

ジャックやマリナ、ハンナ先生だけじゃなくて……たくさんの村のひとたちから、言われていた。

……でも、だけど、わたしは、孤児院あそこで知ってしまったから。

お腹がへったと口にするこさえ、許されない場所があるというこを。

かろうじて生きることだけしか、許されないこともたちがいるということを。

身寄りのない…『家族』がいない孤児<sup>わたし</sup>たちは、ソレがあたりまえのことだった。

あたりまえのことだと受け入れなければ、耐えられなかった。

甘えてはいけない。

わがママを言っではいけない。

孤児<sup>わたし</sup>たちには、甘えられる『家族』がいないのだから。

わがママを受け止めてくれる、『家族』がいないのだから。

他人に甘えたら、罰をうける。

与えられるのは、あたたかい手ではなくて、痛みだけ。

ジャックに拾われて…たくさんひとに優しくしてもらって、甘えてもいいのだと言われたけれど、わたしは『甘える』ということが…できなくなっていた。

どこまでが許される甘えなのか、わからなくて。

許してもらえないほど甘えたら、捨てられてしまつかもしれない。

孤児院へ戻されるかもしれない。

そう考えると、怖くて…できなかった。

甘えることよりも、「ここに居てもいい」って…みんなに認めてもらえるような子でいたかった。

すべてを失ったあとで、もういちど許された優しいぬくもりのある場所を、失いたくなかった。

『いい子』でいるための、お勉強や仕事は苦にならなかった。

…でも、本当は……。

「　　ない？」

わたしがおそろおそろしぼりだした声に気がついて、マリナはしゃべるのを止めた。

「…え？　リーナ、今、何て言ったの？」

「　　わたし、マリナの……迷惑になっていない？」

声がふるえそうになるのを我慢したら、かわりに涙がほろりとはばれた。

「わたしがいなければ、マリナは、ジャックを忘れて……誰かほかのひとと、幸せになれるの……」

おちついて話さなくちゃいけないって思うのに、涙は止まってくれなくて、呼吸すらうまくできない。

「わ、わたし…は、ジャックが拾ってきた、みなしこ孤児<sup>みなしこ</sup>なんだから、ジャックの代わりに、マリナが、わたしの面倒を、みつづける必要なんか、ない、の……」

しゃくりあげながら、わたしはマリナの顔に浮かんだ怒りの表情に気がついた。

マリナはわたしの肩に手をおくと、低い声で訊く。

「誰が、あなたにそんなことを言ったの？」

「……。」

「リーナ、教えてちょうだい。いったい誰が、あなたをそんなことを言ったの？」

「……町のひとたち」

マリナの勢いに押されて答えると、ちっと大きな舌打ちの音があたりを響いた。

「贈り物を突き返すだけじゃなくて、ひとりひとりフライパンで殴り倒しておくべきだったわ」

マリナからどす黒い何かがにじみ出ているように見えて、わたしはびっくりして目を見ひらく。

「……ま、マリナ……?」

わたしが呼びかけると、マリナはふっと表情をやわらげて言った。

「リーナが心無いひとたちの言葉で、傷つけられていたことに気がつかなくて……ごめんね」

マリナの指が、わたしの頬の涙を優しくぬぐってゆく。

「貴女が存在が迷惑だなんて……そんなこと、絶対に無いから」

「……ほんとう?」

「ええ、本当に。ついでに言うておくと、『同情』でも『憐れみ』でもないわ」

「……。」

「ねえ、リーナ……『家族』に一番必要なものって、何だと思う?」

私はね、血が繋がっていることじゃないと思うの」

「…？」

「お互いをどれだけ大切に思い、慈しむことができるかどうか…。その気持ちと行動が伴えば、血の繋がりに以上の絆が育っていくわ」

「気持ちと行動…？」

「ええ、そう。気がついていないかもしれないけれど、貴女はずっと前から自分の手で…気持ちを言葉にして、行動にして、私とジャックとの間に絆を育ててくれている」

「…きずな…？」

「そう。血の繋がりにしか信じられない人たちにとっては、価値のない…不確かな繋がりに見えるかもしれないけれど…」

マリナは花のように微笑んだ後、わたしをふわりと抱きしめた。

「私は、誰に否定されても、私たち家族の間にある絆を疑ったりしないわ」

ぎゅっと強く抱きしめられると、マリナの身体から石鹸の匂いがした。

去年マリナとふたりでたくさん作った石鹸。

肌をキレイにする効果のある薬草の花びらを混ぜて作り出した…ほのかに甘い香り。

ジャックが「とてもうまく作れたね」とわたしたちをほめてくれた香りをかいだら、また涙がぽろりとこぼれる。

「マリナ…わたし、ほんとうに、迷惑をかけていない？」

「もちろんよ」

マリナの答えを聞いても、まだ、怖れと不安はぬぐえない。

「わたしのせいで、マリナが不幸になるのは…いやなの。だけど、  
だけどね…」

わたしはくつついていた身体をはなして、マリナの顔をじっと見つめる。

そこに浮かぶ、一瞬の表情も見逃さないように。

「わたし、マリナとはなれたくない。いつしよに、いたいの。あのお家で、いつしよに、ジャックが帰ってくるのを待っていたい。…  
…そう、望んでも、いい？ 甘えても、いい？」

マリナがすこしでも迷ったり、答えに困ったら…あきらめよう。

そう思いながらマリナの表情をうかがっていると、マリナの瞳から大粒の涙がながれ落ちた。

「…それは『甘え』じゃないわ。そんなあたりまえのことに、許可なんて求めなくてもいいのよ」

「マリナ？」

わたしの呼びかけに、マリナは泣きじゃくりながら答えてくれる。

「…ごめっ、ごめんね、リーナ。私が、もっと早くに…言葉にして伝えて…リーナの不安を取り除いてあげなくちゃいけなかったのに。訊かれる前に、気づいてあげられなくて、ごめん…ごめんなさい…」

泣きながらくりかえし謝るマリナを見ていたら、鼻の奥がツーンと痛くなつて、止めようとしても涙が次から次へとあふれてゆく。

「ちが、う。マリナは悪くない。わたしが、もつとはやくに、きけばよかったの。…でも、ダメって言われたら、あの家から出て行かなくちゃいけない。そう思ったら、こわくて、きけなかったの。優しくされても、嫌われるのが怖くて、どうやって甘えていいのかわからなかったの。…ごめん、なさい…」

謝りながら、わたしは手をのばす。

はじめて自分からマリナに手をのばして、ぎゅうっと抱きついた。

あたたかい涙が、いくつもいくつも頬をすべり落ちてゆく。

「悲しいときだけじゃなくて、嬉しいときも、泣いて…でてくるのね」

「…うん。わたしも、はじめて知った。びっくり」

ふたりで泣きながらほほ笑んでいると、村のみんなの大きな足音と呼び声が、すぐ近くまで迫っていることに気がついた。

マリナはハンカチを取り出して、わたしの涙を優しく拭<sup>ぬぐ</sup>ってくれた。

わたしたちはゆっくりと立ち上がり、呼吸を整えてから…ふたりで手をつないで、みんなの足音が聞こえてくる方角へと歩き出した。

## 24 ふたりの絆と涙（後書き）

ご精読、応援ほち（投票）、web拍手等、いつもありがとうございます。

ご意見・ご感想、誤字脱字報告、レビュー、評価等もお待ちしております。

今回のお話は難産でした。途中で2話に分けようかとも考えたのですが、区切りが良い箇所がなく…。

最近一話の文字数を減らす試みをしていたのですが、全然ダメですね。

PC閲覧ではない読者の皆様、長くてごめんなさい。

えばりんぼさんがリーナに手を伸ばして、何をしようとしていたのか……という謎は解かれなまま、リーナ視点のターン終了です。

今まで「街」という漢字を使っていたましたが、城下の場合「町」の方が正しいようなので、ここからは「町」で漢字を統一させていただきます。

「王城の下に広がる町」王都 リーフア」を意味します。

\*\*\*

なる こ【鳴子】

田畑が鳥獣に荒らされるのを防ぐための仕掛け。

横板に数本の竹片をぶら下げたものを縄に掛け連ね、縄を引くと音が鳴るようにしたものなど、多種多様。

日本では「鹿おどし」のほうが有名ですね。

イルウク村では、「農作物を荒らし、家畜を襲う害獣対策」兼「異変や危険を伝達するための警報システム」として活用するため、手動でも発動できる仕掛けにあります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3593t/>

---

赤ずきんちゃんには気をつけて

2011年11月18日18時15分発行